
信念を貫く者

G-qaz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

信念を貫く者

【Nコード】

N8391X

【作者名】

G-qaz

【あらすじ】

目が覚めたら大自然。さらに自分の記憶も無い。

顔を見れば、あれ？この顔は…

さあ青年はこの先どうなるのか。作者も分からない。

第0話

青年は目覚める

そこは広大な自然に囲まれた世界

第0話

～目覚め～

—主人公side—

「ん…」

硬い土の感触を体で感じながら、俺は目を覚ました。
体を起こして周りを見てみると、

「どうなっているんだ、これは…」

あたり一面、森、山、森、山。上を見てみれば広大な蒼穹。

どこの大自然だここは。

しかも、そばには日本刀のような剣が刺さっているし。鞘どこだよ。
というか、なぜ俺はこんな場所にいるんだ。

「えっと…昨日…はっ!？」

思い出せんっ。

というより、俺は誰だ？

「ぐっ」

記憶をたどろうとすると込みあがってくる不快感に顔をしかめる。

これは、やっかいな事態だな。自分が何者なのかも、ここがどこなのかもわからん。
すると、

『ギャオオオオオオオオオオオツツツ!!』

なにかの鳴き声なのか雄たけびなのか聞こえてきた。

「……………本当にどこだよ。ここは」

第0話（後書き）

はじめまして。G—q a zと申します。小説を書くと言う行為など始めてが多い作者ですが、暖かい目でご覧になってください。執筆を始めた手前、何とか完成までさせたいと思っています。読みにくいとは思いますが、楽しんでいただけたら幸いです。

第1話

青年は己を知らず
窮地だけが彼にもたらされる

第1話

～現状～

—主人公side—

とりあえず、動かなきゃ話は始まらるので刀を肩に担いで、散策してみることにした。

道中、でかい足跡やら木々がぶった押されている跡やら食われた残骸みたいなのを発見し、俺が住んでいたと記憶する場所ではないと確認して、若干鬱になりながら進んでいくと馬鹿でかい湖を見つけたことができた。

俺にも幸運が残っていたことが分かって、すこしうれしかった。

そして、湖に食える魚でもいるかの確認と水を飲むために、湖に顔を移したら、

「この顔は…」

まあ、なんというかぶっちゃけ、る○○に剣心の斉藤一みたいだよ。この顔。

記憶に残っている顔より若干目とかが柔らかくなっている気がしないでもないが。

んじゃ、名前もそこから取るか？名前がなくては不便だろうしな。ふむ。なんか牙突とかやってみたくなるな。と担いでいた刀を構えてみたりしてみる俺。

そこで気づいた。俺は、刀というものに忌避を感じていない。
刀に慣れている奴だったのか？俺は。

ズウウウン！ズウウウン！

「っ！」

考え事をしていたらなにかがすげえスピードで近づいてきやがるな。
はぁ。ろくに自分のことも分らないのに、厄介ごととはどんどんき
やがるみたいだな。

刀を持ち直し、音のするほうへ体を向ける。

「さて、なにが出てくるのやら」

あれ？俺戦闘とかできるのか？？

第2話

青年を狙うは自然界の強者

そこにあるは弱肉強食の世界のみ

第2話

～俺の名～

『ギャオオオオツツ』

振り下ろされる大木を思わせる腕とその先にある鋼鉄のような爪。

キンッ

それを弾きながら後ろに飛びのく青年。

『ガアアツツ』

それを追い、開かれる顎が獰猛な牙を見せ、青年を襲う。

「うわあああ！」

～時を遡る事少し～

—主人公side—

「おいおい。やばいんじゃないの？これ」

戦闘ができるのか否かわからないことに気づき、更に、遠くに見えるは木々をなぎ倒しながらこちらに向かってくるでかい何かと、それに追われている動物の影が見える。

俺の持ち物は、なぜか違和感を感じない刀ひとつのみ。

………

………

………

…

よし、逃げるか。

そう考えがまとまったとき、

『グワァアツツ』

ちようど木々が開け、この湖が見通せるところでかい何かが、でかいイノシシを喰らう所だった。

おいおいおいおい、速すぎるだろ。さっきはもつと向こうにいたじやねえか。

ふと、でかい何かの全貌が分かった。太く長い尾。太く岩のような胴体。ギラツと光る爪を持った手。そして、今イノシシをむさぼっているでかい口と牙。

……えっ？ 竜？

俺がそんな風に呆けていると、

竜はイノシシを喰らい尽くしたのかいつの間にかこちらを見ていた。

そして冒頭に戻るわけだが、

「うわあああ！」

必死によける俺。空を切る竜の牙。

「はあっ。はあっ」

やばいな、これは。このままじゃ喰われちまう。どうすればこの状況を打破できるんだよ。

必死に竜の攻撃をかわし、弾き、食い止めながら考える。

「ん？」

そうしているうちに、ふと気づく。今俺は何をしている？

竜相手に防戦一方とはいえ戦っている。戦えている。俺は戦えている。

ドクンッ

意識した瞬間、体の感覚が研ぎ澄まされていくのを確かに感じた。

—side end—

それは違和感とでも言うべき感覚。先ほどの竜が捕食するための攻撃を与え続けていただけの光景。しかしその光景に違和感が生

じる。わずかな違和感。それは急激に戦況を変えていく。

竜はただ捕食する側であった。そして、その違和感に気づきながらも攻撃をやめず、その爪を揮った。

その爪は刀に難なく弾かれた。

次はその顎を開き、獐猛な牙を青年に向けた。

しかし、それを青年は竜にすさまじい速度で向かうことでよけたその瞬間。

竜の片腕が宙を舞った

『グワァァァアツツツツ』

竜は何が起きたか理解できなかった。ただいつも通り捕食しようとしただけ。今回は少し時間がかかっているが、それだけのはずであった。

この場所において頂点の位置に属する竜にとって、今この状況は理解不能な出来事であった。

—主人公side—

感覚が研ぎ澄まされる。体が自由に動く、どう動けばいいのか分か

る。竜に向かうことでその隙から腕を切り捨てた。俺は戦える。

振り返ると竜が雄たけびを上げている。もはや、勝てない相手ではないと、体が言っている。

そして、構える。

突き。

自然と構えはこうなった。体から力があふれる。負ける気がしない。

『ギャオオオオオオツツ』

竜が向かってくる。

だが、

俺はただこれを放つだけだ。

「はぁっ！」

ゴオツ！

放たれた突きから、凄まじい気が直線状に放たれ、竜を穿った。後に残るは、突き穿たれた竜の屍だけとなった。

構えを解き、一息ついて、

「ふう…。よし、決めた。…俺の名はハジメにするとしよう」

やはりしつくりきた。

第2話（後書き）

とりあえず、完成した分を投稿しました。

原作にはまだ遠いです。

書くというのは大変ですね。他の作家さんを尊敬します。ではまた。

設定（前書き）

主人公設定でも。

設定

登場人物

ハジメ・サイトウ

斉藤一のような顔をしている。目つきなどは柔らかい。

自らに関する記憶を失っており、目覚めた世界と自分がいたであろう世界との際に戸惑っていたが、竜を殺した件をきっかけに弱肉強食の世界に順応している。

完全な記憶喪失と言うわけではなく、一般常識など生活する上で必要な知識は有している。

牙突などが使えるのは、ハジメ自身が不思議に思っていることで、体自体が様々な技術を覚えており、ハジメはそれを何回もイメージや、実際にこなすことで、ハジメ自身が理解し使っている。（※その理由は一応考えていますが、作中に出すかは未定です。）

性格などはまだ少し野生に解き放たれたような常識人みたいなことを想定していますが、この後の話でまた変わってきたりすると思います。もう少しでハジメの信念の話をします。（作者の技量・構想不足でグダグダになるかもしれませんが。）

身体能力は異常の一言であり、気を含めてラカン以上である。

以上が主人公の設定となっています。

設定（後書き）

お気に入り登録がされていて、驚きと嬉しさが到来しています。ありがとうございます。

次回早く投稿できるよう、構想中です。
ではまた。

第3話

鍛錬の日々は青年を強者とした
交錯する運命は青年に何を求める

第3話

～到来する者～

—主人公side—

あの竜と戦って数ヶ月が過ぎた。あの感覚を忘れぬように、日々鍛錬をしている。

そうして、鍛錬をしていて気づいたことがいくつかある。

まず一つ。

この体は十二分に頑丈、性能を誇っているということ。驚いたことに、一日ずっと走り続けたり、素振りなどを行っていても翌日には平気という頑丈さ。更に、走ったりするときも、その速度が記憶にある足の速さというものを覆す速さなどなど、驚きの身体能力を持っていた。

二つ。

体が技術を覚えている。鍛錬をするにいたってどのようにするべきか考えて、とりあえず素振りや走り込みなどをしていると、自然と体がどのように動いていたかがイメージとして明確に浮かぶのだ。これのおかげで鍛錬の際、技術の習得が思う以上に捗った。言ってみれば、体が覚えている技術を頭に刻み込んだということだ。

三つ。

いわゆる気を使えるということだ。竜と戦ったとき最後に放ったも

のが気を使ったものなのだが、気を使うと身体能力も技も全てが格段にあがる。竜に風穴を開けたのもうなずける。今は制御に集中し、十二分にできたら、他の鍛錬方法もと考えている。

まあ、この体がとてつもなくすごいということと、戦える力を手に入れたということだ。この付近で戦いを挑むような生物がほとんどいなくなっただけだな。

さて、今日の獲物は何にするかな。

—side end—

—????side—

「はあっ、はあっ、はあっ」

畜生っ。まさかこれほどまでに深く奴らがつながっているとはな。しかし、ばれちまうとは。俺も未熟だったと言うことか。だが、そのおかげでやっと手に入れたこの情報。なんとしても、守り抜かなければいかん。やつらの思い通りになどさせてたまるか。

「いかなあ。あまり私の手を煩わせないでくれたまえ。溝鼠君…」

「なっ！」

しまった。もう追いつかれたか！

「死にたまえ：雷の斧！」
ディオス・テュコス

—side end—

—主人公side—

俺の倍はある動物がその体を地に倒す。
さて、今日の獲物の仕留め完了。

「ん？」

何かがこの付近に侵入したみたいだな。珍しい。しかも範囲が小さいから竜とかじゃない、この大きさは人とかか？

だとしたら面白いな。この世界で目覚めてからは近くの村人ぐらいにしかあっていないからな。

しかも、せいぜいが獲物の角や牙を村に卸すぐらいの交流だからなあ。

仲良くなったのは、龍だけだな。

そう、龍。とんでもないのが前来たんだ。まあ一回戦って仲良くなつてな。話すと思いのほか気があつてな。

そう、考えを脱線させていると、まるで雷のようなものが落ちたような音があたりに響いた。

「っ！」

今のはなんだ！？気とは違う気がしたが。竜のブレスか何かか、とりあえず行ってみるとするか。

—side end—

「??? side—

「ほう。今を防ぎきるか。ただの溝鼠ではない…か」

「くっ」

今のは、古代語魔法か？軽々と使うあたり、結構な使い手が追手としてきたということか。

逃げ…きれんな。逃がしてくれるとは思えねえ。実力はおそらく攻撃はあちらのほうが上。防御すれば何とかなるか？

とはいえ、こちらの防御を抜けるような魔法を使える可能性も十二分にある。まずいな。この情報はなんとしても闇に葬られるわけにはいかん。どうする…。

「ふむ。それをこちらに渡してくれれば、君を見逃してもいいのだがね」

「そんなことできるかっ！これは世界を変えるために必要な足がかりだ。…それに、見逃してくれるとは思えねえんだがな。」

「その足がかり。あっては困るのだがね」

フラグランティア・ルビカンス
「紅き焰」

レフレクシオ
「ぐうつ、氷楯！」

フレット・テンペスターズアウトリーナ
ヨウイス・テンペスターズ・フルグリエンス
「…吹きすさべ南洋の風！雷の暴風」

「なっ」

やべえっ！

「くっ！ぐわああああっ」

—side end—

あたり一面が焦土と化した中、

「ふむ。消えてもらえたかな？」

辺りを見回す、男の追っ手であろう紳士風の男

「ぐ、ぐうう」

「おや、生きていたか。魔力全てを障壁に回したのかね？」

「まあ、ここでどのみち死ぬのだからね」

静寂な中を追手の男の足音だけが響く。

瀕死の男に近づく追手の男。

そのとき、

「よう。こんなところで何してんだ？」

介入者が、現れた。

第3話（後書き）

作ると言うのはどの分野でもやはり大変ですね。
次回もなるべく早く投稿したいと思います。ではまた。

第4話

青年は誇りと信念を知る

そして、青年の運命は加速する

第4話

～理由～

—悪魔side—

「よう。こんなところで何してんだ？」

む。このような場所に人間がいるとは。しかし、これほど接近され、声をかけられねば気づかないとは…。私も耄碌したものだ。

「いや、なに。溝鼠を始末していたところだよ。狩場を荒らしてしまったのなら詫びよう。」

ここは龍すら住み着くような場所だ。それなりに実力があるのだらう。

「まあ、別にいいが。俺が聞きたいのは、そうじゃなくっ」

「このような相手に随分と本気を出してるようじゃないか。人間もどきが。」

「なっ」

いつの間にか人間は鼠のそばに。まったく見えなかった。この私がか。

「ぐっ。すまん。理由は…後で話す。た…助けてくれ。」

「ちっ。まだ、喋れたか。」

まずいな。実力が把握できん今、迂闊に動けん。

「ふむ。こちらの弱っているほうから事情を聞くとするか。ではな。」

そう言って、介入者は鼠を担いで消えてしまった。

「はあ。全く：とんだイレギュラーだな。面倒なことだ。」
そして、ニヤリと笑い、

「だが、面白くはなりそうだ。」

— side end —

— 主人公 side —

とりあえず、怪我してた奴を連れて来たわけだが、相対していた奴がこうしたのだろうか。あれがおそらく悪魔だろう。気が禍々しかつたしな。

「おい、大丈夫か？回復の魔法は使えるか？」

しかし、改めてみるとひどい怪我だ、左半身がひどい、特に左腕なんか焦げて炭化してやがる。これが魔法とやらの威力か。

「ぐっ。魔力は：殆ど残って：いない。」

「それよりも：話を聞いて：くれないか？」

そういうと男は、手から何かの端末のようなものを出した。

「これは？」

そう聞くと男は、

「この世界にはびこる腐った奴らと、世界を滅ぼしかねない組織の情報だ」

「なっ。なんでそんなものを貴様が？」

「俺は、ライルと言う情報屋だったんだが、ある人に頼まれてな…。最初は腐った奴らを消して、この世界がよりよくなるように思っってはじめてたわけだが…」

男は、自身の怪我を見ながら、

「とんでもないものが出てきちゃったわけだ。」

それから男の話を聞くと、この世界の裏、元老院や連合の裏や、帝国側とやらの裏。そしてその2つにもぐりこんでいるらしい存在の影を感じ取ったらしいが、それまでだった。そこで、先ほどの悪魔に追われ、ここまできたらしい。

「だが、もう限界だ。悔しいがな…体がもうボロボロだ。」

「…お前に頼みがある。」

そう言って、端末を俺に差し出す。

「これを託されてくれないか？」

「本気か？」

正気とは思えん。こんな場所であっただけの俺に、そのようなものを渡すだと？

「はは。なんかな。気に入っちゃった。お前の雰囲気かな、知り合いに似ていてな。」

「あいつは、自分の信念のまま逝っちゃったが、俺はどうかな。ど

「思うよ。」

「少なくとも、俺は貴様に信念と誇りを感じた。生半可な気持ちで国に、世界にこうは挑めん。」

俺はそう感じた。聞いていて、なぜそこまでして挑めるのか。怖くはなかったのか。

聞きたいことであつたが、この顔を見るとそれを聞くことはなぜか躊躇われた。そして思う。俺にはこのような思いが、信念があるのかと。

ふと、近づいてくる気を感じ、

「ちっ、あの悪魔が近づいてきているな。」

「なっ。逃げろっ！あの悪魔はおそらく爵位もちだ……。勝てるわけがない、こいつを持って逃げろっ！」

男は端末を俺に差し出してそう言うが、

「悪いな。俺にとって、この戦いで何か見つかりそうでな。逃げ出すわけにはいかん」

そう。先ほどの話を聞いてから、心がうずく。熱く冷たい何かが心を奮わしている。

おそらくあの悪魔と戦えば、これが何かが分かる気がする。ならば逃げ出す気になどなれん。

「は？なん」

「ほう。それは何か聞いてみてもいいかね？」

ここにたどり着いた悪魔がライルの声をさえぎり尋ねる。

「信念と誇りだ」

第4話（後書き）

うまくまとめられず、読みにくいです。未熟なのが如実に表れた気がします。

表現力がほしいなと思う今日この頃。ではまた。

第5話（前書き）

この作品は独自解釈、独自設定のもと書かれています。
そのような作品に嫌悪感を抱く方は戻ることをお勧めします。

第5話

青年は彼に憧れた
故に青年は背負う決意をする

第5話

～信念～

— 悪魔 side —

「信念と誇り…かね？」

「そうだ。俺はこの世界に来てからそういったものには縁がなくてな。考えることもしなかったわけだが、…そこの男に感化されてしまったようだな。」

そう言うのと、男は背中にあった剣を抜く。

「心が歓喜に奮えているのだ。悪いな悪魔、手加減し損ねるかもしれない。」

「ふっ。ふはははははは。…なめるなよ。人間風情が。」

「悪魔パンチっ」

身の程を知るがいい。

ダイオス・テュコス

「雷の斧！」

— side end —

— 主人公 side —

飛んでくる拳をかわした瞬間、雷が俺を襲ってきた。

が、俺はそれを切ることで防ぐ。

「はっ」

これぐらいなら、龍のブレスのほうに余程凶悪だったよ。

「貴様…今何をした…。」

「ん？」

なにか、悪魔が驚いているというのは滑稽だな。

「今、魔法を…き、切ったのか。貴様」

「何をそんなに驚く。そんなこともできなければこの場所では生きていけないんでな。」

「くくく。そうか。”そんなこと”か。面白い。」

「ふむ。認識を改めよう。我が名はハイエル・ヴァーグムント。子爵の位を持っている悪魔だ。」

「俺の名はハジメ・サイトウだ。冥土の土産だ、よく覚えておけ。」

「ハジメか。覚えておこう。」

そして構えるハイエル。

「一つだけ言っておくぞ。ハイエルとやら」

そう言って刀をハイエルに向ける。

「何かね？」

「本気で来い。生憎これから放つ技は容赦なく貴様を殺すぞ。」

「ふふふ。面白いな。だが！なめ過ぎだっ小僧！」
異形へとその身を変化させたハイエル。

空気が変わる。まさに一触即発の、戦いの空間。

だが、

これが

俺の望んだ瞬間、世界だ。

ずっと考えていた。俺は斉藤一ではない。だがあの男が生涯かけた信念。

「悪・即・斬」

なぜか、それはとても俺の心を震わすものだった。好んでいるといってもいい。斉藤一の牙突という技もこの体が覚えていただけだ。真に使えているわけでも、ましてや何も分からず、覚悟もないままの俺が使っているのかすらも迷っていた。

しかし、ライルの信念を誇りを聞き、とても眩しく見えた。心が震えた。

俺もこうありたいと。俺も背負いたいと。
ならば、たとえそれが他人のものであろうとも、この生涯をかけて

誇るべきものならば、俺は。

背負って見せようじゃないか。「悪・即・斬」その信念を。

見せてやろう、ハイエル。本気の牙突を。

俺の牙突を^{信念}：見せてやろう。

—side end—

そのときは訪れた。ハジメが構えたその瞬間、ハイエルがその膨大な魔力を一気に放出し、ハジメの目の前に迫る。

が、

「うぐあああっ！」

次の瞬間の光景はハイエルの攻撃に合わせたかのように牙突を放ち、ハイエルの胸を貫き穿つハジメの姿であった。

—ライルside—

な、何が起こったんだ。

ハイエルが、まさに悪魔のような異形の姿となり、それにハジメが構えた瞬間にハイエルが消えたようにしか見えなかった。

そして気づけば、ハジメの剣はハイエルを貫いていた。

ハイエルの後ろの森がなぎ払われてやがる…。
はは。強すぎだろ。爵位もちの悪魔を一撃…か。

「くく。ははは。」

笑い出すハイエル。

「私が手も足も出んか。」

体が塵になっていき、消えていくハイエルが口を開く。

「なに。貴様が弱かった。ただそれだけだ。」

それに応えるハジメ。悪魔を弱いと断言してやがる。

「はっはっは。そうか。私が弱いか。だが、世界を相手にどこまでその強情が貫けるのかな？ 楽しみだ、とても。」
見れないのが残念だがね。そういう残し、ハイエルは消えた。

「死ぬまで貫くに決まっているだろう。」「悪・即・斬」の信念とともにな」

どうやら、俺は死に際にすげえやつに出会ったらしいな。まさか、こんな奴に託せるとはな。

「おい、ライル。まだ生きているか。」

「ああ。なんとかな。それにとんでもないものも見せてもらったしな」

なんだよ。魔法を切るって。突きで森をなぎ払うなよ。無茶苦茶だ。

「お前の信念。確かに託された。安心して逝け。」

はは。偉そうだよなあ。お前。

まあ、本当に安心だなあ
実はもう眠くてしかたねえんだ。

「ああ。任せた…ぜ……」

—side end—

—主人公side—
さてこれぐらいで十分か。墓を建てるといっても墓石と花を用意するぐらいだからな。

後は、龍に別れの挨拶をし、まずは近い街から出発するでしょう。

ライル。託されたこの情報だが、自由に使わせてもらおうぞ。
世界を変えてやろう。「悪・即・斬」のもとにな。

「さて、行くとするか。世界を相手にするために。」

第5話（後書き）

もうすぐで戦争編に入れるかな、たぶんハジメは裏方ですが。原作は遠いです。そういえば、原作キャラまだ出てないや…。

未熟なのは十分承知のことですが、完結だけはさせたいと思います。ではまた。

第6話

青年は旅に出る

全ては未知の出来事

第6話

～始まり～

—主人公side—

ライルから渡された情報から一番近い街に来たが、街には活気がある。

裏通りは知らんが、なるほど。少し偏見を抱いていたようだ。上の人間が腐っていても生活するものは逞しい…か。

情報によるとゴールド・サージェンと言うらしい。なるほどこいつは連合とやらとつながりがあるらしい。

とりあえずは、標的がどのようなものか聞き込みをしよう。

「すまん、ちょっと聞きたいことがある」

………

………

………

…

「ふむ。なるほどな」

あらかた聞き込みを終え、少し休憩することにしたが、ひどいものだな。

私腹を肥やした豚の典型だ。ライルが懸念していた組織の繋がりは分からんが、それは奴の書斎なり何なりにあるだろう。

さて、遠慮は要らん。今夜決行することとしよう。

……

……

…

難なく忍び込むことに成功し、今こうして屋敷に侵入して、月明かりに照らされる廊下を、歩いている。

屋敷の情報は情報屋から仕入れて、迷うことなくゴルドがいるであろう書斎に向かっていているわけだが。

「なんだ。この警戒のなさは…」

呆れてものも言えん。

「ここか」

中から人の気配がする。当たり前だな。

さて、感覚を切り替えるでしょう。

—side end—

書斎の扉が開かれる。ゴルドは扉の方向を向いた。

「誰だね、こんな時間に。無礼な」

だが、扉の向こうには誰もおらず。

「ん？」

その瞬間、

「ゴールド・サージェンだな。」

ゴールドは後ろから聞こえる声と殺気に戦慄する。

「ひっ。だ、だれっか…」

助けを呼べるはずもなく、何がおきたか分からないまま、ゴールドはこの世と別れた。

—主人公side—

さて。ゴールドを片付けたわけだが、こいつがどんな繋がりを持っているか確認するでしょう。他にも有益な情報を持っているかも知れん。

………

………

………

…

ちっ。特に目新しい情報はないな。というより、この屋敷に人がいなさ過ぎる上に、資料から察すると、ゴールドは連合の末端だったようだな。

ライルが懸念していた組織の情報も分からなかったか。

まあいい。残念ながら、他にも悪即斬のもとに狩るべき獲物が、山ほど残っている。この組織とやらが分かるのは、そう遠くないはず。必ず突き止めて見せよう。

必ずな。

第6話（後書き）

いきなり中枢とかに行ける訳がないので、つなぎの様な話です。
このような話でも面白く書けたら良いでしょうに。日々精進、でも忙しい。ではまた。

第7話

舞台は整い始める

その脅威はいまだ認識されず

第7話

～世界～

— 完全なる世界 side —
コズモエンテレケイア

「はあ。これで何人目だろうね。」

そう呟いてアーウェルンクスは今届いた資料を机の上に置いた。

「今話題の、政治家殺しか？」

デュナミスがアーウェルンクスの呟きに反応する。

「そうだよ。もう少し早く起きていたら、死んでいた人数も多かっただろうからね。そうなっていたら、僕たちの計画に支障ができていたね」

「そうだな。だが、現状特筆すべき支障が出たわけでもない。まあ、操るべき人間が減ったというのは、操作がしにくいと言うことに繋がるが…支障というほどのことでもあるまい。」

「もう計画は始動している。後はどれだけこの戦争を長引かせるかだ。もし件の奴が邪魔すると言うならば…」

「そのとき、叩き潰せばいいだけのこと」

そう言って、デュナミスは資料だらけの部屋から退出していった。

「ふう。まあその通りなんだけどね。しかし、政治家殺しか。僕たちと繋がっている人間もちらほらいる。偶然：なのかな」
アーウェルリンクスは天井に目をやり、思考にふけていった。

—side end—

メガロ・メセンブリア
—M・Msiden—

「まだつかまらんのか！このふざけた殺人鬼はっ！」
机をたたきながら憤慨している老人。

「100万ドルの金をかけたのだぞ。暗殺者というのならそれほど強くないのではないのかね？」

「全く。我等を何だと思っておるのか。」

「申し訳ありません。しかし、顔も特定できていない相手に……」
老人たちを相手にしているであろう若い職員が平伏している。

「黙れ！」

「はあ。賞金稼ぎもボディガードも全く役に立たんな。」

「ぐっ」

メガロ・メセンブリア
職員の後ろに控えているM・Mと関係があるのであろう賞金稼ぎらしきものたちが顔をしかめる。

名のあるギルドや賞金稼ぎがもうすでに何人もやられているのだ。
言い訳もできない。

「とにかくこの男。至急に再手配だ。賞金額は倍の200万ドルにしておけ」

「我等の命を狙っているのだ。早急に事態の収拾を頼んだよ」

「はっ。分かりました。全力を持って取り掛からせていただきます。」
職員と賞金稼ぎたちが部屋を去っていく。

「しかし、顔どころか、名前も分からんとは。」
「厄介ですなあ。帝国との戦争もあるというのに。」

「そうじゃ。戦争じゃ。どこからか英雄となるような者を探さんとな」

「ふむ。それならば……」
そうして、老人たちは次の議論へと移っていった。

……
…

（「殺されている者全員が……。どうということじゃ？……あって見ぬことには分からんのか」）
幾人かを除いて…。

—side end—

—帝国side—

「ふむ。連合でもあったということか」
威厳を纏った王のような存在が喋った。

「はい。ですが、やはり件の男の有力な情報は無いようです。」

それに応える人間のような姿の男。

魔法世界人。

古き民と呼ばれ、角やとがった耳などの特徴がある存在。
彼らにとっても政治家殺しは他人事ではなかった。

「ふむ。ならばそちらに手が届くように、この戦争速く終わらせる必要があるかも知れんな。」

「使いますか？鬼神兵を」

「まだ早い…が、準備はしておけ。」

— s i d e e n d —

仕組まれた戦争は始まる。

様々な思惑が入り混じった戦争は終わりを知らず。

ハジメの行動がこの先どのように戦争を世界を左右するか、

誰も…知らない。

第7話（後書き）

日間ランキングに載ってる…。こういうものを見ると嬉しく感じますね。思わずニヤリとしてしまいました。その場面を友人に見られてしまいました……。

戦争編佳境に入ったら面白くなるかなあ。頑張りたいと思います。お楽しみいただけたら幸いです。ではまた。

第8話

人は一人では無力
青年は盟友を得る

第8話

～盟友～

—主人公side—

裏通りに入り、目的の場所へとたどり着いた。

古びた隠れ家のような雰囲気を持つ店だ。

扉を開けると、子気味よい鈴の音が来店を知らせる。

「いらっしゃい。」

初老を迎えた、温和な顔の店主がこちらを向く。開店したばかりなのだろうか、店内には誰もいない。

「古い知り合いと会ったが、なにか新鮮なものはあるか？」
そう言って、半分に欠けた銀貨を店主に渡す。

「はい、ございます。奥の席へどうぞ。」

銀貨を受け取りそう言うと、店主は出口へ向かい扉にCLOSEの札をかける。

奥の席に座り、少しの間待つことになった。

最近はどう手放せなくなった煙草に火をつけ肺で煙を味わう。

「ふう。」

吐き出した紫煙があたりに漂う。

…
…
…

ライルから渡された情報を手がかりに、私腹を肥やした豚、闇商人、様々な奴らを狩り殺してきたが、未だその闇は知れず。

コスモエンテレケイア
完全なる世界

ライルが黒幕であろうとふんだ組織。その名だ。だが、その目的が一切分らない。

最初は帝国とM・Mの中枢に入り込んでいるらしいと知って、武器商人と手を組んで稼ぐための戦争を仕掛けているのかと思いきや、今や下手したらこの先、ただ世界が滅びるまで戦争をするのではないかというほどに、戦争は激化の一途をたどろうとしている。

腐った奴らをいくら屠ったところで、また新たに腐った奴らが這い出てくるだけ…。やはり、奴ら完全なる世界の真の目的を知らないことには、始まらんか。

オステイアの奪還。これが帝国の侵略の理由らしい。
ふむ。やはり、オステイアになにかあるやもしれん。ライルの情報には欠けていたものだ。これだけ世界を巻き込んだ戦争だ。無関係なはずが無い。

オステイアに探りを入れるか。だが、情報がない。やはり、独りで戦うことはできても謀略の類を征することは無理があるな。まあだからこそ今日、ここに来たわけだが。

……
……
……

席に座って待つこと十数分経ったところで、向かいの席に男が座る。
「始めまして。マクギル元老院議員の秘書をやらせてもらっています。クーラと申します。あなたが今話題の政治家殺し【パイルドライバー】でよろしいですか？」

さて、待ち人が来たようだ。

「ああ。そうだ。ここに来たと言うことは、契約は成立ということ
でいいな？」

「はい。資料はここに。それでは失礼します。」
資料と思われる束と、情報端末を机の上に置き、去っていく秘書。

……
……
……

オステイアがどのような立ち位置にいるか、『完全なる世界』との
関係者の有無。それを知るには手元の情報では不可能。ならばどう
するか。

協力者が不可欠だ。情報屋では駄目だ。情報と言うものはありとあ
らゆるものが売れる。信用すらも。俺の情報を少しでもばら撒くの

は、これから先やりにくくなる可能性があるため却下だ。

ならば一蓮托生。俺の盟友、主足りえるものを探すほうがよい。それが政治家ならば特にな。

政治家の情報ならば、今まで屠ってきた連中の情報から連中が疎ましく感じている者を探せばよい。

そして、出てきたものがマクギル元老院議員。調べればなるほど。盟友足る存在であった。

ならば、こちらから出向く。そして、奴にこちらが知る情報を渡し、こちらの思惑、奴の理想、それらを話し合い、今契約を結ぶことに相成ったわけだ。

………

……

…

次の俺の戦場はオスティアか。どのような奴らがいることやら。

—side end—

—マクギルside—

まさか、あちらの方から来るとはのう。

それにしても今でも震えるわい。ハジメの立ち振る舞いはまるで暗殺者じゃな。実際そうじゃし。

しかし、メガロ・メセンブリアM・M内にまさかそのような組織とつながりがある奴らが

居ったとは。『完全なる世界』のう。奴らの目的とはいったい何な
んじやろうな。

…

…

…

そもそも、なぜわしがハジメと契約を交わしたか。ハジメと敵対し
なかったのはじゃ。

ハジメの行動に違和感を感じておったからじゃ。

わしがハジメの行動に違和感を感じたのはある情報からじゃ。ハジ
メが殺した役人。この役人についての情報が、わしの秘書から知ら
された。着服、癒着の類じゃな。そして、秘書にハジメが殺してき
たとされる者たちを調べてみると出るわ出るわ不正や汚職の数々。
げんなりしたわ。

だからわしはできればハジメに会いたかったのじゃ。協力できると
思っただんじやなあ。そしたら来るんじやもん。吃驚したわ。
ハジメの信念『悪即斬』。その信念にわしが切られぬ限りわしらは
協力できるじやろう。できれば一生協力したいもんじや…。

…

…

…

ノックの音が響く。

「誰じゃ？」

「私です。ただいま戻りました。」

ふむ。ハジメに資料を渡しに行った秘書が戻ってきたようじゃ。
「うむ、入ってよいぞ。ご苦勞であったな。」

さて、ではわしも頑張ろうとするかのう。

—side end—

政治家殺しのニュースは世界中に届いていた。

そして、民衆の興味を引いたのはその死体の異様さであった。
襲撃された政治家たちの死体にはどれも同じような傷があったためだ。

その傷は胸に風穴が空いているというひどいものだった。
それはまるで太い杭打ち機でも使って無理やり穿ったような傷跡だったため、件の者はこう呼ばれる。

【パイルドライバー】

と。

第8話（後書き）

はい。盟友とは爺でしたね。違うキャラを期待した方、すいません。いい通り名とか思い浮かばない。パイルバンカーと悩みましたが、ボトムズだし、魔法世界にあつたらおかしいだろうと杭打ち機にしました。どっちもあつたらおかしいですかね？壬生狼？どう広めろと。

始めの店主との会話は適当です。ただ、半分に欠けた銀貨を渡す事で、密談したいから部屋を用意してもらい、もう半分の銀貨を持った者を部屋に案内してもらう。という暗黙のルールがあつた、という裏設定です。すみません。こういうの好きなんです。

たくさんの方に読まれているようで、とても嬉しいです。頑張ろうという気持ちになります。ではまた。

第9話

青年は紅き翼を知る

紅き翼はただ自らの意思で飛ぶ

第9話

アラルブラ

（紅き翼）

「た、頼む。金ならいくらでもやる。だ、だから命だけはっ」

「…貴様の様な屑は、早々に死ね。」

何かを砕いたような音が暗闇の中に響き渡る。

「ふん。」

頭が砕かれた骸を、ハジメは無造作に投げ捨てる。

すでに臥していた他の骸とぶつかり不愉快な音が木霊する。

そしてハジメは、手馴れた手つきで啜えた煙草に火をつける。

「ふう。」

吐き出された紫煙と共に、ハジメは闇の中に消えていった。

地獄絵図とも言える闇の中へ…

…

…

…

…

…

—紅き翼side—

ここはオスティアのとある街。その一角にある飯屋。

「全く、これで何十人目だ。」

黒髪の剣士が新聞を見てぼやく。

「あゝ？ ああ例の政治家殺しか。爺どもも見つけたら倒してくれって言ってたなあ。」

赤毛の鳥頭が剣士のぼやきにそう応える。

「ええ。彼らからしたら、いつ自分の身に降りかかると知れない災厄ですからね。」

「後ろ暗い奴は怯えておるじゃろうなあ。」

ローブの男と爺さんのような口調の少年が鳥頭に続く。

……彼らは紅き翼^{アラルブラ}。連合側についているいわば傭兵のような者たちである。

「確かになあ。姫子ちゃんのこともあるしな。」

赤毛の鳥頭はナギ・スプリングフィールドと言い、膨大な魔力を有した魔法使いであり、紅き翼のリーダーでもある。

「オスティアの姫御子ですか。そうですね」

ローブの男の名はアルビレオ・イマ。にこやかな顔をして何を考えしているか分からない魔法使い。

「まったくだ。」

剣士の名は近衛詠春。生真面目そうな剣士である。

「まあわしらが議論していてもパイルドライバーは捕まるまい。顔もはっきり分かっておらんしの。」

少年の名はゼクト。口調は爺のようで、見た目は少年の不思議な者である。

以上の4名で構成されている集団である。

「しかし、パイルドライバーかあ。つええのかな。やってみてえなあ。」

ナギがそういうと、

「風穴を空けられるぞ？」

詠春がそう返す。

「ははは。しかし、なんで戦争には出ねーで、裏でこそこそやってんのかね？そいつ」

ナギが疑問を挙げる。

「さあ？少なくとも私たちの知れる範囲のことで無いのは確かです。」

アルビレオが笑顔と共に返答する。

「わしらの知らん戦争の裏とやらがあるのかも知れんしな。どっちみち知りたいならば、会わんことには始まらんじやろ。」

ゼクトがそれに補足する。

「それもそうだな。お、飯が来たみたいだぜ。いったきす。」

「あまりがつつくな、ナギ。」

そうして彼らは食事を始める。彼らを見ている者に気づかずに。

—side end—

—主人公side—

あれが紅き翼…か。なるほど。マクギルが推すだけの事はある。

あれだけの戦力ならば、メガロ・メセンブリアM・Mもそう手放したくはないだろうな。

しかし、オスティアに来てから情報収集に重きを置いて行動してきたが…。コズモエンテレイア完全なる世界について調べる上で、まさかオスティアでメガロ・メセンブリアM・

Mが出てくるとはな。そして、重要なファクターであるらしいオスティアの姫御子。そして、この戦争の発端である帝国のオスティア奪還への侵攻。

まだ、ピースは足らんがここオスティアが重要な意味を占めるのは明白だな。コスモンテレケィア完全なる世界も動いているようだしな。

そして、それらを含めた情報を考察すると、オスティアのトップまたはそれに準ずる者が怪しいと考えられる。

…全く、コスモンテレケィア完全なる世界はどこまで入り込んでいるのやら。ここまできるとライルの情報も氷山の一角でしかなかったということか。

さて、オスティアの上層部か。どこまで黒いのやら。それに完全なコスモンテレケィア世界の目的も知らんとな。まさか、本当に世界を転覆させるつもりかもしれないな。いずれ分かることか。

では、行くとするか。

—side end—

—マクギルside—
むう。困った…、困ったのう…。

ハジメの情報や、わしの情報を照らし合わせれば帝国が次にオスティアを攻め込む際は、以前より更に戦力を拡大して侵攻してくるようじゃ。

いくらオスティアといえども、厳しいものがあるはずじゃ。新進気鋭の紅き翼が今オスティアにいるとしても、不安じゃ。

ハジメも捜査や諜報ばかりでなく、表舞台に出てもらいたいものじ

や。奴なら紅き翼以上の働きができるじゃろうしな。

…いい案ではなかろうか。ハジメの今までの行動は恐らく誰も把握しておらんじゃろう。わしも出会わなかったら、分からなかったじゃろうしな。

よし。ハジメに頼んでみるとしよう。決めたなら即行動じゃ。

「おーい。誰かおらんか？」

………

……

…

第9話（後書き）

休みなので、書き上げ中。今日中に、後2話ぐらい上げる予定です。
ではまた。

第10話

青年は黄昏の姫御子に出会う
そして、青年は舞台へ上がる

第10話

～表舞台へ～

オスティアの内部を探ろうとハジメは動いた。
しかし、マクギルの緊急の連絡により、本国へ戻ったハジメだったが、
そこでマクギルがいった言葉は、戦場へ出てもらいたいと言うものだった。

—マクギル side—

「どういうつもりだ。マクギル」
ハジメは吐き出した紫煙を辺りに漂わせこちらを睨んでくる。
おお。この殺気は寿命が縮むのう。

「次の帝国によるオスティアへの侵攻を食い止めてもらいたい。と言ったのじゃ、ハジメ。」

場の雰囲気が凍る。

「俺にそのような暇はない。コスモエンテレケイア完全なる世界の目的を知るために、後もう少し情報が必要だ。奴らに踊らされているような連中を助ける義理はない。」

「それで無関係のものが死に逝くとしてもかの？」

いくらこの戦争が帝国、連合双方に入り込んでいる完全なる世界に
コスモエンテレケイア
よるものじゃとしても、それで死に逝くものはただ、己の正義のため、家族のため、生きるためのものばかりじゃろう。

「…」

ふむ。思うところがあつたのじゃろうか。空気がすこし和らいだの。

「それにこのオスティアの姫御子の話。真実だとするならば酷いものじゃ。もしまた、帝国がまたオスティアに侵攻してくるならば彼女もまた、兵器として利用されてしまうのじゃろう。」

「オスティアの姫御子か…。」

何か考え込んでるようじゃのう。姫御子になにかあるんじやろうか。

「…完全なる世界の連中も姫御子を、重要なファクターとして認識
コスモエンテレケイア
を持っているらしい。」

「なっ。なんじゃとっ！」

き、聞いてないぞい。そんなことは！

「不確かな情報だからな。それに貴様が、姫御子についてオスティアに干渉すればバレる可能性があつた。」

「うっ」

それも確かにそうじゃ。今まで大して干渉しようともしていなかったわしが出てくれば、怪しまれるのは仕方ないの。

「だが、帝国が侵攻してくるとするならば、姫御子を出すだろう？
奴らは。」

「っ！ま、まさか、お主…」

「やはり、実際に会ってみないとな。百聞は一見に如かずという。オスティアの連中の内部もより知れるというものだ。」

そして、ハジメはニヤリと笑った。

な、なんちゅう顔で笑うんじゃ。な、泣いた子供も泣き止むのう…恐怖で。

「では、オスティアに行くでしょう。」

そう言っ、立ち去ろうとしたハジメだったが、数歩歩いて立ち止まった。

「ん？まだ何かあったかの？」

「いやなに、オスティアで紅き翼に会った。」
なんと。

「ほう。それで、どうじゃった？」

「鳥頭含め全員が一線で戦えるであろう強さを持っている。だが、
「だが？」

「俺とは馬が会わんだろうな。まっすぐな正義を信じる奴らだろう。」

それなら、ハジメとはそりが合わんかもしれんのう。

「うむ。分かった。」

「ではな。」

そう言っ、ハジメは去っていった。

—side end—

…
…
…
…
…

オスティア 一戦場一

「くっ。奴らが来たぞっ！」

ローブを纏った男が叫ぶ。

すると、同じような姿の男たち、中心にいる少女の周りを慌しく動く。

「仕方ない。また役立ってもらおうとするか。」

「このような幼子が…。不憫な」

「愚か者が。見た目に惑わされるでない。これは兵器モノと思え。」

「ふう。全く。…生きぎたない連中が多すぎるな。ここは。」

そこに突然、剣呑な雰囲気纏った男が現れた。

「そんなものに頼るぐらいなら、潔く死ねば良いものを。」

その言葉にローブ姿の男の一人が叫ぶ。

「な、何者だ。貴様。傭兵ならば、さっさと戦場に戻れっ」

すでに周囲は帝国の戦艦や鬼神兵が侵攻しており、戦場と化している。

「ふん。そんな無愛想娘に頼るしか能のない貴様のために来たんだよ。分かったら早々と退け」

「はっ。貴様そんな丸腰で何ができると言うのだ。まさか、帝国のスパイか何かか？」

ローブ姿の男がそう言うが、男はそれを見無視し、帝国の戦艦や鬼神兵を見通せる場所に立ち、構える。

「おいおい。：最後の警告だぞ。さっさと：っ」

ローブ姿の男が黙った。

構えた男から凄まじい力を感じたからである。

その男の姿を見て、気づくものがいれば気づくであろう。それは咸卦法という究極技法の一つ。アルテマ・アート

そして男は、その力を解放する。

「っ！」

凄まじい力が指向性を持って帝国の戦艦や鬼神兵を襲う。

「っ：なんと。」

ローブの男が呆ける。

戦艦は黒煙を上げ沈んでいき、鬼神兵をなぎ払った。

—主人公side—

牙突・零式。飛び道具が欲しいと思っていたが、咸卦法とあわせる
と凄まじいの一言だな。賞金首になっている今、表で刀を使うわけ
にはいかんからな。咸卦法の力を刃とし、放つ。使い勝手が良いな。
さて、後ろで呆けている奴らはどうするでしょうか。そう考えて振
り返る。

と、無愛想娘こと姫御子と目が合った。

「：：からっぽだな。絶望もできんか。」

無意識に言葉が出ていた。それほどまでに、無愛想娘の目は空虚なものだった。

目が合って見詰め合うこと数秒、

「今こっちですげえの見たんだが、誰が使ってたんだっ？」

そこで突然、空気も読まずに鳥頭が現れた。

ここは戦場だぞ。阿呆が…。

「なっ。千の呪文…」
サウザンド

この阿呆が現れたことで、役人どもが慌ててやがる。

「はあ。」

思わずため息をつくと、

「お？もしかしてお前だな。（辺りを見渡し）見るからにお前だな。」

鳥頭が詰め寄ってきた。なんと鬱陶しい。

「黙れ。鳥頭。それより、後ろを見ろ阿呆。まだ終わってはいないぞ。」

その言葉に振り返る鳥頭。

「それもそうだな。よし。んじゃさっさと倒しに行こうぜ。おい、お前ら」

そこで空に声をかける鳥頭。仲間も来ていたようだな。

「ふむ、その無愛想娘をさっさと中へ戻しておくんだな。巻き込まれるぞ？貴様ら」

「くっ。言われずとも。お前らこそ、さっさと倒して来い」
そう捨て台詞を残してローブの男たちが無愛想娘を連れて去ってい

った。

「ん？ 姫子ちゃん助けてたのか？ お前」
そう尋ねてくる鳥頭。

「ふん、馬鹿いってないでさっさと行くぞ。ど阿呆」
「くっくっく。おう。行こうじゃねえか」

さて、仕事は果たすでしょう。

—side end—

紅き翼と一人の男がオスティアの防衛に加わってからは、ただただ一方的であった。

大呪文と気砲ともいうべき拳撃や斬撃に帝国の戦艦や鬼神兵は敗れ去り、帝国のオスティア回復作戦は失敗に終わったのであった。

第10話（後書き）

ま、まだいける…。

第11話

青年はとうとう真実に触れる
しかし未だその全貌は知れず

第11話

～王と敵～

帝国は敗れ去り、一時の平穏が訪れるオスティア。
平穏な夜の帳の中、ハジメは目的のために城内に入り込んでいた。

—主人公 side —

しかし、鳥頭もしつこかったな。全く、酒もろくに飲めなかった。

：

……

……

戦いが終わり、宴があった。と言っても、酒を飲み、飯を食らって
ただ勝利を祝うものであったのだが。

俺もそこで、久々の休憩をかねて酒を飲んでいたわけだが…、

「なあなあ。お前名前なんていうんだ？　というか俺と一戦しようぜ
っ」

この鳥頭が何を思ったか知らないが、やたらと話しかけてきて鬱陶
しいことこの上ない。

「静かに酒も飲めんのか、貴様は。」

「いいじゃねえか。宴なんだしよ」

そういつて、満面の笑みで笑う鳥頭。

…っ。

いかな。思わず手が出るところだった。

「はあ、黙れ。阿呆が。」

「ははは。すまないな。ウチの馬鹿が、迷惑をかける」
そう言って、こちらに近づいてくる近衛。

「ふふふ。ナギもあなたと出会って、嬉しいのでしょう。」

近衛と一緒に近づいてくるアルビレオ。

「知るか。鳥頭をしっかり管理しておけ。」

「なんだとお。俺は管理されるようなちっちゃな男じゃねえ。俺は
サウザンドマスター
無敵の千の呪文の男だぜっ」

そう言って、派手なパフォーマンスをしだす鳥頭。

「いいぞ。兄ちゃんっ。もっとやれえ」

そしてそれに乗っかって、ドンちゃん騒ぎをしだす面々。辺りはど
んどん騒がしくなっていた。

………

………

…

はあ。今思い出しても鬱陶しい。まあ忘れるでしょう。

さて、仕事をするのでしょうか。

戦いが終わって勝利の余韻を味わっている今。次の戦いへの布石も
含め、動く連中がいるはず。警備も緩くなっているため、手がかり
を掴める好機。逃すわけにいかん。

しばらく、探っていると、秘書の書斎らしき場所にたどり着いた。
中に誰もいないことと、侵入者用の魔法を全て解除して入る。

ここ最近の王族や渡来してきた役人どもの情報や、金の流出入を
認していく。

……。

あらかたの資料を暴き終わると、ふと机に違和感を感じた。

…これは、隠蔽、認識齟齬系の魔法か？

そして、魔法を解除すると出てきた引き出しの中に入っていた資料
を見ると、

「っ！」

コスモエンテレケイア

完全なる世界に関しての秘書の手記が書かれていた。読む速度を上
げる。それらしき組織がいつごろから、どの頻度で来たかなど秘書
の感想らしき文と共に箇条書き程度ではあるが、確かに記されてい
た。そして、最後は帝国が侵攻してくる前。数日前で終わっている
が、書かれていることに俺は驚いた。

コスモエンテレケイア

どうやら、完全なる世界と王族の誰かが近いうちに密会を行っ
たらしい。

…まさか、今日か？ありえない話でもない。

俺は、部屋の状態を元に戻し、部屋から出て行った。

— side end —

…：王城の裏手、誰も踏み入れないような場所に2つの人影があった。

「言われたとおり、秘書も手記も始末しました。しかし、驚きまし
たな。まさか手記に残しておったとは」

威厳とも言えるような雰囲気を纏った壮年の男が口を開く。

「いや、始末したならいいよ。僕らの存在を公にするわけにはいかないからね」

もう一つの影は、どこか人形を思わせる雰囲気を纏った青年であった。

「その通りですな。では、これからの話に移るとしましょう。」

「そうだね。」

そして、彼らには見えない位置で一人の男がそれを聞いていた。

—主人公 side —

部屋を出た俺は、奴らがいるかも知れん場所を気も用いて探索し、奴らを見つけた。

そして奴らに気づかれんように、十分距離をとった場所で壁を背後にし話を聞いていたわけだが、今聞いた情報を自分の中で整理する。まさか、先ほどの秘書はもう始末された後だったということか。だが、手記はあった…。どうということだ？

いや、今は奴らの会話を聞くことに専念しよう。とうとう、コスモエン
テレケイア完全な世界の奴らの足跡を見つけたのだからな。

「…次は、…紅き翼には退場…にでも…もらおうか。」

「そうですね。あまり…でも困りますからな。…駒として有力な…ですからね。」

…
紅き翼？鳥頭たちの事か。邪魔というのはどうということだ？
…

「お姫様には……てもらおうか。その……には、君たちも……だよ。」

「しかし、……なのでは？ 実際に……。」

お姫様：分かんない。無愛想娘のことか？

：

「最後に、……についてなんだけれど、何か知っているなら……」

「いえ、ですが……のつもりです」

「っ！そこにいるのは誰だ！」

っ！見つかったかっ！？

仕方ない。逃げるか。

—side end—

青年が一気に距離をつめ、壁を破壊する。

「…気のせい…だったのかな？」

辺りに気配はなかった。青年は勘違いだったと思うことにし、

「まさか、奴の仲間でもいたのでしょうか」

壮年の男が問うが、青年は、

「いや、恐らく僕の勘違いだよ」

と返した。

「そうでしたか。珍しいこともあるのですな」

壮年の男は、さも驚いたかのように応える。

「……そうだね。」

そう言って、青年は崩れた壁を見て、夜空を見上げた。

夜空には何かを暗示するかのよう、月が輝いていた。

第11話（後書き）

次話は夜に更新すると思います。ではまた。

第12話

青年は信念のもとに斬る

斬り去ったものに振り返らない

第12話

～王殺し～

月の明かりだけが辺りを照らす中、一人の男は佇んでいた。

—主人公 side —

煙草に火をつけ、いつものように味わう。

「ふう。」

吐き出した紫煙が辺りに漂い、霧散する。

まさか、いきなり当たりとはな…。オスティアが怪しいとは思って
はいたが、上はその殆どが黒いのかも知れんな。

まずは、あそこにいた人物。それとその周りの人間。それで、あの
男…コズモエンテレケィア完全なる世界のこと分かるはず。

無意識に口が曲がるのを俺は自覚した。

首を洗って待っている、コズモエンテレケィア完全なる世界。貴様らを表舞台へ引きずり
出し、その首切り落として見せよう。

：

：

：

帝国がオスティアを撤退し、早くも1週間が過ぎた。

俺は、オスティアの王族を洗いざらい調べようとしたわけだが、随分と王族と言うものは歴史や文化を大切にしているのだな。

恐ろしいほどの資料が王都が管理する図書館に並べられていた。マクギルに出させた許可証を用いて一般では閲覧出来んような資料も含めるとその量は圧巻の一言に尽きる。

オスティアの王族には様々な家系に分かれているらしく、各々がこの王都オスティアの王族としてこのオスティアを支えているらしい。ご苦労なことだ。よく滅びんな。

王族の主要人物を調べているだけでも数日かけた。そして、あの夜あの場所にいた人物。それがウェスペルタティア王国国王。…国王自らが世界を滅ぼしかねん完全なる世界のような連中と繋がっているとはな。

コスモエンテレケイア

…もしかしたら、完全なる世界は、何か違う目的を持って動いている？王族のトップが率先して動くのは不自然極まりない。

世界を衰弱させ征服する？まさか。それこそ、今奴らが持っている繋がりを発揮すれば、それこそ世界など意のままだ。

なら、なんだ？…魔法世界…オスティア…帝国…連合…世界を巻き込んだ戦争…、そして…オスティアの姫巫女。

コスモエンテレケイア

何をするつもりなんだ？完全なる世界は…。

分からんなら…、聞くしかないか。

—side end—

オスティア、王城の円卓に十数人の影があった。

そこでは王族のトップが集まり、あることについて話し合っていた。

……

「…ふむ。順調ではないか。悲願が叶えられる日も近いな」

ウェスペルタティア国王が、嬉しさがにじみ出ている顔で話していた。

「ええ。『楽園』はもうすぐですな。」

その言葉に他の王族もうなずく。

コスモエンテレケイア

あることとは、完全なる世界が行おうとしている魔法世界の滅亡と、その救済である『楽園』についてであった。

そして、それらが順調に運んでいて、話し合うこの場の雰囲気は至って和やかであった。

が、

「『楽園』…か。興味深いな。詳しく話を聞かせてはもらえんか？」

そこに男が扉を背にし、傲岸不遜に割り込んだ。

—主人公side—

全く、王族というのは阿呆ばかりか？こんな場所に集まるとは秘密の会合があるといっているようなものだろう。

だが、そのおかげで、こうして奴らに関して聞く機会ができたのだから歓迎すべき事態だ。

「な、何者だ。貴様っ！」

「ここがどこか分かっているのか!？」

老人共が騒がしいな。

「黙れ。俺が聞きたいのは、今喋っていた『楽園』を含めた完全な世界：奴らの目的だ。」
テレケイア

コスモエンテレケイア
完全なる世界で顔色を変えたか。

なるほど。他の王族は全員国王の手駒であり、目的も知っていると。
…。なら話は早い。

「大人しく話すなら見逃すが…、抵抗するか？」

「くっ。王家の血をなめるでない。賊如きがっ」
そう言っ、こちらに魔法を放ってくる若き王族。

それに対し、俺は腰に携えた刀を振るい、魔法を切る。
「なっ」

そして若き王族へ瞬動で後ろに回りこみ、返す刃でその命を屠る。

一気に静まる円卓。

「貴様らがしてきた事は、把握している。コスモエンテレケイア完全なる世界に支援していた事、帝国、連合に入り込んだスパイ、傭兵の事、そして…今回の戦争が始まったとき、貴様らが裏で何をしていたか。楽しかったか？ 辺境をつぶすのは」

「馬鹿なっ！なぜ計画が知れている！？」

国王が叫んでくる。

なぜ？調べようとすれば調べられるんだよ。動かすのは貴様らでも、動くのは民だ。阿呆が。

「…貴様らは『悪即斬』のもとに…断つ。」
そう、貴様らのようなものを断つ為に、俺は『悪即斬』の信念を背負ったのだからな。

そして俺は、刀を構えなおし、王族どもと向かい合った。

……

刀が振られるたびに、腕を足を首を斬られる者が増えていく。

……

飛び散る血に円卓は、部屋は血に染まっていく。

…

「うっ。ぐああ。」

老いた王族の胸に風穴を空けた後、牙突の構えを解く。

「さて、貴様で最後だな。国王」

俺は、国王と対峙した。

「くくく。なぜ、そこまでの強さを、信念を持っているというのに…、彼らの、我等の理想を理解しないのかね？」

「ふん。目的も分からんような奴らのために振るう剣など持っていない。」

そう言い捨てると国王は、

「はっはっはっは。では、教えてあげよう。彼らの、コズモエンテレケイア完全なる世界の理想を。」

「まずは、この世界。魔法世界の成り立ちからだが……」

……

……

……

…

「そして、彼らを救うために作り上げられる、理不尽も不幸もない『楽園』に、世界は移り住むという事だ。素晴らしい事であろう。彼らは、我等は世界を救うのだ！」

国王は嬉々として語った。俺は話の途中で吸った煙草を吹かしながら、

「ほう。魔力が枯渇し、消えていく魔法世界と『いない』はずの魔法世界人を救うね。」

重要な要点を反芻した。

「そうだ。素晴らしкаろう。ならば、今からでも遅くない。貴様も……」

「下らんな。」

俺の言葉に呆ける国王。

「正気で言っているのか貴様」
顔を憤怒の形相にした国王が問うて来る。

「正気も何も下らんといったのだ。何だその世界は。理不尽も不幸もない？ そんな場所に住めるほど人間はきれいではない。」
更に続けて俺は言う。

「それにだ。今を生きている者が掴み取った幸せを無碍にする事が許せん。それは貴様らが行う事でも区別する事でもない。救いたいというならば、魔法世界の者全員に今の話を聞かせるがいい。わざわざ世界を滅ぼすような真似をせずともよかろう」

「世界を滅ぼさねば出来ぬ救いならば、しないほうが良い。神にでもなったつもりか？ 貴様ら……」

「黙っておれば、好き放題言ってくれるな賊がっ！」
憤慨して、こちらに攻撃を仕掛けてきた国王。

「それは、こちらの台詞だ。あまり好き放題してくれるな。この世界はお前らの世界ではない。たとえ作ってあったものだとしてもだ」
その攻撃をよけ、国王の心臓に狙いを定め、突きを放つ。

「がっ」

貫かれた反動で痙攣する国王。飛び散った血がすでに撒き散られていた血と混じる。

「本当に世界を、人を救うという事はそうではない。それに、人はそれほど弱くはない…。」

む。誰か駆けつけてきたか。当たり前か。門番が事切れているのだから。

さて、コスモエンテレケイア完全なる世界。貴様らの目的は知った。だが、それは止めさせてもらうぞ。

窓に飛び乗り、虚空瞬動で空を駆ける。

「……王っ。…父上っ……っ…」

…暫くは、裏の諜報だけになりそうだな。

—side end—

ウェスペルタティア国王含め十数人の王族が殺された事は、オステ
イア王都だけでなく、帝国、メガロ・メセンブリアM・Mの連合を驚かせ、もちろん完全
エンテレケイアなる世界にも衝撃の出来事であった。

コスモエンテレケイア
—完全なる世界side—

「くっ！」

振り上げた拳を思いっきり机に叩き落とし、その結果机は粉々になった。

「なんてことだい。まさか、こんな事になるとはね。」

アーウェルンクスが、重々しく口を開く。

「早急に実行犯を探す必要があるな。」

デュナミスが提案する。

一見冷静そうな彼らだが、すでに回りはボロボロであった。デュナミスも握りこぶしで血がにじみ出ている。

「大幅な計画変更だよ。だが、戦争は、計画は終わらせない。みんなを集めるのは頼んだよ、デュナミス」

「心得た。忙しくなりそうだな。」

デュナミスは未だに八つ当たりをし続けている他の面々を呼びに行った。

「まさか、最近はある事が無かったパイルドライバーが？これは僕たちも探しに出なければいけないかな」

そう言ってアーウェルンクスは、部屋を出て行った。

—side end—

歯車は加速する。

ハジメは真実を知った。

しかし、その信念はその真実を否定し、ハジメは^{コズモエンテレケイア}完全なる世界と対立する。

戦争は佳境を迎えようと激しさを増していく。

第12話（後書き）

アリカのクーデターフラグを叩き折っちゃいました。一応続きとかは構想しているんですが、少し無理やりの展開かもしれませんね。ではまた。

第13話

青年は王女と出会う

彼女の瞳に青年は何を思う

第13話

～出会い～

—主人公side—

「で、これはどういうことだ。マクギル。」

少々目つきがきつくなるのを自覚しながら、マクギルの隣でこちらを睨んでくる小娘を無視して俺はマクギルに聞いた。

「ふおっふおっふお。もう会って話をしようじゃのう。…印象は最悪のようじゃがのう…。」

話を変えようとするマクギルをもう人睨みし、

「誰が仕組んだ事やら。…今度はどんな頼みごとだ？マクギル。」

そういうと、マクギルは少し呆けた後にやりと笑って、

「この方を護衛してもらいたいのじゃ。」

…一遡る事約一時間前…

朝となり、人が行きかって騒がしなくなる時間に俺は静かな喫茶店の奥で一服していた。

この喫茶店は、俺がマクギルの秘書と契約の確認をした喫茶店で、それからというもの、俺が本国でマクギルと会うときは、いつも利用している喫茶店だ。だからなのか、いつも人は居ない。

いつもの通り、マクギルに渡された欠けた銀貨を渡し、奥の部屋に

行く。

つまり、俺はマクギルと待ち合わせをしているわけなのだが…、

「…遅い。」

すでに約束の時間から30分は経過していた。普段はこんな事はない。襲撃でもされたか？それとも、とうとうボケが始まったか？いや、他にも……

そんな事を考えていると、

「すまぬ。道が分からなくてな。遅れてしもうた。」

現れたのはローブをかぶった小娘だった。

「…。小娘、貴様何者だ？」

「む。誰じゃ貴様は。気安く話しかけるな下衆が。」

ミシリと空間が悲鳴をあげた。

おっと。いかな。思わず力んでしまったようだ。

「ほう。小娘如きが、偉そうな口をたたくな。程度が知れるぞ？」

「話しかけるなと言った筈なのじゃが。言葉が通じておらんかったのかのう。」
ほう。

「ふっ。なぜ貴様の様な小娘の言など聞かなくてはいけない？少々、多大に自らを省みたほうが良いな。妄言もほどほどにしておけ、小娘。」

「っ。…ふっふ、私を知らんのか？無知もほどほどにしてほしいも

のじゃ。」

「ふう。名乗ってもいない、ローブをかぶっているような者を知っているとしても？その年で呆けたか？小娘。または、自意識過剰の阿呆かどちらかか。」

くく、我慢でもしているのか、手が震えているな。笑ってしまいそうになるな。

「…っ。ならば、私の顔を見て後悔しろっ。」

そう言って、ローブを取った小娘の顔は、…

俺が殺した国王の娘、ウェスペルタティア王国王女アリカ・アナルキア・エンテオフュシアだった。

「いやあ、すまんのう。少々ごたごたが起きておって…のう」。

マクギルがやつと来たわけだが、この場の空気を悟ったのか。

「ふおっふおっふお。わしが最後じゃったかあ。」

俺と小娘…アリカ王女との間に座った。

—そして、冒頭に戻る—……

「な。誰がこんな無礼な男を護衛になどっ。」

小娘が、先ほどの事を根に持っているのか憤慨した様子でマクギルに詰め寄る。

「いや、じゃがしかし、そこに居る男、ハジメは世界の情勢を良く知っておるし、暗殺などにも鼻が利く。なによりも王女を任せられるほどに…強い。」

「む。しかし…。」

そして、こちらを睨んでくる小娘。

「ふう。」

俺は、いつものように煙草を吸い、紫煙を吹く。

「マクギル。護衛の必要性となぜ俺なのかの理由を教えろ。」

そうマクギルに聞く。まあ、理由には見当がついているがな。

「ふむ。まず必要性じゃな。国王が死んだ事はもう知っておるの？」

「…ああ。もちろんだ。」

「もちろん、次期王になるのはここに居るアリカ王女なのじゃが。ウェスペルタティア王国は今、ごたごたしておつての。なにせ、国王含め十数人の王族が暗殺されたのじゃからなあ。無理もない。」それを聞いた小娘はきゅっと拳を強く握った。

「…王国が沈静するまでの間暗殺や洗脳がされる恐れがあると、言うことか」

「まあ、そういうことじゃのう。そして、それをお主に頼んだ理由はの…。」

そう言ってこちらを向くマクギル。

「お主最近、少々派手に動きすぎたようじゃ。勘付かれておる可能性がある。」

…やはりか。たしかに、この前の件はいろいろな奴らにとって、大事件だったようだからな。

「…ふむ。確かに、俺も少々仕事を控えようと思っていたところだ。受けてやってもいい。お前もそれでいいな？小娘。現状を把握できていないほど愚かではあるまい？」

「ぐっ。いちいち腹が立つ言い方をする…。嫌な奴め…。」
ぼそぼそと何か独り言をのたまっている小娘。どうでもいいが、聞こえているぞ？

「嫌な奴で結構だが…。受けるのか受けないのかどちらだ。」

「っ。か、構わんぞ。マクギル殿、この度の件感謝する」
聞かれていたことが大層驚いたらしいな。随分面白い顔をしている。

「いえ。当然のことをしたまです。アリカ姫」

そうして、俺は小娘：アリカ王女の護衛となった。

ふう。さて、束の間の平穏な時間か。はたまた、新たな騒動の時間か。

まあしかし、奴らの動きを見るためにも少々間が必要だったのも確かか。

ならば、しっかり励むとしよう。

「ほれ。さっさと行くぞ。ハジメ。」

そう言っ、先に進んで物珍しいのか辺りを見回しながら先に進むアリカ王女。

：再訂正だ。やはり、まだまだ小娘だな。

第13話（後書き）

今日は用事があるので、次話は夜になりそうです。ではまた。

第14話

青年は王女に語る
王女は青年を知る

―第14話―

〔護衛〕

メガロ・メセンブリア
M・M首都の外れ。

休憩所となっているのであろう、その場所にまばらであるが人影がいくつか見えた。そこに、2つの人影があった。

―主人公side―

俺は、抱えていた荷物を降ろし口を開いた。

「護衛されている身分というのに、随分とまあ、買い物をしたな。」

「うっ。私は、あまり外に買い物をするということをしたことがなかったのじゃ。別に良いじゃろう。このくらい。」

そう言って、そっぽを向く小娘。

「別に構わんさ。俺にとっては休暇のようなものだ。」

そう言って腰を下ろし、煙草に火をつける。

「ほう。私を護衛する事が休暇と変わらんな？」

「実際、今貴様を襲ったところで余計オスティアが混乱するだけだ。

：まあそのために襲う可能性もあるがな。」

紫煙を吐き出しながら続ける。

「それに、もし今、貴様を狙うというなら好都合。それは転じて、

この戦争が終わった後の弱みとなる。」

「私が死ぬ事になるとか考えんのかのう。」

そう口を引きつらせながら聞いてくる小娘。

「愚問だな。この俺が護衛である限り、やすやすと死なせん。仕事だからな。」

そう言いながら、立って咸卦法を行う。

「ん？どうしたのじゃ」

それに疑問を感じたのか、小娘が問う。

瞬間、俺たちが居た場所に向かって放たれた魔法が向かってくる。

その方向に向かって構える。

牙突の構えから牙突零式を放ち、魔法を打ち抜く。そして、その直線状にあったものを全てなぎ払う。

「なに、五月蠅い虫が居ただけだ」

ふむ、辺りが少し騒がしくなってきたな。

「場所を移すか。」

「そ、そうじゃな」

……

……

…

見晴らしの良い丘に来た。ここまで来ると人は居ないものだ…。

そんな事を考えていると、

「ハジメは、いつもああなのか？」

「ん？なにがだ？」

小娘が変なことを聞いてきた。

「いや、ハジメはいつも攻撃されたりしたら、あのように反撃する

事に迷わんのかと思つての」

「おかしなことを聞く。今の俺は貴様の護衛だ。迷えば、死ぬのは俺でなくお前だ。」

そう言うと、なぜか小娘は少し笑みを浮かべ、

「ふふ。それはハジメの信念『悪即斬』からきておるのかの?」

「マクギルか…。あのおしゃべり爺が」

「私は、ハジメの口からその信念を聞きたいと思つての。なぜ父王が討たれたのか。」

そう言つて、こちらを見る小娘。まさか、俺が仇と知っていたとは。だが、その目には理性の光がある。

「なぜ、それを知っておきながら、俺を護衛にする事を許した?」
父の仇ならば、近寄りたくもないだろう。それにいくら完全なる世界イテと繋がっていたとはいえ、表向きはなんら問題はなかったはず。

「分かつておるのじゃ。父王が何をしていたか。マクギルにも少し話を聞いた。…ハジメが討っておらんかったら、きっと近いうちに私が討つておつたじやろう。」

「そして、さっきハジメは私を守った。それで思つたのじゃ。別にハジメは王族が憎いわけではない、ハジメの信念が父王を討つたのじゃとな。」

丘の先へ足を進め、こちらへ振り返る小娘。

「だからハジメの口から聞きたいと思つたのじゃ。その信念を。」

紫煙を吐きながら煙草の火を消す。

「小娘。人にとって幸せとは何だと思う。金か? 名誉か? 家族か? …そんなものは人が積み上げてきたもので決まる。」

小娘は黙って聞いている。

「人の価値観とはその生きてきた環境で、人生で大きく変わる。家

族が居ない者が家族を求めて家族を作ったのならそれは幸せだろう。なにもない、食う物にすら困ったものならば、金を権力を手に入れたならばそれは幸せだろう。」

「だが、それが他のものが築き上げた幸せを踏み潰すものならば、俺にとってそれらは等しく悪だ。」

そこで小娘が口を開く。

「それでは、ハジメは弱者の味方という事か？」

「ふん。誰がそんな事を言った。弱いせいで踏み潰されるならば、それはそいつ自身のせいだ。強くなければ幸せなど手に入れることはできても守れん。」

「…不当に奪い、不当に得る。そんな奴らを斬るだけだ。」

「俺の信念は、悪を斬れても、幸せを、平和を守る事はできん。」それが出来ていたらなば、この信念を貫いた男も違う時代を生きていたかも知れんな。

「それをするのは、お前らの仕事だろう？」

そう小娘に言くと、小娘は目をぱちくりとさせる。

「この戦争で腐った膿は俺のような奴らが吐き出してやろう。だが、戦争が終われば貴様らが舞台の主役だ。貴様に出来るか？平和を人々の幸せの基盤を築く事が。」

「ふふ。何を言うかと思えば。当たり前じゃ。人々が幸せを作るように、守れるようにするのが私たち、私の任された事であり、信念じゃからな。民は私の宝じゃ。」

夕日を背にし、そう自信満々に答え、その瞳に強い光を見せる。

「それに、ハジメは私を守ってくれるのじゃろう。」
そう言って微笑むアリカ。

「∴」

「どうしたのじゃ？ ハジメ」

「いや、そろそろ帰るとしよう。」

帰り支度を始め、歩き出す。

「そうじゃな。」

そう言ってアリカは俺の横に並ぶ。

言えるわけなからう。貴様に一瞬見惚れていたなど…。

言えるわけがない。

第14話（後書き）

ハジメの信念を一部説明する意味も含めた話だったのですが、あれ？ 最後なぜこんな事に……。基本ヒロインとか考えていなかったんですけどね。どうしようかな。ハジメなら胸に秘めたまま終わらそうだけ。

難しいですね。ではまた。

第15話

青年は束の間の平穩を得る
されど世界は動き続ける

第15話

～平穩～

—主人公side—

朝、新聞や情報端末から情報を仕入れていると、

「ほう。」

紅き翼がグレートブリッジ奪還にて活躍…か。

そろそろ戦況も動きそうだな。

「何を見ておるんじゃ？」

突然、アリカが顔を覗き込んで聞いてきた。

「グレートブリッジ奪還だ。知っているか分かんが、アラルアラ紅き翼の連中がその際に活躍したそうだ。」

そう返しながらアリカの頭をどかす。

「むう。…アラルアラ紅き翼か。聞いたことがあるの。千の呪文の男じゃったか？ ハジメはあったことがあるのか？」

どかされた事に若干不満でもあるのか、こちらを睨みながら聞いてきた。

「一応あの鳥頭や他の連中にも会ったことはある。が、このジャック・ラカンという男は知らんな。情報によると、自ら奴隷から傭兵に成り上がったそうだ。それなりの実力者だろう。」

ふと時計を見ると、マクギルに少し来て欲しいと頼まれた時間が迫りつつあった。

「さて、俺はマクギルのところに行くが、くれぐれも外出など軽はずみな事はするなよ？アリカ」

「む。私の護衛はハジメじゃろう。私を護衛せずしてどうするのじゃ。」

無愛想な顔だが、目が若干怒っている。はぁ。俺は父親の仇という事を忘れていいのか？こいつは。

「俺の本来の仕事は諜報と暗殺だ。そもそもマクギルに頼まれた仕事だ。」

そう言って、マクギルのところへ向かう。

「早く帰ってくるのじゃぞ。」

……

…

マクギルの仕事用の書斎の前に着く。

「マクギル、入るぞ。」

そう言いながら中に入ると、マクギルの他に髭のメガネと少年ガキがいた。

見た事ある顔だな。…あぁ。マクギルの情報源の一つか。

「お、ハジメ。よくきたの。」

「ほう。お前があ有名なパイルドライバーか。話はマクギル元老院議員に聞いているよ。」

「マクギル、貴様喋りすぎだ…。そして、誰だこいつらは。」
マクギルに釘を刺し、紹介を促す。

「分かっておるわ。」

そう言って、目で髭メガネどもに促すマクギル。

「あぁ。まぁ知っているとは思いますが、元捜査官のガトウ・カグラ・

ヴァンデンバーグだ。」

髭メガネがそう自己紹介し、

「タ、タカミチ・T・高畑です！」

それに続いて少年も自己紹介した。

「俺は、ハジメ・サイトウだ。知ってのとおりパイルドライバー……政治家殺しをしていた。」

「していた……？」

目敏いな。ヴァンデンバーグ。

「今は、どこぞのお姫様を護衛していてな。それに、暫くは表立って動けんのだ。それが理由だ、ヴァンデンバーグ。」

「別にガトウで構わん。それより、姫というのは？」

「こ、これ。ハジメ。」

ん、これは教えてはいけないのか。てっきりここで情報の共有をす
ると思っていたんだが。

「知っているのですか？ マクギル元老院議員。」

マクギルに問いただそうとしているガトウ。それに慌てるマクギル。
勢いよく開かれる扉。

……ん？

皆の視線が、一斉に部屋の入り口に向かう。

そこには、ローブをかぶった無愛想な顔のアリカが立っていた。

「遅いぞ、ハジメ。私が迎えに来てやったぞ。」

思わず、煙草を落としてしまった。

「……なぜ、貴様ここにいる。」

「今日は、中心街の方へ買い物に行きたくての。ハジメが居なかつ

たらいけんじゃろ？」

あまりの阿呆さに、思わず手でこめかみを揉んでしまう。

「…今日は大人しくしておけ、と言っておいたはずだが？」

「そんな毎日部屋に引っ込んでなどおれん。」

当然とばかりに言い放つアリカ。

「ま、まさか。オスティアの……。」

ローブで隠しているとはいえ、その顔に見覚えがあるのだろうかトウが呆然としている。

「なんということじゃ。」

マクギルも呆然としているな。

「ほれ、行くぞハジメ。護衛が居ればいいのじゃろ？」

そう言って、アリカは俺の腕を掴み、

「では、お主ら。ハジメを借りていくぞ。」

俺を連れ、書斎を出て行った。

呆然としている三名を残して。

……
…

「アリカ、貴様はもう少し自分の立場を認識しろ。ここはM・Mだ。メガロ・メセンブリアスパイや過激な行動を取る奴など、どこに居てもおかしくはない。」
片手に荷物を持ちながら、俺はアリカに言い聞かせる。

「仕方なからう。私はあまり世界というものを知らぬ。教えてはもらったが、見た事もないのじゃ。こうして、民たちがどういう生活をしているのかを、知りたいのじゃ。」

「それに、護衛であるそなたが、私を守ってくれるのじゃろう？」

そう言って笑顔でこちらに振り向くアリカ。

「…仕事だからな。」

「ふふ。なら問題なからう？」

「はあ。あいつら固まってたぞ？それに恐らく今日、互いの情報を話し合うつもりだったのだろう。まあ結果は…貴様が乱入したせいで、マクギルは今日貴様の件について、ガトウに話す事も多そうだな。」

そう言いながら、アリカを見る。

「むう。そこまで目くじらを立てんでも良からう。」

むくれるアリカ。最初に比べ随分と表情を出すようになったな。最初は無愛想顔か睨み顔しかしなかったからな。

アリカが止まってしまったので、

「ほれ、行くぞ。まだ行きたい所があるのだろうか？」

そう言って、手を差し出し先を促す。

「う、うむ。そうじゃな。では、…失礼して。」

そして、恐る恐る差し出した手を握るアリカ。

「ふふ。…こういうのもいいものじゃ。コホン。…では、行くとするかの。」

途端に笑顔となって、アリカが歩き出した。

よく分からんやつだ。そう思いながら、アリカと歩をあわせながら進む俺であった。

第15話（後書き）

「アリカを救えっ。ついでに世界も救っちゃえ。大丈夫っ。ハジメならできる。」と友人に唆されたG－q a zです。奴も俺もアリカ好き。

というわけで、アリカがヒロインになります。これから先、更に原作ブレイク、オリジナル展開が繰り広げられると思いますので、苦手な方は気をつけてください。

もちろん、楽しく読んでいただけるようG－q a zも頑張りたいと思います。ではまた。

第16話

青年はピースをそろえていく
世界は青年を補足する

第16話

～合流～

—主人公side—

コスモエンテレケイア

「そうか…完全なる世界は、もうそこまで深く入り込んでいるのか。」
「そうやってガトウがうなだれる。」

アラルプラ「ああ。戦争の調整すら出来るほどにな…。オスティアを守った後、

紅き翼が辺境に飛ばされたのも、おそらくは連中の息がかかった奴らが仕組んだ事だろう。あいつらは良くも悪くも戦況をひっくり返す力を持っているからな。」

短くなった煙草を灰皿に押し付け、新たな煙草に火をつける。

今日はガトウと、先日アリカに邪魔されて、できなかった情報の共有をする事になった。アリカ？今はもう夜だからな。寝ているだろうさ。

マクギルはアリカの事をガトウに話すことが主だったらしく、いない。最近、連合の戦績が良くなっているため忙しいようだ。

「しかし、良くこれだけの情報を個人で…。いくら元老院議員の助力が会ったとしても、凄まじい諜報力だな。」

机の上に散らばる資料。端末の情報。それらを見渡しながらガトウが呟く。

「なに、その殆どが非合法で手に入れた情報だ。今考えると、なぜ完全なる世界の連中に見つからなかったのかが分からん。」
そう疑問を呈し、紫煙を吐く。

「恐らく、殺したのが完全なる世界に関する者だけでなかったことと、パイルドライバーが顔すら知られていなかった事が大きいだろうな。」

資料を見通しながら、ガトウがそう返す。

お互いの調べ上げた資料を見ながら、今のように疑問などをやり取りしながら情報の共有を済ましていった。

「そして、これは本当なのか？魔法世界が消える…というのは。」
ガトウが、俺が未確認とした情報について聞いてくる。

「未確認と書いているのが見えんか？それに、そこに書いてある情報はおそらく、直接完全なる世界の連中に聞かねば分らん事だろう。下手すると、全てが嘘かも知れん。」

どこの世界にあなたの世界は魔法で作られているんですよ、と聞いて信じる阿呆が居る。

「だが、これが真実だとすると、奴らが戦争を裏で操っていることの辻褄が合うな。」

「そういうことだ。そして、今は奴らのアジトを探っている最中というわけだ。」

「が、有力なものはないな。殆どが探った後か、信用の乏しい情報だ。」

そう言って、資料を閉じる。

「だが、敵は知れた。これは大きい。」

「せいぜい、頑張ってくれ。こちらも護衛がなければ世界を飛べるんだが…。」

「おいおい。姫様を何だと思っているんだよ。」

ガトウが苦笑を浮かべる。

「次世代の礎を築くべき人間だな。信念を持っているし、芯も通っている。奴らの思惑のために、死なれたりするのは困るな。」

アリカの感想を述べたら、ガトウが呆けた顔をしている。

「どうした？」

「いや、普段から想像できんほど、姫様を買っているんだな」

「ふん。正当に評価も出来んようでは、諜報はできん。」

「それもそうだな。」

そうして、夜は更けていった。

—side end—

—紅き翼side—

「しかし、ガトウの奴、会わせたい奴らがいるって言ってたけど、どんな奴らだろうなあ」

ナギが期待を強くした声で疑問を投げかける。

彼らは今日、ガトウに呼ばれ本国首都まで来ていた。

「さて、協力者とは言っていましたか…」

アルビレオもさすがにその詳細までは分からないようだった。

「よう、よくきたな。早速会わせたいと思うから、こっちに来い。」

ガトウが到着したナギたちを案内する。

「なっ。マクギル元老院議員っ」

マクギルの姿を見た詠春が驚き声を上げる。

「わしちゃう。主賓はあちらの方だ。：ウェスペルタティア王国：
アリカ王女じゃ。」

マクギルの紹介と共に、こちらの部屋に上がってくるローブを纏った女性。そしてその少し後ろに控える、口煙草をしながらこちらを見ている男がいた。

その男の姿を見てナギが、

「あーっ。お前、オスティアのとくにいたえーつと…、誰だっけ？」
見覚えがあるのか、声を上げ男を指差したが名前が出てこない。

「ふふ。そういえば彼とは名前も交わしませんでしたね。」

アルビレオが名前が出てこない理由を述べた。

「そうだったっけ？」

「そういえば、名前を交わしていなかったな。」

「宴じゃったしのう」

ナギも詠春もゼクトも名前を交わしていなかったのを思い出したようだ。

「おいおい、俺はこいつ知らねえんだが。そんなに面白い奴なのか？」

唯一会っていないラカンも加わる。

「阿呆か、お前ら。主賓は俺じゃなくこいつだ。」

そう男が口を開き、場の修正をする。

「そ、そうだぞ。お前ら。王女を前に失礼だろうが。」

ガトウも、まさかこうなるとは思わなかったらしく、少々焦りながら続く。

「いや、別にもう良い。すこし、外に出る。」
「そう言い残し、去っていく王女。」

「ん、終わりか？んじゃ、お前名前なんていうんだ？」
「そう笑顔で聞いてくるナギに、」

「「はあ」」

男とガトウのため息が重なった。

—side end—

—完全なる世界side—
コスモエンテレケイア

「こいつがパイルドライバー…なのか。」

資料を読んだデュナミスがアーウェルンクスに問う。

「まだ、恐らく…という段階だね。なにせ、用意周到で痕跡も死体以外残さない上、顔も知られていないからね。…だけど、8割方彼で決まりだろうね。このような状況を作り出せる者が、他にいると考えるのは少し厳しい。」

そうアーウェルンクスが返す。

「…ふむ。…異界の者か…。」

そこに突然、何者かが話に割って入った。

「「っ！」」
ライフメーカー

「…造物主…。まだ出番は遠いと思いますが？」

デュナミスが突然現れた黒いローブを纏った者に聞く。

「…興味が湧いた…。」
ライフメーカー

造物主と呼ばれた者が資料を見る。

そこに書かれていたものは、オスティアで活躍した傭兵ハジメ・サイトウのものであった。

第16話（後書き）

さて、とうとう造物主も登場しました。もう少しで戦争編も終われるかな。

「お前、遅筆じゃなくね？」　そういわれたG－q a zでした。どうなのでしょうね？　ではまた。

第17話

青年は先を見据える
世界は青年に襲い掛かる

第17話

～襲撃～

—主人公side—

「ふむ。こんなものか。」

構えた刀を解く。

「ぜえっ。ぜえっ。」

「はあっ。はあっ。嘘だろ？俺たち2人がかりでこれかよ。」
地面に倒れこんでいるナギとラカンを見下ろす。

「これでも修羅場をいくつも潜り抜けた身でな。諜報活動というのを甘く見るなよ？」

この2人が、「一戦やろうぜ。」と余りにしつこいため、「ならば2人がかりで来い。格の違いというのを見せてやろう。」と相成り、ここでは大規模な魔法や気を使えないため肉弾戦にしたわけだが、

「それにしても貴様ら、本当の阿呆か？そんな直線的な攻撃ばかりならば誰でもよければ。戦い方というのを知らんのか？」

そう、こいつら連携が出来ていない上、殆どが真正面からや大して作戦も立てずに突っ込んでくるという、いわば自らの身体能力や魔法でしか勝負していない。

たとえば、頭を使った攻撃をしようとしても、分かりやすいフェイントだったりする。

「いや、あの速度で対応できるのはそう居ないと思うのだが…。」
少し離れた場所で詠瞬がそういうと、ガトウも頷いていた。

「これから貴様らは、コズモエンテレケイア完全なる世界と戦う事になる。これぐらい出来る連中だと思っておけ。おそらく、トップに近い立場であろう、あの人形のような奴は…鳥頭、お前と同じほどに強いぞ？」

「へっ。おもしれえ。世の中にはまだ、こんな強いのが居たとはな。」

そう笑みを浮かべながら立ち上がる鳥頭。

「後、俺は鳥頭じゃねえっ！ナギ・スプリングフィールドって名前があるんだよっ。」

そして俺に向かってくる鳥頭。

「そういうことは、せいぜい俺を倒したときに言うんだな。」

「ワッハッハッハ。…俺も忘れんじゃねえぞっ。ハジメっ」

さて、この阿呆どもの相手は、もう少し続きそうだな。

…

…

「おおらあああっ！」

瞬動でこちらに向かってくる鳥頭。

それにあわせながら、後ろを狙っているラカンの顎に、鳥頭をよけながら掌底を喰らわす。

「ぐおっ」

「だから、丸分かりだ。阿呆共。」

俺の横を通り過ぎる鳥頭のローブを掴み、地面に叩き潰す。

「ぐえっ」

「もうこのぐらいで良からう。魔法も気も放てないならばそこらに

居るものとそう変わらんのは理解した。」

「いやいや、んな阿呆な。」

「ふふ。格闘術なら、まさに格が違うようですねえ。」
詠春とアルビレオが苦笑しながら俺の言葉に反応する。

「くそお。次戦^やる時は、もっと広い場所でやろうぜ。俺の大呪文で
今度こそ倒してやる。」

「おうっ。俺のラカンスペシャルでな。」

随分と立ち直りが早い連中だ。

「さて、俺は護衛に戻る。マクギルが来たら連絡してくれ、ガトウ」

「了解した。大変だな、お前も。」

「ふっ。仕事だからな。」

…
…

アリカがいたバルコニーに辿り着くと、

「なんじゃ。お主がいれば、別に紅き翼^{アラルブラ}という奴らに、力を貸して
もらわなくとも良かったのではないか？」

「なんだ。さっきのを見ていたのか？」

バルコニーの手すりの部分から下を見ると、なるほど。さっき鳥頭
たちの相手をしていた場所が見えるな。

「なに。奴らの本領は特大の魔法や気だ。こんな狭いところでは真
価は測れん。…それに、数は力だ。俺一人より、奴らがいたほうが
良い。アリカを守るものも増える。」

「なんじゃ。ハジメが護衛ではないのか？」

「これからまた忙しくなる。俺は諜報の役目があるからな、鳥頭共も護衛位できよう。」

そう返しアリカのほうを見ると、あからさまに不機嫌だった。

「どうかしたか？」

「別にどうもしとらんっ。」

…よく分からんやつだ。

「それと、戦争の調停に関してだが…、マクギルが帝国の第三皇女との調停の場を用意してくれた。マクギルが着き次第向かうぞ。」
その言葉に、アリカに笑みが戻る。

「そうか。この戦争を終わらせることができるのじゃな？」

「さあな。まだ、連中が動いてきていない上に、まだ中枢には連中の息がかかった奴らがいる。…だが、無駄ではなからう。」

その言葉に満足したのか、アリカは、

「うむ。まずは話し合う事が重要なのだ。帝国にもそう考えてくれているものが居るだけで、私は嬉しく思うぞ。」

と微笑を浮かべながら話した。

＜ハジメ。マクギル元老院議員が到着したようだ。姫様を連れてこちらに来てくれ。＞

ガトウから念話が入る。

＜わかった。そちらに向かう。＞

「アリカ。マクギルが来たようだ。行くぞ。」

「うむ。」

進むアリカの後ろを俺はついていった。

…
…

「マクギル、首尾はどうだ？」
そうマクギルに問う。

「大丈夫じゃ。この船で向かう先に帝国の第三皇女が居る。」

ふむ。小さい船だな…当たり前か。調停の話し合いをするために行くのだからな。

「…ふむ…。…揃いも揃ってどこに行くのか…。」
瞬間、戦闘体制をとる俺と紅き翼の面々。

そこに佇んでいたのは、黒いローブを身に纏った性別も判定できない輩だった。

「おいおい。…あいつはなんだ？やばいなんてもんじゃねえぞ。」
その異質さを肌で感じるのか、ラカンが冷や汗をかきながら喋る。

「貴様が、コスモエンテレケイア完全なる世界の長。…黒幕というわけか。」
咸卦法を行いながら、ローブに問う。
「…否定はせん…。」

「鳥頭っ」

鳥頭に呼びかけ、後ろに控えさせていたアリカを投げる。

「なっ？」

投げられたアリカをキャッチする鳥頭。

「アリカを頼んだぞ、鳥頭。」

「なっ。ふざけんなっ！あいつがどんなやばい奴かハジメにも分かるだろっ？」

ナギがそう叫ぶが、睨み返し黙らせる。

「…くっ。」

「…なに、死にはせん。少々聞きたいことがあってな。貴様らでは足手まといなだけだ。」

だから、さっさとアリカをつれて逃げろ。鳥頭。

「行くぞ。ナギ。アリカ姫もこちらへ。」

「ハジメっ。お主は私の護衛であろう。」

アリカがナギに抱えられた格好でこちらに問いかける。

「さっきも言っただろう。そいつらでも護衛ぐらいなら出来る。…鳥頭。」

顔をしかめる鳥頭。

「お前とはまだ、全力で決着つけてねえんだからな。死ぬんじゃないかえぞっ。」

そう言って、アリカを連れて船に乗り込む面々。

ふん。まだ言っているのか。あいつは…。

船を見送った俺は、ローブに向き直り、

「まさか、待っていてくれるとはな。随分やさしいじゃないか造物主^{ライフメ}。」

ローブが少しゆれる。

「くく、ふははははは。今更私の正体を知っていたところで、驚きません。我が興味を抱いたのは貴様なのだからな…ハジメ。…異界の者よ…。」

そう言ってこちらを見据えてくる造物主。まさか、本当に敵の黒幕がこちらに来るとはな…。

ライフメーカー

「造物主……。貴様にはいろいろと聞きたいことがあるのだが、その前に一つ確認だ。……さっさとこの戦いから引く気はないか？」
刀を構えながら、俺は造物主に問う。

「……もはや我が悲願は、すぐ先にある。それを引く気は、毛頭無い……。」

俺と対峙する造物主。なるほど、強い。死ぬかも……知れんな。
だが、我が信念……曲げるわけにはいかん。

ライフメーカー

「そうか。ならば、造物主……貴様を、その目的を『悪・即・斬』のもとに……断つ。」

「やってみるがいい。人間……。」

そして、俺と造物主の戦いが始まった。

第17話（後書き）

あともう少しで戦争編が終わるはずなので、今日中に終わらせたいと思います。

次回はハジメ対造物主。戦闘シーンは苦手ですが、何とか読めるようにはしたいと思います。ではまた。

第18話

青年は世界と矛を交える
されど青年は笑う

第18話

～敗北～

メガロ・メセンブリア
M・Mの首都のはずれで、戦いは起きていた。

「破あああつ」

ハジメの突きが、一筋の閃光となって空を貫く。

「くはははっ…。その程度か…異界の者よ。」

造物主の背から、魔方陣が空に描かれる。世界の理は曲げられ、次元がゆがむ。

「くっ。」

その刹那、数十、数百もの闇の線がハジメを襲う。

「なんとまあ。規格外なっ…攻撃だっ…。」

虚空瞬動、縮地を用いてそれ一つが致命傷だと思えるような攻撃を避け続ける。

刀を構えなおし、一気に造物主の元へ駆けるハジメ。障壁を紡ぐ造物主。

造物主の障壁とハジメの刀が、凄まじい音を立てながら競り合う。

「なかなか硬い楯だな。」

「そちらも…良く折れぬ。」

ハジメは笑みを浮かべる。造物主はローブで顔は窺い知れないが、おそらく笑みを浮かべているであろう事は雰囲気であった。

「破っ！」

ハジメが薙ぎ払い、袈裟懸け、突きと、それら一つ一つが必殺の一撃を造物主へ放つ。

「くっ…。」

しかし、造物主は魔力で覆った肉体で、魔法で、それらを全て紙一重で避け、いनाすが、一撃を喰らう。

「っ…」

刀は造物主を貫くが、

「…墜ちろっ…。」

造物主が魔法を放つ。

咄嗟にいつものように、魔法を斬るハジメ。

「なっ。」

しかし、刀が折れ、全てを斬り損ねてしまい、残りの魔法がハジメに直撃する。

「がっ。」

魔法で打ち落とされたハジメの場所にクレーターが出来上がり、粉塵が舞い上がる。

「…」

静かに地面に下りてくる造物主。

曇天の空から雨が降り始めた。

—紅き翼side—

ハジメと別れ数時間たち、テオドラ皇女との調停の会談の場所に着いた一同。

しかし、

「おい、姫さん。そろそろ立ち直ってくれよお。」
そうナギがアリカに声をかける。

「なんじゃ？何が起きたんじゃ？なぜアリカ姫はあんなに落ち込んでおるのじゃ？」

先ほどの事情を知らないテオドラ第三皇女が、紅き翼の面々に問いかける。

「はは。なんと云えば良いのやら…。」

苦笑するガトウ。

「まさか、こんな事になるとはの。」

思わぬ事態に困惑するマクギル元老院議員。

「はっはっはっは。ハジメが死ぬわけねえだろ、姫さん。俺とナギ相手に勝っちまう男だぞ。」

若干汗をかきながら、ナギと共にアリカに声をかけるラカン。

ハジメと別れてから、アリカがどんどん塞ぎこんでしまったのであった。

「ふふ。ちょっと、想定外の事態が起こりましてね。」

「一人メンバーが欠けてしまっただけ。」

テオドラの疑問に返答するアルビレオと詠春。

「だーかーらよっ。あいつが死ぬわけねえだろっ！…俺とも約束したんだ、決着つけるってな！姫さんだって、あいつとなんか約束とかあんじゃねえのか？姫さんは、ハジメを信じらんねえのかよっ！」
いい加減頭にきたのか、声を荒げるナギ。

「っ。」

塞ぎこんでいたアリカが顔を上げる。

「あるみてえだな。」

「…ああ、ある…ふふ。すっかり忘れておったわ。こんな様ではハ

ジメに怒られるの。」

そう言って笑みを浮かべるアリカ。

「すまぬの、みんな。テオドラ第三皇女。調停のための話し合いをしよう。」

そこにタカミチが扉を開け放ち入ってきた。

「どうした？タカミチ。そんな勢い良く入ってきて。」

その姿に疑問の声をかけるガトウ。

「はあっ、はあっ。こ、これを見てください！みなさんっ！」

—side end—

—主人公side—

雨が降るのを体で感じながら、考える。

まいったなあ。この世界で目覚めてからずっと愛用していたんだがなあ。折れてしまった…か。

ふむ。左脇腹を挟られたのと、背中を強打しただけか。ならば、まだ戦えるな。…俺は折れていない。考え終わると、俺は立ち上がった。

「…っ…。まだ生きていたか…。…ハジメ…。」

俺の姿を見て驚く造物主。むしろ、俺が驚くのだがな。

くく。信じられんな。殆ど無傷…か。割に合わんな。まるで、ここにいないよう…っ

「くくくっ。ならば、とんだ道化か…。」

折れた刀の切っ先を見つけ、それを取り握る。

さて、この方法は考えてはいたが試した事が無い…。まあどうでもなるか。

「…？なにをしている。」

造物主がこちらに問いかける。

「いやなに、…考えていた。貴様…実体を持っていないな？いや、正確にはその肉体…貴様のものではあるまい。」

そう言った瞬間、造物主の雰囲気が変わった。

「…なぜ？」

「今思い返すと、動きが余りに不自然だった。それに…貴様2，3俺の技を喰らっていただろう？なのに、だ。なぜ、貴様平然としている。」

言葉を発しながらも、俺は咸卦法を行い、更に調整する。

「…やはり、貴様は異分子であったか。…この肉体は貴様と戦った後、滅ぶのみ。」

「だが、貴様である事に変わりなからう。…それでも操っているのは貴様だということ…。」

「…何を言って？…っ！貴様何をっ！？」

俺のしていたことに驚く造物主。

俺がしていたこと。それは咸卦法のを咸卦法の力で行い、それを延々繰り返すというもの。名づけて感卦螺旋法。欠点が大きいがな。調整が難しすぎて、戦いの最中に使えん上、おそらく放つ技の威力も桁違いになるだろうから迂闊に試せないという、大きな欠点だ。

俺が制御できる限界まで、力を高め続ける。

「…愚かな。身を滅ぼすだけだ…。」

「なに。負けっぱなしは気に喰わんな。これなら貴様を断てる。それにな…。」

そう言って、折れた切っ先を造物主に向けながら、牙突を構える。
「言ったであろう？ 貴様を…そのふざけた目的を『悪・即・斬』の
もとに断つとなつ。」

今。限界を迎えた力を全て造物主に向けて放つ。

「…くっ。リライトっ」

世界を貫く光の螺旋と、世界を書き換える掟がぶつかる。
その瞬間世界から音が消えた。

—side end—

—紅き翼side—

「こ、これを見てくださいっ」

そう言って持ってきた新聞を開く。そこには、

「「なっ!」」

全員の驚きの声が重なった。

新聞の一面にはこう書かれていた。

メガロ・メセンブリア

M・Mマクギル元老院議員の邸宅から半径5Kmの範囲で街が消え
去っており、街の機能が停止したこと。昨夜起こったことについて、
様々な推測が書かれており、その推測には、アラルブラ紅き翼アラがこれを起こし
たのではないかという事と、その証拠、証言らしきものが書かれて
いた。

—side end—

コスモエンテレケイア
—完全なる世界side—

「…くつ。…まさかこちらまでダメージが来るとは…」

ライフメーカー
「造物主っ。…どうなりましたか？」

造物主に問いかけるデュナミス。

「…ふむ…っ。」

左胸に刺さった刀のような魔力の残滓に気づく造物主。

「…この身に届くほどに、…大した信念ではあった。…が、
その残滓を抜き、

「…最早、…我等の前には居ない。」
砕いた。

「分かりました。では、計画を進めたいと思います。」

そう言ってデュナミスは立ち去り、

アラルブラ
「紅き翼の連中とマクギル元老院議員。アリカ姫に対しては、すでに策は取ってある。後は我等が成すべき事を成すまで。行くぞ。」
待機していた他の面々に、声をかける。

—side end—

戦争は終わらない…

第18話（後書き）

総合評価が1000ptを超えてテンションが上がったので、そのテンションのままに書き上げました。やはり、戦闘は難しい。そして、眠気が襲ってきたので寝ます。続きはたぶん昼ごろ書きます。今日中に戦争編を終わらせるつもりです。ではまた。

第19話

そこに青年は居らず
されど反撃の牙は研がれる

第19話

～反撃～

一紅き翼sideー

タカミチが持ってきた新聞に皆の視線が集まり、静寂がその場を支配する。

「おいおい、これってつまりはよ…」

ラカンが若干戸惑いながら沈黙を破る。

「おそらく、いえ間違いなく昨日あれから起きたのでしょうか。」

アルビレオが真面目な顔をして結論を口にする。

「まさか、ハジメの奴…」

ナギがそう口を開こうとしたとき、

「それよりも、こちらのほうが問題じゃ。この件、お主ら紅き翼が原因となっている。…おそらく、コズモエンテレケイア完全なる世界の奴らが情報を操作したのじゃろう。」

アリカが、街が崩壊した事ではなく、紅き翼がその主犯として書かれていることについて口を開いた。

「そ、それよりもって、おい。ハジメが心配じゃないのかよ？」

ナギがアリカに問う。

「お主こそ、現状を理解せよ。これは恐らく…奴らの脚本通りじゃろう。ガトウ。」

それに対し、アリカは執りあいもしない。

「この手際のよさ。おそらくは昨日の時点で狙っていたのでしょう。アリカ姫」

「そうか。ではお主、ハジメから完全なる世界に関する情報はもらっておるな。」

「はい、情報の共有はすでに済ませています。資料もこちらに。」
そう言って、端末といくつかの紙の束を見せるガトウ。

「うむ。ならば、コスモエンテレケイア完全なる世界に関与する者を除き、我等の味方を、我等の話を聞いてくれるような者達を探せ。その者らを中心に、奴らと戦うための準備をせねばならん。」

「分かりました。：タカミチ、行くぞ。」

「はいっ」

早速行動に取り掛かるガトウとタカミチ。

「さて、アラルブラ紅き翼。お主らはガトウに協力できるものは協力を頼む。
出来ぬものは我らの護衛、敵の殲滅じゃ。」

そして、アリカは皆を見渡し、

「敵は世界じゃ。これを見れば分かるが最早：我らの味方は居らぬ。
：ならば、我らが世界を救おう。良いな？」

皆に問う。

「あつたりまえだっ！」

「はっはっはっは。楽しくなってきたなあおい。」

「ふふふ。相変わらずですねぇ」

「やれやれじゃの。」

「こいつらは、敵の殲滅だな」

紅き翼の面々がそれぞれに応える。

「うむ。では、テオドラ第三皇女。マクギル。我らもこれからどうするか話し合おう。」

「そうじゃな。まさか、これほどまでに、コスモエンテレケイア完全なる世界の力が世界

の中枢に入り込んでいたとは、驚きじゃ。」

テオドラは、驚きの面で言う。

「戦争を終わらせる事は、完全なる世界を倒す事には始まらないの
う。…わしはM・Mメカロ・メセンブリアのほうで、協力者が探してみるとしよう。」

マクギルがそう続け、ガトウのほうへ向かう。より厳密に探するためである。

「うむ。それなら、わしは帝国じゃな。」

テオドラもガトウのほうへ向かう。

「…」

一人になったアリカは、外の風景を見ながら、唇をかみ締め、拳を握り締めていた。

「…ハジメ…。」

—side end—

—ナギside—

はあ、随分気丈な姫さんなことだよ。

「んゝ。姫さんを見てなゝに考えてんだよ、ナギい。ありや無理だぞ。ハジメにぞっこんだ。」

突然ラカンが後ろから声をかけてくる。

「うつせえつ。そういうんじゃねえよ…。というか、ハジメの野郎。生きてやがるんならさつさと来いってんだ。」

あの野郎が死ぬとは思えねえが、あんな写真を見ちまうとな…。

「ワッハッハッハ。さっきお前なんて姫さんに言っただよ。ハジメを信じられないのかって言ったんだぜ？」

「っ。ああ、そういうことか。不器用な姫さんだなあ。」

姫さんに、あんなに心配かけさせやがって。
だからよ。

さっさと帰って来いよ、ハジメ。

俺との決着は、まだ着いてねえんだぜ？

— s i d e e n d —

それから、世界は大きく動く。

アリカ率いる紅き翼のメンバーは、ガトウやアルビレオがハジメの情報コスモエンテレケイアを元に完全なる世界に関係する大きな組織などを暴いていった。

そして、それらを確認したラカンやナギの実働メンバーが敵だと分かった組織を次々と潰していった。

アリカやテオドラたちは、その裏で必死に説得をしながら徐々にだが味方を増やしていった。

…そして、とうとう彼らは辿り着く。

最期の決戦の地…墓守り人の宮殿へと

………

………

…

— オスティアの荒野…

「造物主…、言ったはずだ。貴様の目的は断つと。」
ライフメーカー

独りの男が呟いた言葉は、砂塵と風にかき消される。

戦争は佳境を迎える…。

第19. 5話（前書き）

やはり、一気に飛ばしすぎたように感じたので最終決戦までのちよ
っとしたお話を

第19・5話

王女は青年を想う

少年の想いはただあふれる

第19・5話

～想い～

：最終決戦よりしばし時は遡る

ハジメの消息が分からなくなってから数ヶ月のときが過ぎたとき：

－ナギside－

「よお。ただいま戻ってきたぜえ。」

ラカンと共に基地に戻ってきた。

あの日から随分と時間が過ぎた。俺達は今、味方集めと敵の殲滅を行っている。

「ああ、お疲れさん。：しかし、今回も黒か：。ハジメの情報収集の精度の高さとその量には驚かされてばかりだな。」

ガトウが感嘆の声を上げている。

ハジメが残していた敵さんの資料と情報。それは俺達の大きな行動指針となっていた。ちいせえ組織からバカでけえ組織まで、どこが怪しいのか記してあった。それをガトウやマクギル、アルとかがより詳しく調べるとあっさりと敵さんがどうか分かつちまう。：やっぱ、あいつとんでもねえやつだな。

「ったく。すげえのは、わかるけどよ。あいつは、今どこにいるのやら。」

そう言いながら、姫さんを思い出す。

ハジメがいなくなつて、1ヶ月ぐらひは氣丈に振舞っていたけどよ。まあそれでも十分強いと思うけどな。やっぱり、不安なのか寂しいのか知らねえが、この前の夜。月を見て涙流してやがった。

ハジメ…。帰つてこねえならよ。俺が奪つちまうぞ？俺はきっと姫さんが好きだぜ？お前はどなんだよ…ハジメ…。

しばらく、休んで物思ひに耽っていると扉が開いた。

そこには今考えていた姫さんが立っていた。

「どうかしましたか？アリカ姫」

ガトウが突つ立っている姫さんに聞く。

「いや…の。」

辺りを見回す姫さん。そして、俺と目が合った。

「ふむ。鳥頭、暇そうじゃの。護衛を頼むぞ。」

そう言つて、部屋を出る。

「は？」

疑問の声を上げて、誰も応えない。

「おいおい、ちよつ。ちよつと待ってくれよつ。姫さん。」

俺は慌てて姫さんの後を追う。

「姫さん。どこに行くんだよ？」

追いついて俺は姫さんに聞く。

「どこと言われているの、買い物に行くのじゃが。そのためには護衛が必要じゃろ？」

あっけらかんと言う姫さん。

「はあ。俺、敵さん倒して疲れているんだけど…。」

「そんなものでは、完全なる世界には勝てんぞ？早く着いてまいれ。」

さっさと先を行く姫さん。

ハジメ…。こんなのを護衛していたのかあ。

俺達はローブをまとって、街に出る。姫さんは街の大きな店や小さな雑貨屋など、いろいろな場所を知っていた。思わず俺は、

「姫さんいろんな場所知ってんなあ。」
などと呟いていた。

それを姫さんは、

「ふふ。数ヶ月前には、護衛に託^{かこつ}けて、ハジメを連れていろいろな場所へ行ったからのう。…やはり、いいのう。変わるものもあれば、変わらんものもある…の。」
そう言って目を細める姫さん。

まるで、姫さんの隣にハジメがいるように…見えちゃった。

姫さんは、買い物を終えたら夕日の見える丘に来た。

「すまんのう、ナギ。今日はつき合わせてしまったの。」
こちらを見る姫さん。

「別にかまわねえよ。」

「ふふ。…ハジメはどうしておるのかの。あの馬鹿者が。」
そう言って夕日を見ながら微笑む姫さん。

なんか、込上げて来ちまった。

「なあ、姫さん。俺じゃ、…俺じゃハジメの変わりになれねえのかっ？」

ハジメの消息が分からないときいても、気丈に振舞う姫さん。

世界を敵と定め、それでも世界を救おうと頑張ってる姫さん。

ハジメが心配の癖に、笑う姫さん。

もう、見てられなかった。

「俺は、…俺はっ」

「そこまでじゃ。鳥頭。」

そう言って、こちらに手の平を出す姫さん。

「ありがとう、ナギ。」

「じゃが、私はやはりハジメが好きなのじゃ。今日、お主と街を回って思ったわ。…最初あったときはあれほど憎かったというのにのう。ハジメと会ったたび、話すたびに惹かれておる私がおった。」

きれいな笑顔を見せる姫さん。

「それにの、ナギ。人は、誰かの代わりになどなれん。だからこそ、人は皆それを必死に守るのじゃよ。」

「そっか。そうだよな。へへ。なんか、悔しいな。そこまで言われるとよ。」

振られちまったか。

「ふふふ。…ハジメに会わんでいたら、お主に惚れていたかも知れぬな。」

姫さんが何か言っている。

「ん？何か言ったか？姫さん。」

「いや、では帰るとしようかの。ナギ。今日はありがとうの。」

「なあに。いいってことよ。」

そう言っただけ俺。

ハジメ。姫さん待ってんぞ。さっさと帰って来いよ。

⋮

⋮

そして、全てが集結し、終結する戦いへ時は進む。

第19. 5話（後書き）

謀略に関しては冗長してしまうと思いましたが、こちらはそういうわけにはいかないので書きました。

ハジメがいなかったらくつついた二人が主役でした。

第20話

世界を救うべく翼は羽ばたいた
そして青年は地より蘇る

第20話

～最終局面～

－ナギside－

「不気味なくらい静かだな。奴ら。」

墓守人の宮殿が見える場所で、俺らは最後の戦いのをときを待っていた。

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ。」
隣にいるラカンが、ふざけたように言う。

ハジメ：とうとうここまで来ちゃったぞ。お前はなにやってんだ？

「ナギ殿っ。帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました。」

おっ。そろそろか。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ。」

「ハイッ。…それで、あの、ナギ殿。」

ん？まだ何かあったか？

「サッ、サインをお願いできないでしょうか？」

そう言って、報告に来た女の子が色紙を差し出してきた。

「おあ？いいぜ、そのくらい。」

俺達も有名になったからなあ。色紙にサインを書き、女の子に渡す。

「そ、尊敬していました。」
隣でラカンが大笑いしてやがる。

さて、さっさと姫子ちゃんを助けるとしようじゃねえか。

— side end —

「連合の正規軍は派遣できる説得したのじゃが、…この様子じゃ間に合わんのう。」

空中に浮き出た画像の向こう側にいる、マクギルが報告する。

「こちらもだ。帝国も間に合いそうにない。」

もう一つの画像でガトウの報告が入る。

「決戦を遅らせる事はできそうか？」

「無理ですね。私達でやるしか無いでしょう。」

ガトウの問いにアルビレオが答える。

「タイムリミット…だな。」

詠春も続けて応える。

「ええ。彼らはもう始めています。『世界を無に帰す儀式』を…。

世界の鍵『黄昏の姫巫女』は今彼等の手にあるのです。…ハジメはこれを危惧していたのでしょうか」

アルビレオが真剣な面持ちで喋る。

「はっ。なあに。さっさと姫子ちゃんを助けりゃ問題は無いだろう？」

ナギは笑みを浮かべそう言い、

「ようし、野郎どもっ。」

杖を構え、

「行くぜっ！」

彼らは決戦の地へ、飛び立った。

一墓守人の宮殿・入り口

アーウェルンクスたち完全なる世界がナギたち紅き翼を迎える。

「やあ。『千の呪文の男』：まさか、パイルドライバー以外の面々が、こうも我々を追いつめるとはね。」

「この半年、まさかこれほどまでに数を減らされるとは思わなかったよ。：この辺りでケリにしよう。」

そして一気に戦闘体制をとる両者。

戦いが始まった。

………

紅き翼と完全なる世界の激しい戦いが繰り広げられる。

………

紅き翼の面々が完全なる世界を押し始める。

………

そして、

「うらああああつ！」

「くああああつ！」

ナギの魔法がアーウェルンクスを貫くのを最後に、決着した。

………

アーウェルンクスの首を掴み吊り上げるナギ。

「見事：理不尽なまでの強さ：。」

アーウェルンクスが賞賛する。

「黄昏の姫巫女は：どこだ？消える前に吐け。」

ナギが問う。

「フ：フフフ：まさか、君はいまだに僕が全ての黒幕だと思っているのかい？」

そして、ナギは思い出す。ハジメと別れた日に訪れた異常の者を。

「ま：まさか。」

「「っ！」」

その次の瞬間、一条の光がアーウェルックスを襲う。

「なっ！」

ナギが驚いていると、

「ふん。久しぶりだな、鳥頭。ちゃんとアリカの護衛はしていたか？」

聞き覚えのある声の方へナギが顔を向けるとそこには、黄昏の姫巫女を抱え、煙草を吸っている男。ハジメが立っていた。

：遡る事数時間前

—主人公side—

ここが、墓守人の宮殿：か。

「くく。」

独りでに笑みが出る。墓守人：か。未だに諦められずに、足掻いているようにしか見えんな、造物主。

宮殿に侵入した俺は、まずあの無愛想娘を探すことにした。あれだけ、言っておいて攫われるとは：。まあ奴らもそれだけ必死だったという事か。

魔力が入り乱れているな：、これが儀式の陣か。ならば、より入り

組んでいる場所に、源泉に無愛想娘がいるはず…。

ちっ。宮殿というだけあって、通路が入り組みすぎているな。地図を頭に入れてなければ迷うところだったな。

そして、大きな扉を見つける。この宮殿の中心より下、陣の中心。ここに無愛想娘がいるはず。

扉を開く。

「なるほど。…惨いことをする。」

そこには、まるで聖堂のような部屋があった。その中心に、無愛想娘が結晶の中に閉じ込められていた。

「今、開放してやろう。」

刀を構え、結晶を切る。

子気味良い音と共に結晶は砕け散り、無愛想娘が落ちてくるのを抱きかかえる。

「…ふむ。…死に損なったか…異界の者よ。」

部屋の天井より、声が聞こえる。

「なに、貴様を斬りに来ただけのこと。」

無愛想娘を脇に抱え、牙突を放つ。

「なっ。」

一条の光が造物主を襲い、天井を穿ち空を覗かせる。そして、天井に出来た穴から虚空瞬動で空へ抜けた。

外へ出ると、

「フ…フフフ…まさか、君はいまだに僕が全ての黒幕だと思ってい

るのかい？」

「ま…まさか。」

アーウエルンクスと鳥頭の会話らしきものが聞こえてきた。おいおい。鳥頭、あの日造物主が来た事を忘れていたのか？俺はアーウエルンクスと鳥頭たちがいる方向を確認した。

無愛想娘をしつかり脇に抱え、俺はアーウエルンクスへ向かって牙突を放った。

そして、紅き翼の面々がいる場所へ降りる。

「ふん。久しぶりだな、鳥頭。ちゃんとアリカの護衛はしていたか？」

…そして、時は戻る…：

「はっ、ハジメっ。お前っ今までなにやってたんだよっ！みんながどれだけ…」

鳥頭が詰め寄ってきたので、無愛想娘を渡し、

「話は後だ。俺はこれから、奴と決着をつけねばならん。」
振り返り、空にいる造物主を見る。

「ふむ、今度はしつかり喰らっているようだな。」

「くっ…。」

ローブがボロボロになった造物主には、確かに牙突が喰らっている様が見える。

「鳥頭。無愛想娘をさっさとここから非難させておけ。」

鳥頭にそう言うと、

「ふざけんなっ！前もそうやって負けたんだろぅがっ。」
む、鳥頭のくせに痛いところを突くな。

「なに、今度は負けはせんさ。今度こそ、奴を…『悪・即・斬』のもとに断つ」
そう言って、空を駆ける。

— side end —

「だあつ。行っちゃったつ。」

「ふふ。彼も頑固者のようですよ。我々是我々のできる事をするとしましょう？」

アルビレオがナギを説得する。

「ここにはわしが残る。ナギたちは、黄昏の姫巫女を安全な場所へ送るが良い。」

ゼクトが提案するのを、ナギはしかめっ面で、

「ちっ。あゝあ、姫さんに怒られそうだぜ。」

ゼクトを残し、ナギたちは宮殿を脱出した。

「さて、世界はどうなるのか…の。」

ゼクトはただ、空を見上げた。

そこには、造物主とハジメが対峙する姿があった。

第20話（後書き）

申し訳ないですが、ほぼ原作引用です。

第21話

青年は世界と決着する
そして戦争は終結する

第21話

～決着～

影と影が交差するたびに、互いの攻撃の衝撃が周りを崩壊させていく。

「くく。くははははははははは。面白いっ。面白いぞ人間っ。」
造物主は幾多の魔方陣を宙に描き、その全てから魔法を放つ。

「ふん。貴様の生き様ほど愉快なものはないと思うが？」
それら全てを斬撃で、切り捨ててるハジメ。

「…人間如きが、我の…何を知るっ」
ハジメの周囲を魔方陣が囲む。

「ふん。諦められぬ、絶望をした振りをする者を、道化と言わずな
んと言う。」
その全ての魔方陣をハジメは神速を持って切り刻む。

「…何が言いたい。人間…。」
魔力を溜め、ハジメに問う造物主。

「ならば問おう。人間に絶望した貴様が何のために楽園とやらを作
った？」

同じく咸卦法で身を高めるハジメが応える。

「度し難い人間は世界にいくらでもいる。ならばお前が認めた人間

を住ますのか？なら問おう。その人間の何を認めた？絶望したのではないのか人間に？貴様は心の奥では感じているはずだ。その希望を、だからこそ貴様は世界を作ったのであろう。…自らが知る希望に、すぎりつけもしない貴様を、見ぬ振りをして絶望した気にいる貴様を…道化と言わずなんと言おう？」

「黙れ…。黙れ、人間っ。全ては救えぬっ。なればこそっ、より輝いているものを救うのが我が悲願。」
造物主の前面に巨大な魔法陣が描かれる。

「全てを救えるわけなからう。だがそれでも、諦めん奴を俺は知っている。そいつならば…たとえ明日全てが滅びようとも…、貫くだろうさ。」

ハジメの脳裏にアリカの顔がよぎる。

「貫く覚悟を失ったお前に、何かを救えるなど思うな。」
感卦螺旋法で更に高めるハジメ。

「覚悟しろ。貴様が見限ったこれが…」
ハジメは牙突を構える。

「人間の強さだ。」

ハジメの姿が掻き消える。

造物主の魔法が放たれる。

造物主の魔方陣から放たれた魔法が無数の光となってハジメを襲う。しかし、その全てをハジメは突き破り、

造物主を貫いた。

「ふ、ふははははっ。我を倒すか…人間。」

「ふん。俺より人間くさい貴様が言うな。」

「…ははははははははっ。いずれ、また会おう。ハジメ」
笑いながら消えていく造物主。

崩壊しかけている宮殿に降りるハジメ。

「信じられぬのう。勝ってしまうとは。」

ゼクトが話しかける。

「ゼクトか、ちょうどいい。貴様に話がある。」

「む？なんじゃ？」

…

…

…

「ナギside」

「いねえ。」

「姫子ちゃんを安全なところへ連れて行き、俺も参戦しようと思った
ら、もう入り込める余地なんて無かった。」

「だから、観戦してたわけなんだが。まさか、本当に勝っちゃうとは
なあ。俺でもちよっときついと思うぜ。」

「で、終わったと思ってラカンたちと様子を見に来たら、いない。
ハジメどころかお師匠もいない。」

「はっはっは。いやあ、ものの見事にいねえなあ。」

「まさか、やられたのか？」

「造物主を倒していたのは、見ましたからやられたという事は、無いと思うのですが…。」

ラカンたちもやっぱりわからねえよな。

「姫さんになんていえば言いんだよっ」

「そうですねえ。正直にいないとおっしゃったらどうなるでしょうねえ。」

「ワッハッハッハ。なんか面白い事になりそうだがな。」

俺は思わず頭を抱えたくなった。

…

…

「と、言うわけでハジメもお師匠もいなかった。」

「な、なんじゃと？」

うわあ。姫さん顔怖いぞ。言わないけど。

「ハジメは生きておった。そして、お主らの前に現れた。」

「お、おう。証拠に姫子ちゃんここにいるじゃん。」

「なら、なぜここにおらん？」

「ハジメ：どっかいっちゃったの？」

あ、姫子ちゃん今それは禁句。

「ふふ。この半年、わしの前に現れもせんで…やっと現れたと生きていたと思ったら…、どこへ行ったのじゃっ。ハジメの奴はっ。」

うおお。怖い。くそっ全員逃げやがって、何で俺がこんな目に。畜生、ハジメの奴。

「いや、だから分からないっ」

「探せ…。」

「て、えっ？」

なんか、嫌な予感が…。

「探すのじゃっ。ハジメの奴を新世界、旧世界を問わずに探すのじやあっ」

「えええっ？」

だからどこに行ったのかすら分からないって言わなかったか？俺。

「絶対に逃がさんからのっ。ハジメ」

王宮に姫の声が轟いたとか何とか。

—side end—

—主人公side—

「クシュンッ」

誰か噂でもしているのか？

「…大丈夫か？」

「ああ。どうせ噂でもしているのだろう。」

そう言うのと、造物主は笑みを浮かべ、

「貴様も大変だな…。」

「なに。いつものことだ。…で、どうだ。話に乗るか？」

造物主に問う。

「人間というものはどこまでも面白い。そうだな、乗るとしよう」

「では、準備からだな。俺は旧世界に行く。貴様は…」

「この世界と位相。魔方の構築じゃな。」

ふ、分かっているようだな。

「そういうことだ。資料はここに旧世界のものもある。後で読んでおけ。」

暗い部屋から出る。

「ではな。」

別れを告げる。

「貴様も達者でな。」

造物主も応える。

さて、旧世界へ行くのでしょうか。

第21話（後書き）

さて、戦争編も終わりました。若干強引な事は否めませんが、これから数話、幕間のような後日談のようなものを書いてから、原作に入りたいと思います。ではまた。

幕間 1 (前書き)

戦争編が終わったのでこれからしばらく幕間になります。戦争中、戦争後を含めたものになると思います。時系列は余り気にしておりませんのであしからず。

幕間 1

青年は自らの想いを知る
騎士と姫は結ばれる

幕間 1

～結婚～

—主人公 side—

「ハ、ハジメ。ど、どうかの？ おかしなところはあるかの？」
アリカが純白のドレスを纏って、俺に聞く。

しかし、アリカの美しさに見惚れていた俺には、それに応えるには
少々時間が必要だった。

：遡る事 1 週間前

造物主との戦いが終わってから、早くも 1 年が過ぎようとしていた。
アリカたちも忙しいとは思うが、俺が暗殺などで稼いだ金で開いた
学校の卒業生がそろそろ力になるだろう。クルトもなかなか内政な
どでいい線いっていたしな。

俺は今ある目的のために旧世界に来ているわけだが、

「なぜ、貴様らここにいる？」

鳥頭とその愉快的仲間達が俺の下に来た。

「そりゃ、もちろんお前と決着つけるためっ」

「ちげえよ。」

すごむラカンに突っ込む鳥頭。

「まあ、俺も決着つけたいんだけどよ。今日は違う目的でお前を探してたんだよ」

「ええ。それとあなたに訪ねたいことがありますてね。」
む。何かばれたか？まだこいつらに知られるわけにはいかないのだが。

ナギが口を開く。

「お前。姫さんあ、今は女王か。まあいいや。姫さんのこと、どう思ってたんだよ。」

「…なに？」

少々理解するのに手間取る。

「どういうことだ？」

「だーかーらよっ。お前がアリカ姫のことを好きなのかどうなのかって聞いてんだよっ」

ラカンがナギの言葉に補足する。

俺が、アリカの事が好きかどうか…。

そして、思い出されるのは造物主と最後に戦ったとき。俺は確かにアリカの事を思い描いていた。それと同時に思い出されるのは、アリカを護衛していたときの事…あの夕日の見える丘で、俺は確かに…アリカに見惚れていた。

くく、なるほど。俺はどうやら、アリカの事が好き…だったようだな。まさか、俺が人好きになる事があるうとは。しかし…

俺は手を見ながら、答える。

「くく。今更気づく時点でどうかと思うが、たしかに俺はアリカの事が好きだよ。…だが、この手は余りに血に塗れている。」
そして、鳥頭たちを見ながら、

「そんな俺が、奴の前に姿を見せる資格があると思うか？」

「ふふふ。思ったより素直に感情を吐露したかと思えば…。しかし、ナギに似て、変な所で臆病ですね。」

アルビレオが少し可笑しそうに言う。

「なっ。誰がこんな冷血野郎に似てるだっ？」

「ワッハッハッハ。」

「笑うなっ。ラカン、てめえ。」

なぜか、殴りあい始めるラカンと鳥頭。

「アリカ姫が今更そんなことを気にするお方ではない。俺らと一緒に来てくれるか？」

詠春が問うてくる。

「ええ。アリカ姫の気持ちを知ってからでも遅くは無いでしょう？」
アルビレオも微笑を浮かべながら、俺に聞く。

「…ならば、行ってみるか。顔も見たいしな。」

思い出すのは、あの強い光を宿した瞳。行くのも吝かではないな。

一王都オステイア

「ひ、久しぶりじゃの。ハジメ。」

「ああ。久しいな、アリカ。いろいろと忙しそうだな。」

王室ではなく、私的な部屋だがある程度は広い場所で俺はアリカと向かい合っている。

「当たり前じゃろ。どっかの誰かさんは生きておったというのに、私の前には現れず、旧世界に行っていたというのじゃからな。」
俺をジトツとした目で睨んでくるアリカ。

「くく。なに、これからはアリカを始め、皇女やマクギルで平和の礎を築くのだろう？俺の出番は無いほうが良からう。」

「ふふ。それもそうじゃの。まあ、マクギルがお主を真剣に探しておったがのう。」

―それは主にアリカのせいだとは、この場に突っ込むものは居ない。

それからも他愛の無い話をしていく。

久しいな。楽しいと感じるこの感覚は…。俺は思った以上に目の前に居る奴に惚れているのかもしれない。

「そ、それでじゃの。ハジメ。」

「ん？」

突然、挙動不審になるアリカ。

「こ、これはの。…ナギたちに聞いたのじゃがの。」

「今日、ここに来たのは、わ、私にお主が…気持ちを教えようと思つて来たのじゃと、聞いたのじゃが。」

俯いてうつすらと、紅くなっていくアリカの顔。

「っ。…ああ。そうだな。そろそろ、ごまかしも効かなくなってきたようだしな。」

だめだ。…何だこの感情は。アリカが、その挙動すらも愛おしいと感じる。

俺は、アリカに近づき、その手をとる。

「なっ。ハジメ…？」

驚いたのかアリカが顔を上げる。その顔は随分と赤い。そして、きれいだと思う。

「アリカ。」

「はっ、はい。」
心を落ちつかせる。まさか、これほどまでに、アリカの事が好きだったとはな。

「アリカ。俺はお前の事が好きだ。できるならば、お前と共に：これからを生きていきたい。俺についてきて：くれるか？」

言った。アリカとならば、この先の困難もすべて乗り越えられよう。アリカは目の端に涙を溜め、

「は、はい。」

そして、静かに唇を合わせた。

そして、冒頭に戻る。：

あの後、さっさと結婚式やらなにやらと、どんどん準備が進んでいった。マクギル：用意が良すぎだろう。普通王族が結婚するのに、もっと手順があると思うのだが。そして、俺は白い礼装を着け、アリカのところに連れて来られたのだが、

「だ、黙るでない。ど、どうなんじゃ？」

顔を紅くするアリカ。まだ答えていなかったな。

「：あっああ、すまん。：見惚れるほどにきれいだぞ。アリカ。」

「そ、そうか。良かった。」

途端に笑顔になるアリカ。その笑顔が愛おしい。

「では、行くか。」

手を差し出す。

「うむ。よろしく頼むぞ。我が騎士よ。」

俺とアリカ。その間にはしっかり握られた手があった。

結婚式はパレードのように街を回るものとなった。手順を踏まなかった事も考慮したそうだ。

街を埋めている、凄まじい人の数を見ても、アリカの人気が伺える。

「アリカ様〜。」

民達がうれしそうにアリカに手を振っている。それに笑顔で応えるアリカ。

民達のうれしそうな顔を見て思う。

やはり、俺の目に狂いは無かったな。アリカはこの先、礎を築く重要な役目となるだろう。

「これ、お主ももっと応えんか。お主も英雄なのじゃぞ。」

そんなことを考えていると、横に座っているアリカに言われる。

「俺が、英雄？」

「なんじゃ。知らなかったのか？ ああ、旧世界に行っておったのじやったな。」

話に聞くと、どうやら俺がパイルドライバーであったのは周知の事実になったらしい。さらに、それは悪徳なる政治家や闇商人を殺しておったのだという話であり、たった一人で、世界といち早く戦った英雄として民達に認識されているらしい。ちなみに情報源はマクギル。あの爺…。

「騎士様〜。アリカ様を守ってね〜。」

子供の声に、手を振りながら応える。どうやらパイルドライバーよりも、アリカを護衛していた『騎士』という通り名の方が、俺として認識されているようだ。

「ふふ。しっかり守ってくれよ？ 騎士様。」

いたずらっぽい笑みを浮かべこちらに言うアリカ。

「当然だろう。愛しい者を守るのは、男として当然の事だ。」

そう言って、アリカの顔を引き寄せる。

周りの喧騒も大きくなる中、少々顔を赤めるアリカと唇を合わせた。

このパレードも、まだまだ終わりそうにない。

…これからもよろしくの？ ハジメ

…ああ、こちらこそよろしく頼むぞ。アリカ

幕間 1 (後書き)

まずは、アリカとの結婚式を書きました。どうでしたでしょうか。
いやあ、ラブコメも難しいですね。

次回は何書こうかな。マクギルの方面とか考えています。ではまた。

幕間2

少年は世界の裏を知った
されど少年の夢は明確に

幕間2

～先見～

—マクギル side—

「ふう。」

今日まで済ますべき案件を全て済ましたわしは、椅子の背もたれに背中を預け、一息つく。

「お疲れのようですね。どうぞ。」

コーヒーを淹れた秘書のクルト君がわしに声をかけ、コーヒーを机の端に置く。

「ほほ。なあと、ハジメと出会った時から苦勞する事になるとは思っておったわ。」

そう言いながら、コーヒーを飲む。うむ、うまいのう。

クルト君はもともと紅き翼の面々についていった者の一人じゃった。まあ彼はアrika女王に惹かれていたのもあったのじゃろう。そこでクルト君は、ハジメに出会った。

クルト君はもともと、暗殺などの類が大嫌いで大変じゃったのう。

……

「なんで、あなたほどの力がありながら。なんで、こんな事をするのですか。ハジメさん。」

まるで、夢破られた少年のようなクルト君の問いに、煙草を吸いながらハジメはそれに応える。

「阿呆か。小僧、一人の力がどれだけ無力なのか知っているか？小僧が言う、汚い手段とやらで手に入れた情報で、国一つ滅ぼす力を持っているのを知っているか？」

ただ、淡々と述べながらクルト君に近寄るハジメ。

ハジメの姿が消えたように見えた次の瞬間、

「があっ」

ハジメがクルト君を頭を掴んで地面に叩きつけておった。

「小僧。俺がどれだけ、貴様を叩き伏せる事ができたとしてもだ。それは国を左右できる力ではない。」

「ううっ。」

地に這いつくばっておるクルト君を尻目に、ハジメは用が済んだとばかりに部屋から立ち去る。

「小僧。それでも納得できないというならば、マクギルの下に着いて、世界を……人の醜さを知れ。」

立ち去る間際にハジメがそういい残した。

全く、素直では無いのう。

「大丈夫かのう。クルト君。」

「：マクギルさん。僕が見ていたのはきれいなだけの外側だけだったのでしょうか？」

俯きながらクルト君が問うて来る。

「否定はせん。ハジメが言っておった事もじゃ。」

クルト君が手を握り締める。

「マクギルさん。僕を、僕を秘書にしてください。ハジメさんが言

つていた事がどういうことなのか。僕は、自分で知らなきゃいけない。」

ふお。ハジメの奴…これを狙っておったのかの？だとしたら、本当に敵に回したくないのう。

「ふおっふお。良からう。未来あるものを導くのもわしの役目じゃろうて。」

……

あの子のクルト君の成長は凄まじかったのう。国の醜い部分を見てもお、いや、見たからこそ、自分が何をすべきなのか分かったのじゃろう。

もう立派な政治家じゃ。いつ、わしのあとを継いでもらおうかのう。楽しみじゃ。

楽しみといえば、ハジメがいつの間にか作っておった、これから先を担うものを育てる学校の卒業生達もすごいのう。政治だけでなく、教育や魔法学においてももうすでに名が知れているものもおる。ありえんことじゃ。

しかも、ハジメが作った学校の教師陣がまたなんとも言えん。ハジメ曰く、

「この先を担うものたちに必要なもの？そんなものは全てだ。必要で無いものですら、活用する。それが出来ないような人間に先は担えん。」

厳しいと思ったものじゃが、それを実際に行うものたちを見てたまげた。すでに隠居した、高名な魔法使いを始め、優秀であった政治家、役人、果てには犯罪者すら雇っておった。

まあ優秀な者ばかりなので助かってはおるんじゃが…ハジメにしか

できんな。あんな事。

「しかし、きれいでしたね。アリカ様。」

先日の結婚パレードの事を思い出しておるのか、クルト君が嬉しそうな顔をしておる。

「少々残念だった気がしないのかな？クルト君。」

悪戯心のままにクルト君に聞く。

「いえ、ハジメさんならきっとアリカ様を幸せにしてくれるはずです。」

「世界を敵に回してでもするじやろうな、ハジメなら。」

「はいっ。きっと僕にはできない事です。」

「そういえば、ハジメについてクルト君。君の答えは見つかったかの？」

昔のことを思い出したついでにクルト君に問うてみる。

「いえ、まだ分かりません。結果的にハジメさんがやってきた事は、正しい事でした。でも、やっぱりまだ納得は出来ません。」

「そうか。だが、答えを求める事はやめちゃいかんぞ？」

「もちろん、そのつもりです。いつか、いつかハジメさんに答えられる日が来るまで。」

ふおっふおっふお。本当に先は明るいいう。

「それじゃ、マクギルさん。こちらが明日までに必要な資料です。」
擬音が聞こえてきそうなほどに、積み上げられた資料の束を持つてくるクルト君。

「さあ。民達のために頑張らしましょう。」

ふおっふおっふお、眩しいいう。さて、わしも頑張らねばならんの

幕間 2 (後書き)

というわけで、マクギル視点でした。
次はどのような話を書こうかな。ではまた。

幕間3

世界を救うピース
それが使うには時がある

幕間3

～役割～

戦争が終結し、早3年。

ここはM・M首都。メカロ・メセンブリアマクギル元老院議員の邸宅。

そこには、世界を救いし英雄達が揃っていた。

「さて、集まってもらったようだな。」

口を開いたのは、騎士と呼ばれる男ハジメ。

「ったく。決闘かと思ったら、なんだ堅っ苦しいなあおい。」

愚痴を言っているのは、千の刃の男ジャック・ラカン。

「ラカンさん。これから、大事な話があるんですから。そんなにだらけないでください。」

そんなラカンに小言を言うのは、クルト。

「構わん。どうせ、そいつらに言う事は何いに等しい。…というか、貴様らと呼んだ覚えは無いんだが。」

ハジメがさも鬱陶しいかのように、疑問を口にする。

「そうだったのか。すまん、俺が呼んだ」

その疑問に答えるものはガトウ。気まずそうに頭をかいている。

「けっ。頭使ったって事は、ハジメたちがちゃっちゃとやっちゃえよ。」

「心配するな、鳥頭。誰も貴様の頭に期待しじゃない。」

煙草を吸いながら片手間で言い放つハジメ。

その言葉に口を引きつらせる、鳥頭こと千の呪文の男、ナギ。

「上等じゃねえかつ。てめえとはいい加減決着つけたいと思ってたんだっ。この野郎。」

紫煙を吐き出しながら、煙草の火を消すハジメ。

「では、今回集まってもらった理由を話そう。」

「無視すんなっ」

ナギが叫ぶ。が、そんなことは無かったように話を続けるハジメ。
ナギが部屋の隅で、いじいじしている。

「話は簡単だ。この世界。魔法世界のその行く末に着いてだ。」

その言葉に、真剣な目つきになる面々。

「魔法力の枯渇…だったか。その解決法でも見つけたのか？ハジメ。」

ハジメに問う詠春。

「魔法力の枯渇に関しては、すでに考えはまとまっている。これから少し時間と技術を有するがな。」

「それは、またすごい事を簡単に言いますね。…では今回集まった理由は、魔法世界の亜人たちですか？」

ラカンを見ながらアルビレオが、今回集まった理由を推測する。

「ああ、そういうことだ。これに関してはまだ、その方法を確立させていない。故に貴様らに頼みたい事は…」

「その方法の模索ですか？しかし、あなたらしくない。もうある程度目星はついていると思ったのですが。」

アルビレオが驚いた様子でハジメに聞く。

「いや、それに関してはすでに、げぼ：協力者がいる。そして、俺も本腰を入れて調べている。：貴様らにやってもらいたい事はそれの仕上げだ。」

アルビレオの問いに言葉を選びながら喋るハジメ。

「協力者：ですか。失礼ですが、どちらさまでしょうか？」

アルビレオが目を細めながら問う。

それに対し、ハジメは少し逡巡し、

「ふう、：言っても構わんか。：造物主だ。」

その言葉に面々が驚きに目を見開く。

「なっ。どういうことじゃ。奴は、やつは生きておったのかっ？」

ハジメの隣にいたアリカが、戸惑いながらハジメに問いを投げかける。

「おいおい、やつこさんが生きていたのも驚きだが。：ハジメ、お前奴を許したのか？」

ラカンもハジメに問う。

他の面々も言葉は発しないが、同じような疑問が胸中にはあった。

「奴を許す事はない。これから先もな。だが、奴には生きてもらわねばならん理由がある。ある時まではな。それに、奴の知識とやらも世界を救うためには有用であろう？」

言外に、それほどのことをしなければ、世界など救えはしないとハジメは言っていた。

「じゃが、：奴は、奴は。」

それでも、納得できないアリカは、ただ口ごもる。

そんなありかの頭に手を置きなでるハジメ。

「なに、納得するもしないもこの世界を作ったのは奴だ。ならば、最後の尻拭いは奴にやらせるべきであろう。」

「では、貴様らにやってももらいたいことについて、説明する。」
面々を見ながらハジメが続ける。

「まず、マクギル、アリカ、クルトにガトウ。この世界の政治体制を変えて貰う。競争し、向上するならともかく、腐敗していくのは唯の怠慢だ。後で、その辺りの話しをする。時間を空けておけ。」
アリカやクルトを見るハジメ。

それに対し、頷くアリカやクルト。

「次にそれ以外の奴らというより紅き翼^{アラルブラ}。貴様らには新世界・旧世界で暴れてもらおう。紛争地帯を片っ端から片付けろ。救える者がいれば片っ端から救え。いくら金を使っても構わん。だろ？マクギル」

マクギルを睨みながら喋るハジメ。

「も、もちろんじゃ。議会は通す。」
なぜか焦りながら答えるマクギル。

「お前らには、詳しい解決法が出来次第協力してもらおう。特に、鳥頭とアルビレオ。貴様らにはやってももらいたい事があるしな。」

「ええ。分かりました。面白そうですねえ。」

笑みを浮かべながら了承するアルビレオ。

「お、なんだ。傭兵まがいの事か。いいねえ、最近暴れてなかったからよう。」

やる気を出し始めるラカン。

「私は、そろそろ妻を娶るのだが…。」
嬉しそうに言う詠春。

「ああ、近衛の者とか。なに、貴様にもやってももらいたい事がある。そのときまでは、暫くは休んでおけ。」
あっさりというハジメ。

「まあ話は以上だ。あとで詳しい情報などが手に入れば、渡す。ではな、貴様らはやるべきことをやってくれ。」

そう言って、アリカをつれ退散するハジメ。

各々も解散して各自がやることに専念し始める。

そして、これから数年紅き翼の活動は目覚しく、偉大なる魔法使いとたたえられるようになる。

幕間3（後書き）

下準備な話でした。余り説明してしまうと、ネタバレしてしまうので難しいです。そろそろ最後の終わり方は構想まとまったので、あとはどう原作に介入するか考えている日々です。もうすこし幕間は続くと思います。

いつも読んでいただきありがとうございます。ではまた。

幕間 4

誰しも意地というものがある
青年も例外ではない

幕間 4

～意地～

英雄達がその役割を確認しあった集結より少し後、
見渡す限りの原野において、ハジメとナギは距離をとって向かい合
っていた。

「準備はいいか？ ハジメっ。」

杖を構えるナギ。

「構わん。いつでも来い、鳥頭。」

刀を抜くハジメ。

…なぜこのようなことになったかは時を少し遡る。

王都オスティア。執務室にハジメはアリカはいた。

普段は、世界救済のために旧世界と新世界を往来しているハジメだ
が、数ヶ月に一月ほどアリカのために王宮にいる。

主に護衛として、そして秘書としての仕事をしていた。

「王族に、これほどまでの決定権があるのは、やはりまずいものがあるな。」

仕事の内容から、これから先の政治の案件を頭に入れながら仕事を

こなすハジメ。

「ふむ。確かに、メガロ・メセンブリアM・Mや帝国とはまた違う体制じゃからのう。」
ハジメの言に、そう返すアリカ。

そんな会話を織り交ぜながら、黙々と仕事をこなし続けるアリカとハジメ。

仕事も一息つこうとしたとき、王宮が騒がしくなる。

「む？何かあったんじやろうか？」

「…、鳥頭が来たようだ。」

若干疲れた顔をするハジメ。

そして、執務室の扉が勢い良く開かれた。

「ようっ。ハジメっ、戻ってきたみたいだなっ。」

ナギが笑みを浮かべながら、入ってくる。

「はあ。何のようだ？鳥頭。」

思わずため息をつきながらも質問するハジメ。

「何って、決まってるだろっ。…そろそろ、決着を着けるときじゃねえのか？」

握り拳を出し、挑発的な笑みをするナギが答える。

「貴様もこだわる男だな。」

呆れた口調で言うハジメ。

「前は負けちまったが、今度はそうはいかねえ。ちゃんと広え場所
はとっといたぜ。魔法も何も気にする事はねえ。」

「ふむ。」

ふとアリカを横目で見るハジメ。

「ふふ。やってみてはどうじゃ？どちらが強いのか妾も知りたいぞ
？」

どうやらアリカも乗り気である。

ハジメは観念したように、されど目は鋭く、

「良いだろう。では、行くとしよう。」

「へへっ。そうこなくっちゃな。じゃ、行くか。」

…そして冒頭に戻る。

ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス
「雷の暴風っ。」

ナギの魔法が雷となって、ハジメ目掛け放たれる。

「破あっ。」

ハジメの牙突が、斬撃となってナギに向かう。

雷と斬撃が衝突し、弾ける。

両者は、それがさも当然かのように笑みを浮かべる。

「小手調べは。」

「いらねえようだなっ。」

両者の姿が掻き消え、ただ衝撃だけが、2人が闘ぎあっていることを証明していた。

—観客side—

「おうおう、やってんなあ。俺もやりてえぜ、おい。」

ラカンが2人の戦いを見ながら、そんなことを呟く。

「今は、どちらが優勢なのじゃ？」

アリカがラカンに問う。

ラカンが要る理由。それは、アリカの護衛。アリカも2人の戦いは見たかったのだった。他にもアルビレオも護衛としてついてきている。

「うーん。接近戦のときは、やっぱりハジメだな。やつのその攻撃の圏内は、俺も出来ればいたくねえ。」

ラカンはずハジメを評し、

「だが、一度離れりゃ、ナギが大魔法ぶっ放しているな。あれは、やっぱりハジメもきついだろう。」

そう解説する最中、

「…千の雷つ。」
キープル・アストラペー

ナギが大呪文を放つ。あたり一面に稲妻が走る。

「おっと。あぶねえな、おい。」

こちらに少し飛び火したものを、ラカンが気合防御で打ち消す。

「破あああつ。」

稲妻が走る中、それを打ち貫いてハジメがナギに向かい抜きでる。

「ちっ。」

それに対し、雷を槍の形に収束させた者を放つナギ。

瞬間、爆発を起こし辺り一面に衝撃が広がる。その衝撃で周りの山々は崩落を始める。

戦いは続いていく。

「いやあ、すごいんですねえ。2人の戦いは。」

アルビレオがいつも通りの、真意が分からない笑みを浮かべながら言う。

「ふむ。じゃが、いつまでかかるのかのう。最早、昨日までの荒野、山々の光景がただの焦土と化しておる。」

アリカが若干呆れたように呟く。

すでに、数時間が経っていた。

—side end—

「はあっ、はあっ、はあっ。いい加減倒れろよハジメっ。…もう刀握ってる手が震えてるぜ？」

左腕と左足を切り傷だらけにし、脇腹には穴が開き血まみれのナギが言う。

「ぜえっ、ぜえっ、ぜえっ。貴様こそ、…出血多量で今にも倒れそうだぞ？鳥頭。」

右腕は焼かれ、体中がボロボロになっている、こちらも血まみれのハジメが言う。

言い終えた両者は、笑みを浮かべながら、

「「…：はっ。バカを言うな、倒れてなどしてたまるか。」」

お互い杖を、刀を構える両者。

ナギはその身の魔力を高める。

ハジメはその身に感卦螺旋法を宿す。

両者の間に静寂が宿った瞬間、

両者の技が放たれた。

ナギは雷の大槍を振るう。

ハジメは牙突を放つ。

両者が激突した瞬間に、天は割れ、辺り一面に粉塵が舞い上がった。

その光景を見て、どちらが勝ったかを見極めようとする観戦していた面々。

粉塵が晴れる。

そこに、立っていたのは…ハジメであった。

—主人公side—

「はあっ、はあっ。」

ちっ、危なかった。いや、違うな、今にも倒れそうだ。

「がはっ。てめえも限界のはずだろ…。なんで立ってられるんだ？
倒れ付している鳥頭が聞いてくる。」

「…なに。好いている奴が見ている前で…倒れるわけにいかんだろ
う？…意地というやつだ。」

「ハジメ。」

そう叫びながらこちらに走ってくるアリカを見る。

「けっ。意地だって…俺にだってあらあ。」

そう言って、手をつく鳥頭。

「まだ、やる気か。」

自然と笑みが浮かぶ。…やはり、阿呆だこいつは。

だが、…面白い。

「あったりまえだあっ。はあっ、はあっ。」

立ち上がる鳥頭。

そして、こちらに拳を振りかざす。

だが、忘れるな。接近戦は俺の距離だ。

鳥頭の拳をよけ、鳥頭の右頬に左の拳を打ち抜く。

「がはあつ。」

それでも、倒れんかつ。

なお、こちらに向かつてくる鳥頭。その拳が俺を射抜く。だが、もはや…その拳に力は無かった。

「くっ。いい加減に、…眠れっ。」

鳥頭の頭を鷲掴み、地面に叩きつける。

「はあつ。少しはお前の事を認めてやろう。…ナギ。」

ふらふらになりながら、近くまで来たアリカのもとへ歩いていく。

「全く、バカじゃのう、男というのは。」

そう言って笑うアリカ。

「ふん。…意地というものだ。」

「おゝい。大丈夫か？ナギい。」

「ふふふ。気を失っているようですねえ。」

ラカンとアルビレオがナギのもとへ寄っていく。

全く、阿呆らしくなってきたな。

だが、こういうのも…悪くは無い。

ナギとの勝負を思い返しながら、俺はそう思っていた。

幕間 4（後書き）

ネタも話も浮かばない G - q a z です。結局、昨日も今日も一話だけで終わってしまった。

というわけで、ナギとの戦いでした。勢いだけですので読みにくいと思います。

文才が欲しいと切に願う今日この頃。ではまた。

幕間 5

騎士の剣は折られた

されど青年の牙は折れぬ

幕間 5

～相棒～

—主人公 side—

アリカの仕事も終わり、共に部屋へ向かう途中。

「のう。ハジメ。」

「ん？どうかしたか？」

「いや、そういえばハジメがいなかった半年間があったじやろ。そのとき、ハジメが何していたのか気になっての？」

アリカが戦争中、俺がアリカたちと行動を共にしていなかった日々の事を聞いてきた。

そういえば、言ってなかったか。

「それに、その腰に携えている剣。最初にハジメと会ったときとは違う物じゃよな？」

そう言っつて、俺の腰元にある刀を見るアリカ。

「ふむ、そうだな。では、あれからのことを話すでしょう。」

……時は俺が造物主に敗れた後まで遡る

最後の衝突の瞬間に意識を手放した俺は、激痛に目を覚ました。

体がボロボロになっていた俺だったが、なんとかその命をつなぎとめていたことを、そのときに知った。

「：ぐっ。ああああっ」

しかし、凄まじい激痛が俺を襲い続けた。

激痛に意識を手放し、激痛で目覚める。それを幾度か繰り返している、

「ほう、目を覚ましたか。やはり、無茶苦茶だわ。お前さん。」
懐かしい声がした。

「ほれ、これを良くかんで飲め。幾分か楽になるはずだ。」

俺の口に何かが入れられる。俺は空腹からか、躊躇い無く噛んで飲み込んだ。

「っ。」

「かかか。苦かろう。しかし、良薬は口に苦しと聞くぞ。」

俺の苦悶の顔を見て、笑っている男。

「くっ。なぜ、貴様がここに：？」

「そりゃ、こっちの台詞だ。ハジメ。驚いたぞ？ボロボロで今にも死にそうなお前が、俺達が良く戦っていたあの荒野に倒れていたときは。」

その言葉を聞いた俺は、愕然とする。

「：ここは、龍の山脈という事か。」

あの瞬間に跳ばされたか、俺が無意識にこの空間への入り口を紡いだのか：。

「とりあえず、礼を言おう。だいぶ楽になった、ナーガ。伊達に長生きはしておらん。」

そう言うと、ナーガは胸を張り、

「おう。ここら一帯の長だしな。」

ナーガ。今は人の姿をしているが、その真の姿は巨大な龍であり、俺が初めて負けた相手でもある。この地では、こいつに鍛えられたようなものだ。

「それで、いったい何があったってんだ？お前が、そんな所そこの奴に負けるとは思えねえんだがよ。」
ナーガが目を鋭くさせながら俺に問う。

俺はこの龍の山脈を出てからのことを要約して話した。

「ほうほう。お前がね。それは人の世では英雄と呼ばれる人間になるのではないか？」

肩をすくませながら、ふざけた口調で言うナーガ。

「くく。それはないな。俺は表に出れるようなことは何一つしてはいない。」

「それで、これからいったいどうするんだ？ハジメ。剣も折られちゃったんだろ？」

「旧世界に行くつもりだ。まず、奴の、造物主の目的が踏み違えている事を、奴の眼前に叩きつけねばならん。それから、刀を仕入れる事だな。」

造物主のとの戦いでこの世界にきてからというもの、幾多の修羅場を潜り抜けてきた相棒が折れたことを思い出す。

それを聞いていたナーガは、

「前者はまあお前しだいだろうが、後者は無理だな。」

と刀の件について、そう言ってきた。

「…なぜだ？」

「お前は知っていたかどうか知らんが、あの剣は恐らくお前のために作られたものだ。刻印を解析してみたからこそ分かるが、あれはとりわけ頑丈に出来ていた。…良く考えてみる。貴様の牙突…それに耐え得る剣など、本来はありえん。」

牙突…確かに、ただの剣では簡単に折れたことがあった。最近では咸卦法など、あの刀には上乘せしなからの技ばかりであったな。

それが、あの刀の限界を超えた？

「あの技は突貫力に特化している。普通の剣では言わずもがな、上等な剣ですら10回も持たん。」

刀なくして、奴に：造物主を倒す事ができるのか？

：難しいであろうな。

「それでだ、ハジメ。お前久々に戦^やろうじゃねえか。お前がどれほど強くなったかを知りたい。：もう回復したろ？」

突然提案してきたナーガ。

「回復はしたが、刀をどうにかする方が先だ。」

「だからよ、凄まじく頑丈でなおかつ魔力時を通しやすいものだろう？あるじゃねえか、すぐ近くに。」

刀のことを考えなければいけない俺に、ナーガはそんなことを言う。

「なに？：まさか。」

「おう。俺は龍だ。俺の爪か牙を抜いて見せろ。後はそれを、お前の思うとおりに加工すればいい。刻印も施せば、件の奴にも効くだろう？」

「俺にあの姿を相手にしろと？」

「かっかっか。強くなってるんだろ？期待してるぜえ。：ここでもたばるようなら、てめえの信念も高が知れてるって事だ。」

言ってくれる：この阿呆が。

「ふふふ。面白い。貴様の牙一つといわず全て抜いてやる。後悔しろ。」

体を起き上がらせながら、ナーガを睨む。

「かっかっか、やってみろよ。」

場所を荒野へ移す。

「さてさて、この姿になるのもお前が出て行って以来か。久しいな。」

膨大な魔力を放出するナーガ。

放出された魔力によって、辺り一面に暴風が起きる。

「ふん。結局その姿の貴様には勝つ事は無かったな。だが、今日は勝たせてもらおうぞ？ 戦利品は貴様の牙だ。」

「はあああつ。」

ナーガの身に一気に魔力が収束する。

周囲の大地がひび割れる。

巨大な体躯、柱を思わせる太き爪、鋭い牙を宿した竜王ナーガの名に恥じない姿となった。

「では、やるとするか。」

ナーガが言い放った瞬間、ナーガが凄まじい速度で飛び上がる。

そして、急降下。その勢いのまま爪を振り下ろす。

「でかい図体をしておきながら、相変わらず恐ろしい速度なことだ。」

それを避けながら、どうやって奴にダメージを食らわせられるか考える。

「：避けてばかりでは、俺には勝てんぞつ。ハジメツ。」

口内に魔力を収束させるナーガ。おいおい、本気だな。

「かあつ。」

ブレスを放つ、ナーガ。咄嗟に上空に跳び、圏外へと逃げる。

辺り一面を溶かしつくすナーガのブレス。

「かっかっか。甘いぞ？ ハジメエ」

「なっ。」

俺の眼前にいるナーガ。この距離はまずいつ。

刹那振るわれる爪に、俺は防御しながらもろに喰らってしまふ。

「がはっ」

さらに、ナーガの攻撃は続く。

爪、殴打、魔法、そして、

山に埋め込まれた俺に、魔力を収束した砲撃を放つ。

その砲撃は俺を巻き込みながら山を一つ消す。

砲撃に吹き飛ばされた俺は、唯倒れ伏していた。

「おいおい、そんなもので、世界を救うなんて甘っちょろい事言っているのか？ ハジメ」

上空に飛び続けながら、ナーガが嘲るように言う。

「お前の信念はそんなものか？ 貫くと決めたのでは無いのか？ ……そんなところで倒れている暇があるのならっ、俺を倒す事だけを考えろっ。」

言われなくても分かっているっ。俺は手を突いて、立ち上がる。

「（くく。目がまだ死んではない…か）まだ、やるきか？」

未完成などとは言ってはおれん。

感掛螺旋法を行う。ただ、爆発的な威力を持って…奴を、ナーガを一発ぶん殴る。

ナーガを睨む。

たとえば、血だらけだろうが、なんだろうが、俺が屈するときには死ぬときだけだ。

「いくぞ…ナーガっ。」

一気にためた力を解放させる。ナーガから見ても消えたようにしか見えんはず。

「っ。」

その勢いのまま、ナーガの顔に向けて、ただ、渾身の一撃を持って奴を貫く。

「破あつっ。」

「があっ。」

もろにそれを喰らったナーガは吹き飛ばされた。

その牙を一つ宙に翻しながら…。

それを見た俺は、笑みを浮かべながら意識を手放した。

目を覚ませば、俺はナーガの住処にいた。

「よう。気がついたかこの野郎。」

人型の姿をしたナーガが、機嫌悪そうに隣に座っていた。その奥には、でかい牙があった。

「なんだ。口が痛いのか？ナーガ。」

思わず笑みを浮かべながら、ナーガに言う。

「起きた直後にご挨拶だな。ったく、しかし、本当に持ってたかれるとは思ってなかったぜ。あの最後の奴ありやなんだ？」

「ああ、あれは咸卦法のままさらに咸卦法を行う。感卦螺旋法と名づけた。まだ、未完成だな。」

あれは完成させねばならんな。不安定すぎて使う気になれん。

「ありゃ、面白いな。器がお前じゃなければ使えないようなバカな技だが。…言ってみれば、お前だけの技か。」

「器？」

気になる単語が出てきたので思わず問う。

「なんだ。知らねえで使ってたのか、危ねえなあおい。…器つてのは気や魔力、それを使える上限ってところだ。それがでかけりや大呪文もとんでもねえ技も使える。…器だけで言えば、お前は古龍種よりも大きく感じるほどだからな。」

ほう。なるほど、鳥頭があればどの魔法をつかえるのは器がでかいからか。

「…俺の器が古龍種よりも大きいだど？」

「感覚としてだがな。じゃなければ、感卦螺旋法だったか？あんなもの使えば、爆発しちまうよ。自爆技だ。」

随分と恐ろしいものを考えたものだな、俺も。

「さて、さっさとこの牙を加工しちまうか。刻印も俺がしといてやるよ。前の剣を覚えてるからそれと一緒にいいだろ？」
そう言って立ち上がるナーガ。

「ああ、感謝する。」

「いいってことよ。面白かったしなっ。」

そう笑みを浮かべ、奥に行くナーガ。

それから数日で、ナーガは刀を完成させた。

「どうだ。」

刀を振りながら、その感触を確かめる。

「悪くない。なぜか、あの刀のように手になじむ。」

「ああ、そりゃたぶんその刻印だろうな。良く分からないものが多かったが、きっとこの刻印は恐らく、お前が使わなければ意味無いらんだろうなあ。」

ほう。あの刀は、俺がこの世界に目覚めてからあった刀だったからな。なにかあるのかも知れんな。興味は無いが。

「さて、では俺は急がねばならん。」

これからよろしく頼む、相棒。
刀を腰に携える。

「もう行くのかあ。まあ、なかなか楽しめたぜ。」

「ふん。ではな。」

「おう、さっさと世界を救っちまえよ。ハジメ。」

後ろ手を振りながら、自らの住処に帰るナーガ。

「無論だ。」

さて、まずは旧世界に行くでしょう。造物主、貴様を完膚なきまでに、叩き潰すためにな。

……

…

「まあこのような事があったな。この刀に関してはな。」

「…そうか。龍の牙で…。すごいとしか言えんのう。」

そう言っているアリカを見ると、少々眠そうだった。

「今日はこれまでにしておこう。誰かさんが眠そうだしな。」

少々話が長かったか…。

「む？眠くなどないぞっ」

声を上げるアリカを抱きかかえ、寝室へ向かう。

「今日はもう、寝るとしよう。夜ももう遅い。」

「…ふむ。では、続きは今度聞こうかの。」

お姫様抱っこのためか、少々顔を赤らめながら笑みを浮かべるアリカ。

「そうだな。また今度だ。」

幕間5（後書き）

新しい刀ってどう手に入れたの？というリクエストがあったので書いてみました。まあ大まかには考えていたのですが、ネギまの要素はゼロでしたので…。

原作どうしようか今だ考え中です。最近丸くなってしまった感が否めないなので、過激にでもしてみようかなと考えたら、数話で麻帆良が全滅しました…。

引き伸ばし感がある幕間ですが、G－q a zの構想が出来上がるまでもう少しお付き合いください。ではまた。

幕間6 (前書き)

短いです。そして、アンケートすることになりました。詳細は文末まで。

幕間6

青年は父親に
姫は母親になる

幕間6

～誕生～

—主人公side—

俺はあるところに向かい、王宮を走る。
目的の場所へと辿り着き、扉を開ける。

「アリカ、生まれたかった？」

アリカに問いかける。

そんな俺の様子に、目をぱちくりさせるアリカ。

「ふふ。お主らしくないのう。そんなに慌てるでない。」

そう言って、胸に抱いている眠りに着いている赤子を、こちらに見せるアリカ。

「心配するな、元気な女の子じゃ。」

「はい。それに、アリカ様自身も健康体です。良かったですね。」
隣にいた主治医の女が笑顔で補足する。

「ふう。そうか。」

安堵しながら、アリカに近づく。

「ほれ、抱いてみよ。」

アリカから娘を受け取る。

軽い。だが、重い…な。

「くく、俺が父親になる日が来るとはな。」

壊れそうな娘を抱きながら、心から思ったことを呟く。

「ふふ。お主がそうしていると微笑ましいのう。」

アリカが微笑みながらこちらを見る。

「目元はアリカに似ているな。というより、女の子なのだからアリカに似て欲しい。」

「ふふ。うれしい事を言ってくれるのう。」

しばらく、娘の寝姿を見ていると、

「そうじゃ。名前は決めたのかの？」

アリカが聞いてきた。

「ああ、娘ならばメアと名付けようと思っていたのだが。どうだろうか？」

単純に俺とアリカの名前からつけたただだが、それくらいシンプルな方が俺にはいい。

「なんじゃ。妾とハジメの名前からか。」

「…、良く分かったな。」

そう感心していると、アリカは顔を赤らめながら、

「…妾もそう名付けようと、思っただけじゃ。」

と答えた。

なるほど。

「…くっ。ははははは。」

「なっ、笑うところか？そこは。」

少々気恥ずかしそうなアリカが、少し怒ったように言う。

「いや、なんか可笑しくてな。2人それぞれ考えた名前が同じで、

理由も同じだとはな。」

「ふふふ。それもそうじゃな。」

2人で笑みを浮かべながら話す。

しばらく、会話が続いていると、ふと思い出す。

「そういえば、詠春の奴も子供が出来たそうだ。：お前とはちゃんとした旅行などは行っていないかったしな。ちょうどいい機会だ、行くか？」

「そういえば、そうじゃの。：行きたいのう。」

こちらに向けて笑顔で言うアリカ。

「ならば、1，2週間後に行くでしょう。しっかり体を休めておけ、アリカ。」

「意外と心配性じゃのう、分かったのじゃ。では、準備の方は任せたぞ？」

メアをアリカの腕に戻し、

「ああ、了解した。」

と言って、準備をするために部屋を出る。

それから数日後、俺達は詠春のいる京都へと旅立った。

幕間6（後書き）

困ったときの原作。京都旅行に行きたいと思います。そして、子供が出来ましたね。アリカとハジメに。まあ、特に問題ないかなあとおもいました。

娘なのはあくまでこの作品の主人公がハジメだからです。といっても、一応息子としてそっちを原作編主人公にしたら面白いとも思っただですが。どちらがみたいですかね？

というわけで、アンケートです。こなかった場合は自動的に娘です。？このまま娘で（たびたび登場するかな？）、ハジメが主人公のまま原作編へ。

？息子に訂正して息子が主人公の原作編へ、ハジメは完全裏方へ（もちろん登場はします）。ちなみに、息子のままでもメアの名前でいこうと思っていますが、こういう名前もいいんじゃないかというのも募集です。

アンケートは11月12日土曜の夜ぐらいまでを締め切りとします。なので、更新はその日までなくなると思っています。一応ストックは作っておく予定なので12日の夜に結構更新すると思います。アンケート協力お願いします。ではまた。

幕間 7

旅にでるは京都
そこで戦友と再び見える

幕間 7

～京都旅行1～

ここは京都駅。

「いやあ、久しぶりですね。ハジメにアリカ様。子供が生まれたようで、おめでとうございます。」

幾分か温和になった印象を受ける詠春が、ハジメとアリカに挨拶する。

アリカが抱いている赤子を見て、詠春が尋ねる。

「おお。可愛いんですね。名前はなんと？」

「メアじゃ。」

アリカが答える。

「なに、そちらも子供が生まれたのだらう？そちらこそ、めでたい事だ。」

ハジメが詠春に言う。

「ふふ、詠春も女の子らしいのう。後で会いたいのう。」

「こちらに泊まるのでしょうか？ならば、どうぞ家を使って構いませんよ。そのときに妻と娘に会ってください。」

そう笑顔で答える詠春。

「いいのか？この地はそれほど魔法世界の者にいい感情を抱いていないようだが。」

少し目を鋭くさせるハジメが詠春に問う。

「はは。ハジメは本当に何でも知っていますね。ですが、今そのような過激な事をする人間はいませんし、なにより、戦友が来ているのです。迎えることが当然でしょう？」

長に成り立てでありながらも、風格を滲み出している詠春が答える。

「はあ。後で、それらの人間について教えておいてやろう。宿泊代だ。」

呆れながらも、礼を言うハジメ。

「さて、立ち話もなんですし。まずは、家まで案内します。」

そう言って、駅の入出口へ向かう詠春についていくハジメたち。

……

：

近衛家に辿り着いて、長い階段を上りきったときハジメたちに声がかけられる。

「よう。ハジメに姫さん。あんたらも来てたのか。」

その声に振り返るハジメとアリカ。

そこには紅き翼の面々とアスナ姫がいた。

「なんだ、貴様らも来ていたのか。」

「まあな。姫子ちゃんに世界を見せてやるって約束したしな。それに詠春の子供も見えたかったからな。来たわけだ。」

ハジメの言葉に、ナギが応える。

「まあそしたら、あんたらが来てたというわけさ。子供生まれたみたいだな、おめでとさん。」

「ああ。まあな。」

「ふふ。こうやって集まるのも久しぶりですね。さあ、今日当たり

は宴でもしましょうか。」

詠春が懐かしむ顔で、皆を案内する。

「おう。詠春、なかなか気が利くじゃねえか。楽しみが出来たぜっ。」

ラカンが嬉しそうに詠春についていく。
後の面々もついていく。

…

…

宴は長引き、女性陣と子供はさっさと就寝したが、もちろんまだまだ宴を続けている者たちがいた。

「がっはっはっは。いやあ、ハジメにも子供が生まれたかつ。ハジメに似たらとんでもねえ女になるなっ。」

ラカンがハジメの娘について想像する。

「確かに、俺に似て欲しくは無いな。」

ハジメもそれに同意する。

当然、ここにいる全ての者が酔っている。

「詠春の娘さんはどうですかね？詠春に似れば真面目な感じに、奥さんの方に似ればおっとりとした女性になるのでしょうか？」

アルビレオも話に乗る。

「はは、やはり男親としては妻の方に似てもらいたい者ですね。ハジメはどうですか？」

詠春がハジメに話を振る。

「俺としては、そうだな。：難しいな。：幸せであればそれで良い。」
杯を揺らしながら、ハジメはそう呟くように答える。

「それもそうですね。」

詠春もそれに同意する。

「おーい、詠春。酒がなくなってきたぞう。」

ナギが酒の催促をする。

「それでは、持って来ましようかね。」

「あと、酒の肴を頼んだあ。」

ラカンもついでに注文する。

「はいはい。」

詠春は苦笑しながら了承し、宴会場を出て行く。

そんな調子で、空の酒樽が次々と増えていった。

「ん？なんだ？」

妙な気配を感じたハジメが声を上げる。

「おや、なんでしょう。強い魔力を感じます。」

アルビレオも不振がる。

「はっはっはっは。なんだなんだ？行って見ようじゃねえかつ。」

「おうっ。行ってみねえことにはわからねえ。」

ラカンとナギが嬉しそうに気配の下へ行く。

「ふう。全く、行動を起こすような輩はいないんじゃないのか？詠春。」

すでにつぶれている詠春を尻目にハジメは嘆息しながら立ち上がる。

「ふふふ。長というのも大変なのですねえ。」

「これをさっさと渡しておけばよかったな。」

端末を片手でいじりながらハジメが呟く。

「では、我々も行きましようか。」
アルビレオと共にハジメもナギたちを追う。

「おう、こりやでけえ。鬼神兵並にでかいんじゃねえか？」
ラカンがリョウメンスクナノカミを仰ぎ見ながら呟く。

「すごいですねえ。神格を持っているようです。」
アルビレオが感嘆としながら分析をする。

「へへっ。ただのでかぶって訳じゃなさそうだな。」
ナギが戦う気満々で腕を回す。

「ふう。おそらくは過激派の人間が俺達が来た事で、こいつを解き放ったのだろう。本来は土地神、守護神の類のはずだからな。」
ハジメが現状が起きた理由をほぼ正解に近い推測で述べる。

「んじゃ、」

ラカンが構える。

「さつさと、」

ナギも杖を構える。

「「やっちまうかつ。」」

そこから一方的な戦いが始まった。

ラカンの常識外れの攻撃と、ナギの大呪文がリョウメンスクナノカミを襲う。

「グオオオオオオッ」

リョウメンスクナノカミも抗戦するが、その攻撃はラカンたちには当たらない。

「なんだなんだ？まだ本調子じゃねえのか？でかぶつつ」

ラカンが本気の右の拳をリョウメンスクナノカミに叩きつける。

「ガアアアッ」

「俺も忘れんじゃねえぜっ千の雷っ」
キーリプル・アストラペー

雷がリョウメンスクナノカミを巻き込みながら一直線に全てを薙ぎ払う。

「ゴアアアアッ」

「やることは、ここらいったい結界張る事と封印だけでよさそうだな。」

「…もしかしたら、そのまま消滅させてしまいそうですね。」
ハジメの呟きにアルビレオはそう応えた。

……

…

あの後、消滅しかかったリョウメンスクナノカミを封印した一行は宴をやり直し、一晩中騒ぎ続けた。

もちろん、妻帯者は妻に怒られることになった。

幕間7（後書き）

アンケート協力ありがとうございました。

結果は

？21票

？5票

ということで、このまま娘のままとして、ハジメ主人公で行きます。

今週は忙しく余り書き溜められませんでした。とりあえず4話投稿します。

幕間 8

計画の舞台は定まる
今はただ平穩を楽しむ

幕間 8

～京都旅行 2～

「はは、昨日は随分と騒いでもいましたね。」

詠春が二日酔いの頭をさすりながら苦笑して言う。

「そうだな、少々羽目はずしすぎたな。」

ハジメが煙草を吸いながら、省みる。

「ハジメが、ハメをはずすとは珍しい。子供が生まれてそれほど嬉しかったか？」

ガトウがハジメに聞く。

ここは本堂から遠い離れ。そこで、ハジメと詠春、ガトウが煙草を吸いながらくつろいでいた。

「まあ、そうかもしれんな。なかなか面白い感情だと思う。」

ハジメはメアの顔を思い出しながら、そう応えた。

「さて、詠春。宿泊代だ。」

ハジメが懷から端末を取り出し、詠春に投げ渡す。

「おや、これは？」

「見れば分かると思うが、関西呪術協会の末端から上層部…貴様のすぐ下の者までを網羅した者だ。いずれ必要になると思ってな。調査していた。」

ハジメの周到さに、呆然とする詠春。

「それは、また。感謝した方がいいのでしょうか、探られた事を悟

らせなかったことに驚くべきでしょうか。」
戸惑いながらもそれを自らの懐にしまう詠春。

「それに、これからの計画に麻帆良が舞台となる可能性がでてきた。」

その言葉に詠春とガトウが反応する。

「お義父さんのところですか…。確かに、あそこは様々な技術などが発展しているところですからね。」

「それに世界樹もある。なるほど、計画の舞台、礎となるにはうってつけか。」

そこで詠春がある疑問を抱く。

「ということは、ハジメは麻帆良に赴くのですか？」

「いや、暫くはここ京都にしようと思う。下手に干渉されてもかわん。マクギルやクルトがいるからといって、安心は出来んしな。」
ハジメがこれからのことについて軽く説明を続ける。

「恐らく仕上げは十数年後になる。そのときの舞台は麻帆良だ。そのために、俺は数年から十年後を目安に麻帆良に赴くつもりだ。」

「俺らは何を協力すれば良い？」

ガトウがハジメに尋ねる。

「こちらの関係者や魔法使いたちも、腐っているのが多い。始末するのを手伝ってくれ。」

「…お義父さんですか？」

思うところがあったのか、詠春が真面目な顔をして問う。

「近衛近右衛門か…。奴は、正直その能力は捨てがたい。あの学園の長だけあってな。マクギルとはまた違った形の政治家だ。政治をしているわけではないがな。」

ハジメは、紫煙を吐き出しながら続ける。

「今のところ、やっていることも問題らしき者は無い。多少私用において職権を乱用している気がするが、それだけであそこを統括する者を居なくするのは惜しい。…それよりもだ。」

詠春とガトウを見ながら、ハジメの目が鋭くなる。

「奴の下にいる魔法使い、魔法生徒どものほうが問題が多い。どこで吹き込まれたかは簡単に推測できるが、自分を全く疑ってない阿呆が多すぎる。」

「魔法使いどもの教育までも腐らせていたとはな。…正直そこまで手が回らなかった事が悔やまれるな。」

現状の問題点を語ったハジメは、短くなった煙草の火を消し、立ち上がる。

「こちらに拠点を移す際の問題点は細かい事は他にもあるが、主な点はそれらだな。」

「そうか。…夢見る事はいいいことだが、現実が見えていない者が増えたという事か…。」

ガトウが冷静に判断する。

「さて、俺はアリカと京都を回る予定があつてな。ではな。」
そう言って、立ち去るハジメ。

「ああ、楽しんできてください。」

ハジメに声をかける詠春。

京都を観光している家族がいた。ハジメとアリカである。アリカはメアを抱っこしながら、観光している。

「ほう。随分趣きある街じゃな。歴史が感じられる建物も多い。古都か…オスティアと通ずるものがあるのう。」

京都の雰囲気を入ったのか、アリカが辺りを忙しく見回して

いる。

しかし、その手はしっかりとハジメとつながれている。

「あまり、はしゃぐな。メアが驚いているだろ？」

そういうハジメにアリカはメアを覗き込み、

「あーい。」

「ふふ、メアも喜んでおるみたいじゃ。初めて見る街並みが楽しいのじゃろ。」

アリカがそう結論付けた。

「はあ。まあ、いいがな。」

「ん？メアどうしたのじゃ？あっちが気になるのかの？」

メアが指差す方向へアリカが歩くのを、ハジメは柔らかなまなざしでついていく。

それからも京都の散策をし続けるハジメとアリカ。

ときには、メアが興味を示したお土産屋や、仮装などを見て回り、大仏の大きさに驚いたり、寺などの建築物を見ながら楽しいときをすごしていた。

そろそろ日が傾こうとする頃、

「こうしてみると、あの頃を思い出すのう。」

アリカが突然そんなことを言ってきた。

それに対しハジメは、

「ああ、貴様が護衛として俺を連れ回したときか？」

そう言うハジメにアリカは目を丸くしながら、

「なんじゃ。覚えておったのか？」

「なに、あれだけ連れ回されれば忘れることはできんだらう。」

「ふふ。そんなに連れ回したつもりは無いんじゃないかのう。」

アリカはおどけたように言う。

夕日が差し込む中、アリカがふと呟く。

「あの頃はこうして、家族と共に、このような幸せな空間を得る事ができるとは……思っておらんかったわ。」

遠い目をしながら微笑むアリカ。その瞳は何を映しているのかは、窺い知れない。

「確かに。アリカが将来隣にいることになるとは、思いもしなかったな。」

ハジメが続ける。

「それに、俺が、こうして人並みの幸せを手に入れるとは考えもしなかったしな。ただ、己の信念を貫くことだけが生き様であるかのように。……これからも信念を貫くことはやめんが。」

「ふふ。お主のその信念が妾たちをつなげたのかも知れんう。」

アリカはつないだ手を見ながら、言葉を紡ぐ。

「己の信念が、想いが、他の者と折り重なって大きく、強い何かになって、絆というものは作られるのかも知れんう。」

「くく、なかなかロマンチックな事を言うな。アリカ。」

ハジメはアリカを見る。

「ふふふ。なにせ、妾も乙女じゃからな。」

そう言って笑みを浮かべるアリカ。

「そうだな。アリカは乙女だな。なにせお姫様だったものな。」

「むう、なにか含みのある言い方じゃのう。」

アリカが少しハジメを睨む。

「さあ、そろそろ暗くなってきた。メアもそろそろ帰りたいだろう。詠春のところへ戻るとしよう。」

そう言ってアリカを連れ出す。

「全く。メアも難儀な父親を持ったものじゃのう」

アリカが笑みを浮かべながらメアに喋りかける。
しかし、

「あー、あい。あー。」

メアはそんなことはお構いなしに、唯楽しそうに声をあげていた。

ハジメたちが帰ってくると、

「よう、お二人さん。楽しんできたみたいだなっ。」

「あ、おいつガトウ。それは俺のつまみだぞっ。」

「別にこれだけあるのだから構わんだろう？ ナギ。」

「更に酒樽を持ってくる必要がありますよねえ。」

「ふふふ。すみませんが、すでに始めていますよ？」

すでに宴が始まっていた。

「はあ。本当に騒がしいのが好きな奴らだ。」

「じゃが、こういうのも悪くなくろう？ 妾は先に休む。楽しむのも良いが、昨日のような事はせぬようにな。」

ハジメをそこに置いて、さっさと自らの部屋に戻るアリカ。

「まあ、嫌いじゃないが…さすがにな。」

ラカンがハジメの首に手を回す。

「別にいいじゃねえかあ。明日にはまた戻っちまうんだろ？」

「まあな。1週間しか時間が取れなかった上、ゲートの場所の関係もあるからな。」

「じゃあよ。今日はぱあっと騒いじまおうぜっ」

そう言って、杯をハジメに渡すラカン。

「ふう。こういう日も…悪くは無いか。」

そして、今宵もまた宴が続かれた。

世界の英雄達のほんの些細な休息であつた旅も終わる。

幕間9

何かを成すには準備が要る
今は準備のとき

幕間9

～拠点～

—主人公side—

メアが生まれて早くも6年が経った。
そしてそろそろ、計画までの準備として旧世界に拠点を構える必要があるな。

俺は、計画のための準備を行いながら、拠点について検討していた。
「それで、どうする。アリカ？ひとまず、拠点を京都に移すつもりなのだが。」

オスティアのことを考えながらアリカに話す。

「いくら王族の力をなくさせたからといっても、シンボルである事には変わらんからな。ここにとどまる事もできるぞ？」

この数年で、王都オスティア、王族の力はその殆どが削がれた。というよりも削いだ。

メガロ・メセンブリア
帝国とM・M、両国が共に盛栄させる場所、両国の友好の国としての面を強くさせ、

世界にはびこっていた、人種による不満や不平を、なくすきっかけになるようにと考えていたのだが、思った以上にマクギルたちが頑張った。

今では、オスティアを動かしているのは王族ではなく、真に世界を

考える者が率先して発展させている。そこに種族の違いなど些細な問題にもならない。

「阿呆。言ったはずじゃぞ？どこまでもお主の傍に居るとな。それに、メアもパパと一緒にの方が良からう？」

「うん。私もパパと一緒にの方がいいなあ。」

俺の提案にアリカとメアは自らの意見を言う。

「それに、京都ということは木乃香もいるの？」

メアがあつたのは赤子のときだから覚えていないが、木乃香のことは教えている。

「ああ。まあいるだろうな。あれは親馬鹿だからな、手放さんだろ。」
メアの疑問に、詠春の姿を思い浮かべながら答える。

「じゃが、なぜ麻帆良じゃないのじゃ？拠点を移すのならば麻帆良のほうが良からう？監視の意味も兼ねての。」

アリカが疑問を口にする。

「ああ。監視の件ならばすでにアルビレオを送ってある。英雄と呼ばれているからな。近右衛門も笑顔で承諾したそうだ。」

「それに今俺が、麻帆良に干渉するのは、難しい状況にある。まあその辺りは、マクギルたちに任せているから大丈夫だとは思うが。」

俺が懸念要素を述べていると、

「ふう。お主は少し休んだ方が良いぞ？」

突然、アリカがそんなことを言ってきた。

「なに、こうしてアリカたちという事が、俺の休息だ。」

—side end—

—アリカside—

「なに、こうしてアリカたちという事が、俺の休息だ。」

ハジメはそう言ってくれる。

そう言ってくれるのは、嬉しいのじゃ。

だかの。ハジメは妾が会った時から、すでにその身を戦争へ投じておった。誰もが知らないようなときからすでに、完全なる世界と戦っておった。そして、その身をボロボロにしながらも戦争を終結させる鍵を必死に集めておった。

こうして思い返すと、妾の護衛は本当に休息のようなものじゃったようじゃな。

「京都に行ってからはどうするのじゃ？ 妾たちも着いていくから大変じゃろう？」

「メアは木乃香がいるし、詠春もいる。…安心しろ。俺は、独りで戦っているわけじゃない。隣にはお前がいることだしな。」

そう言って、妾の頭をなでるハジメ。

そうやって笑われると妾は何も言えんじやないか。

「あ、メアもメアも。」

メアのおねだりに、笑みを浮かべメアの頭をなでるハジメ。

全く、心配でならん。

まあ良からう、どこまでもついていけば良いことじゃからな。

そう思いながら、ハジメを見て妾は微笑んだ。

—side end—

…
…

拠点を京都に移すことにしたハジメたち一行に、詠春は快く近衛家の居住を勧めた。

「おいおい、あいつ長の自覚があるのか？」

「ふむ。適材適所ではなさそうじゃな。」

詠春の行動に若干不安を覚えながらも、都合が良いのでハジメたちは詠春の好意に甘える事にした。

そして、詠春の家に招かれる。

「ウチは、このかっていうんやよく。このちゃんってよんでなく。黒髪のきれいな女の子が自己紹介する。」

「わたしはメアって言うんだ。よろしくね。このちゃん。」
メアもそれに答える。

「ウ、ウチは、せつないいます。よ、よろしゅうおねがいます。」
髪を横に束ねた女の子も、緊張しながら自己紹介をする。

「ふふ。うん、よろしくね。せつなちゃん。」

「せつちゃん。かたくなりすぎや、もっとやわらかくならん」と。

「
そう言って、わいわいと楽しそうにする女の子3人。」

そんな少女3人の和気藹々とした様子を、微笑みながら見ているハジメと詠春。

「いやはや、木乃香には年の近い友人があまりいないものでしたからね。ありがとうございます。」

詠春が口を開く。

「なるほど、何かやたら誘ってきたのはそういうこともあったのか。」

」
ハジメが納得したように呟く。

「あつちで、あそぼうな。メアちゃん、せつちゃん。」
少し離れた遊び場に向かう木乃香。

「うん、行こう？せつなちゃん。」

「あ、うん。メアちゃん、お嬢様。」

それに続く、メアと刹那。

「あゝまたせつちゃん、お嬢様いうた。」

「あ、ごめん。…このちゃん。」

口を尖らせた木乃香に、すこし顔を赤らめながら言う刹那。

「うん、ええよ。せつちゃん、ほないこう？」

途端に笑顔になる木乃香。

「ふふ、仲いいんだねえ。このちゃんにせつなちゃん。」

「仲良しさんやえ。メアちゃんも今日から仲良しさんや。だから、せつちゃんのこと、せつちゃんってよんでな。」

そう言って、刹那とメアと手をつなぐ木乃香。

「ふふ。このちゃん。」

「うん、せつちゃん、このちゃん。」

そして、遊び始める木乃香たち。

「メアにとっても良い事だな。こちらからも礼を言う。」

「そうみたいですな。」

ハジメの呟きに反応する詠春。

「それにしても、あの娘。半妖か？少々気に違和感を感じる。」
そう言ったハジメに、詠春の目が細まる。

「刹那ちゃんですか…。はい、少々訳有りですね。烏族でして…。」

「…なるほどな。忌々しい慣習という事か。」

何か心当たりがあるのか、ハジメの眉間に皺が寄る。

「そのようなものです。ですから、神鳴流として預かっているのです。才能はありますよ？」

自慢話をするかのように笑みを浮かべる詠春。

「護るための剣か…。俺とはまた違った剣だ。強くなるといういな。」

「はい。」

ハジメと詠春は、遊んでいる木乃香たちを、これが平和である光景だと思いながら見ていた。

幕間9（後書き）

口調とかはスルーしていただけるとG—q a zはほっとします。

幕間10

その名も血も重く大きい
ならばどうするのが正しいのか

幕間10

～認識の違い～

—主人公side—

近衛家に来てからもう半年が過ぎようとしていた。

俺はここを拠点としながら、着々と世界中で計画のための準備をしていた。

そして、そろそろ戻るときかと思い、ここへ帰ってきたある夜、俺と詠春は酒を交わしていた。

「それで、木乃香のことはどうする気だ？ 詠春。」

気になっていた事を詠春に聞く。詠春は木乃香にこちらの世界について教えていない節があった。今日は、その真意を聞こうと思う。こうして酒を酌み交わしている。

「それは、こちらの世界について、と言うことですか？」

「それ以外なからう。どういう意図で木乃香に黙っている？」
杯を傾けながら問う。

「私は、木乃香には普通の女の子として生活してもらいと思っています。ます。」

その言葉を耳に入れた瞬間、俺は刀を詠春の首筋に突きつけた。

「っ。…どういふつもりですか？ ハジメ。」

反応できないとは、衰えたか？ 詠春。

「貴様こそどういふつもりだ？ 詠春。…普通の女の子？ なら、それ

に対して貴様は何をしている？何の対策をしている？ただ、黙っているだけで無いか」

余りにも甘い考えに、目が鋭くなる。

「…ですが、じきに麻帆良へと転校させるつもりです。この地にいるよりも、お義父さんに任せた方が安全でしょう？」

詠春のふざけた考えに、手に力がこもる。

「しばらく見ない間に随分と腑抜けになったな。懐柔されたか？それとも間抜けになっただけか？あの爺が貴様の考えを汲むことはあっても守りはしない。いずれは、後継者としてこちらの世界について教えるだろう。」

「そんなっ…。」

口ごもる詠春。心当たりがあるのだろう。

「それにだ。木乃香にはナギ以上の魔力の資質がある。たとえ魔力を封印しようが、そんな考えを持つ貴様を辞させ、封印を解き器とさせられるだろう。」

「青山にいたお前にも多少は分かるだろうが、…近衛という名の、血の大きさを認識しろ。」

俺の言葉に呆然としている詠春。

「…では、私はどうすればいいのでしょうか？」

「本当の意味で普通の女の子として暮らすのは無理であろう。まずは、この世界の事と、刹那の事について教えればよからう。」
刀を収めながら続ける。

「あの子に危険が迫ってから教えても良いが、手遅れになるのは貴様ではない。木乃香だぞ？知っておくに越した事は無い。それから、徐々に自分で考えさせれば良い。あと10年もすれば自分でできる事も増える。」

そうすれば、自らの幸せも、進む道も分かるだろうし、選べるだろう。

「確かに近衛の名は、普通に暮らすには大きすぎますね。」
杯の酒を見ながら詠春が呟く。

「でも、なぜ刹那君のことも？ 彼女は、知られたくは無いはずですよ。」

「奴の剣は、恐らく木乃香を守るために振るうものとなるだろう。
あの2人に必要ない罅を入れる意味もなからう？」

「…あなたは本当に、いろんなことを考えていますね。ハジメ。
こちらを感心した目で見ている詠春。」

「貴様が甘いだけだ。阿呆が。」
杯を傾ける。

…
…

暢気に歩いている刹那の後ろに忍び寄り、

「ひゃうっ。」

妖などの真の姿を現させる魔法を使った。

こちらを振り返る刹那。

「へっ？ あっ、ハジメ様。えっ、あれ？ 羽が…えっ？」

わたわたと困惑している刹那の首根っこを掴む。

「えっ？ ハジメ様…。えっ？」

「少々急だが、貴様の正体を木乃香に話すことになった。刹那。」
その言葉を聞いた刹那の顔が一気に青ざめる。

「：どういうことですか？」

「刹那：。貴様は木乃香を護りたいんだっただな？そのために、今は剣の腕を磨いている：そうだな？」

「は、はい。ウチは：、ウチはこのちゃんをちゃんと護れるようになりたい。メアちゃんに頼ってばっかじゃいかんて。」

この前あった、木乃香が川に流された事か？たしか、メアと刹那が助けたと記憶していたが。

「ならば、なおさらだろ。」

「？」

俺の言葉に疑問符を浮かべる刹那。

「護るという事を甘く見るな小娘。剣の腕をどれだけ磨こうが、それが護るという事に全てつながると思うな。」

俺がアリカを護衛していたときはそれでよかったがな。

「：貴様が護るのは木乃香の日常だろ？それがどんな日常でもだ、そこに貴様がいなければ意味があるまい。貴様は自分の出自を隠しておきたいようだが、隠しておけるものでもあるまい。」

木乃香たちがいる場所へ歩き出す。

「それがばれたとき、貴様は木乃香たちの前から消える気か？それこそ阿呆のやることだろ。」

木乃香たちがいる部屋に辿り着く。

「：なに、木乃香とメアはそんな薄情ではない。怖いだろうが勇気を出せ。」

扉を開け放ち、刹那を放り投げる。

「あう。」

「あつ。せつちゃ：。」

刹那に集まる視線。アリカに詠春の妻、詠春に木乃香、メアだ。

アリカがこちらを見て、

（また無茶をしおったな）

と今にも聞こえそうな目で睨んできた。

「あ、あう。」

縮こまる刹那。

「わゝ。せつちゃん、キレーなハネやねゝ。天使さんみたいやなゝ。」

「

笑顔で刹那によってくる木乃香。

「本当だゝ。きれいだねゝ、せつちゃん。」

木乃香に続いてよってくるメア。こちらも笑顔だ。

「え、え？ほんま？こわくないの？」

戸惑う刹那に木乃香は、

「んゝん、ぜんぜん。キレーやし、かわいいよ。せつちゃん。」

と笑っていった。

「うっ。このちゃゝん。」

涙を目に溜めながら木乃香に抱きつく刹那。

「無茶をしますね、本当に。下手したらトラウマですね。」

こちらに歩いてきた詠春が言う。

「なに、木乃香もメアもちゃんと自分で判断できる子だからな。さ

っさと一歩踏み出さん刹那が悪い。」

「まだ子供じゃ、たわけ。」

後頭部にちよつとした衝撃が走る。

アリカがチョップしたようだ。

「もう少し、やさしく出来んかったのか、おぬしは。」

アリカが呆れたような顔で言ってくる。

「無理だな。むしろ、とてもやさしくやったつもりだったのだが…。

本来ならば、有無を言わさず正体を明かすところだ。」

「はあ。」

「ははは。」

アリカはため息をつき、詠春は苦笑している。
なんだ？文句でもあるのか？

俺は無然としながらも、もうすでに笑っている刹那たちを見ていた。
あいつらは、いつまでもあのような関係であってくれば良いと思
いながら。

幕間10（後書き）

後1話ぐらいは今日中にあげられると思います。

幕間 11

どんな組織でも一部は腐敗する
問題はそれをどう拡散しないかだ

幕間 11

～襲来～

剣が交差する音が道場に響き渡る。

「やあっ。そこっ。」

「…甘い。」

回り込んだ少女が男の後ろから木刀を振るうが、男は一瞬で少女の後ろに回りこみ、指で頭を弾く。

「いたあっ。」

そこそこに吹き飛ぶ少女。鈍い音がしたが大丈夫であろうか。
少女は目に涙を溜めながら起き上がる。

「うう。父上え、もう少し手加減しても罰は当たりませんかよ？」

「これ以上手加減したら、手合わせする意味がなからう。そう言うならば、大人しく刹那と鍛錬を続けていろ、メア。」

「父上のいけず。せっちゃん、手合わせしよ。」

メアと呼ばれた少女が道場の向こう側にいる少女の方へいく。

「はは。少しは手加減したらいかがですか？娘でしょう。ハジメ。
ハジメと呼ばれた男が答える。

「阿呆か、詠春。ちゃんと手加減しているだろう。ぎりぎりまで粘
らせただろうが。」

詠春は唯苦笑するしかなかった。

—主人公 side—

木乃香にこちらの世界の事と刹那のことを話してから、早数ヶ月。木乃香にこちら側の世界を話したときの反応は、

「ふえー、そんな不思議なんがあるんやねー。でも、ウチが大きくなるまで考えてもええのやろ？なら、ウチはウチが幸せになれるようにがんばるわー。だから、よろしくたのむで？せっちゃん。」

「は、はい。お嬢…このちゃん。」

と、なんとも、良く分かっているのかどうか知らないが、自らよく考えとけという趣旨は伝わったらしい。刹那もいるからとりあえずは安心であろう。

それよりも、メアについてだが。

こいつもなぜか神鳴流を習っている。

そんな簡単に習っていいものかと詠春に問うたが、

「刹那君も学んでいる事ですし、なによりあなたの娘ですから。きつと才能にあふれていますよ。」

と笑顔で言い切る始末だった。

だが、力を得る以上興味本位で得てもらっては困る。だからこそ、メアを呼び出し、

「これがお前が踏み入れようとしている世界だ。」

と、自らの腕が足が切り落とされ、死にいくまでの半殺しにあう幻術まで見せたが、

「こ、こんな世界に、このちゃんたちが踏み入れる可能性があるなら、私だって…、例外じゃない。それに、私はっ、このちゃんたちと一緒にいたいっ。」

と今にも気絶しそうな顔で言い切った。いつの間にそこまでの絆が出来たのやら。

まあ、この事がアリカにばれて凄まじい形相で、

「10にも満たん子にやることかあつ。」
と怒られたのは今思えば仕方なからう。

まあ、いずれは踏み入れると思っていたが、子供といえどもその心は決して弱いというわけではないという事か。

俺は、刹那とメアの試合を見ながら、そう感じていた。

……

…

そして、数日が過ぎたある日の事。

「その話は事実か？ガトウ。」

俺はガトウから緊急の連絡をえていた。

「ああ。M・M^{メガロ・メセンブリア}元老院にまだ膿がいたようだ。お前とマクギル議員たちがあれほど掃除したって言うのにな…。」
ガトウが苦虫を噛み潰したような顔をする。

「組織というものは、そう言うものだ。どれだけ掃除しようが腐敗はどうしてもでてくる。後は、それをどうやって拡散させんようにするかを、考えるしかない。」

煙草に火をつけながら俺はそう呟いた。

本当に、愚かな者が多すぎるな。だが、多いならば唯排除すればいいだけのこと。

「…そうだな。しかし、今回は奴らもなぜか必死だ。罪人を幾人か生贄にするつもりらしい。奴らを始末したときには、すでに罪人を解き放った後だった。…正直言って大惨事になるかも知れん。ああ、くそ。なぜナギと連絡が取れんっ。」

ガトウが頭をかきながら愚痴を言う。

あのバカが。いったいどこをほつつき歩いているんだ？

「それで、予定はいつだ？ナギの息子とやらを襲撃するその予定は？」

—side end—

………

………

…

ウェールズのとある山奥。

「はあっ、はあっ、はあっ、これをすれば家族は助かる。家族は助かる。家族は助かる。」

狂気を宿した顔でボロボロの衣服を纏った男が呟き続ける。

そして、男はその手に持っていた短刀を

己の心臓に突き刺した。

その瞬間、男を基点として、幾多の魔法陣が広がっていく。それは、少し離れた場所でも起きていた。それらは幾重にも重なる。

そして、この世界と魔界の境界が曖昧になっていく…。

次の瞬間には、悪魔の手が足が浮かび上がり、境界を超え、数え切れないほどの異形があふれ出る。

………

…

「これは…厄介な数だな。」

少し小高い丘を登った先に、ハジメはいた。

「”少年期に不幸に遭いながらも、懸命に英雄の父親を目指し、偉マ

ギステル・マギ

大なる魔法使いとなった英雄”：か。」

ハジメが煙草を折り、目を鋭くさせる。

「どこの三流脚本家だ。虫唾が走る。」

村の先に見えるは、黒き靄。悪魔の大群である。

ハジメは刀を構えながら、

「早々に退場願おうか。悪魔共。」

飛びだった。

—主人公 side—

この悪魔共を村に入れるわけには、襲わせるわけにはいかん。

幸いその殆どが中級にも満たん雑魚だ。

「ふんっ。」

ただ咸卦法を籠めた斬撃で薙ぎ払う。それだけで、その範囲内の悪魔のはぼ全てが、消えるか還っていく。

「くく。貴殿が噂に聞くパイルドライバーであるか。素晴らしい腕だ。：がっ。」

俺を知っているらしい悪魔が、腕を振りかぶる。

時にはこのような爵位を持っているような悪魔もいるが、

「話す暇など無いのでな。」

牙突を放てば消えていく。

敵は雑魚だが、数が多い。どれだけの人間を生贄にしたのだ？

「ちっ。」

周りの悪魔共を消していく。だが、このペースではいずれ村に入られる。

感卦螺旋法で牙突を放つ。今のでやっと半分ほどか？まずいな。

俺が焦っていると、

突然一条の雷が悪魔を薙ぎ払った。

「よっ。悪いな、ハジメ。遅れちまったようだ。」

その発生源をみると、ナギ^{バカ}がいた。

「どこ言ってた阿呆が。だが、話は後だ。さっさとこいつらを消すぞ。」

「おう。背中^{キーリブル・アストラペー}は頼んだぜっ、ハジメっ。」

ナギが、なぎ払った空間を凄まじい速度で飛び込んでいく。

「千の雷^{キーリブル・アストラペー}っ。」

ふん。これで、入られる事もなさそうだな。

俺も負けていられんな。

「破っ。」

ナギがいるならば、俺が動けなくなっても問題は無い。そう考え常時、感卦螺旋法を行いながら、牙突を放つ。

唯ひたすら、俺とナギが悪魔共を屠っていく。

そして、最後の一匹を互に残す事になった。

「カカ。ドチラガ化け物カ：ワカラヌナ。」

「ふん。貴様らにどう思われようとも構わん。」

そう言っ^て最後の悪魔を穿つ。

首をへし折る音が聞こえた。ナギの方も終わったようだ。

「へへ。ありがとうな、ハジメ。」

乾いた笑みを浮かべながら、近づいてくるナギと子供。

「なに、もともと防げたはずだったものだ。気にするな。その子供は息子か？」

「ああ、ネギって言うんだ。あそこにいてびっくりしたぜ。こういうところは似なくていいのによ。」

「随分と破天荒な行動をする。」

ナギの後ろに控えるナギの杖を持っているナギの息子。

「…。」

そのとき、こちらに近づいてくる者がいた。

「なんじゃ。随分禍々しい魔力を感じたから準備してたってのに、それが消えちまったから来て見れば。」

老人がナギとネギを見る。

「おいおい、ネギ。見ないと思ったら、こんなところで何してるんだ？」

ネギがいたことに驚いた老人が尋ねる。

「魔法の練習してたら、怖いのがいっぱい来たから…僕、村のみんなを助けようと思って。お父さんもきっとそうすると思って…。」

「はは。ほら、ネギ。スタンと一緒に村にもどれ。」

そう言いながら、ナギがネギをスタンに近づける。

「お、お父さん…。」

「…俺が言えた義理じゃねえが幸せになれよ。ネギ。」

「ふん。図体だけ一人前になりやがってよ。…いつでも帰って来いよ？みんな待ってるんだからよ。」

「悪いな、スタン。」

そう言い残して、スタンはネギを連れて去っていった。

「いいのか？」

「いいさ。会うのは、全部終わったらだ。」

「…そうか。ならば何も言わん。ではな。」

ナギに言い捨て、去る。

「ああ。またな。」

ナギもまたどこかへと歩いていった。

— s i d e e n d —

これを期に、^{メガロ・メセンブリア}M・Mにおいての罪人などの法や規制、また議員の特権などにおいての議論がなされた。

それによって、^{メガロ・メセンブリア}M・M元老院議員による違法奴隷や、様々な悪事がまた暴かれる事になる。

幕間 11 (後書き)

幕間はまだ少し続くと思います。ではまた。

幕間 12

青年は気づかず

少女は勘違いをする

幕間 12

（勘違い）

これは、ハジメが造物主を倒した後の、旅をしていたときの物語。

—主人公 side—

「ふう、こんなものか。」

俺は、この地で見つけた今は使われていない魔法を行使していた。

なかなか面白いと思う。俺が知っているのは陰陽術と魔法。しかし、この魔法も決して決まった系譜では成り立っていない。

古代語魔法というものもあり、今では衰退した魔法もある。さらには魔術と呼ばれたり秘術と呼ばれたり、一子相伝、一族にしか伝えられないような魔法もあるらしい。

まあそれを巡って旅が続けているわけだが。

俺が魔法を終えて一息ついていると、何かが爆ぜた様な音が近くに聞こえた。

「ここは旧世界だぞ？…いったい何のつもりだ？」

音がするほうへ気配を隠しながら駆ける。

「はは。よくよく見てみれば、なかなかの上玉じゃねえか？」

「確かに。…引き渡すときはどういう状態でもいいんだったな？」

「：少し楽しむか？こいつには仲間も随分やられちゃったしな。」
なかなか下衆な声が聞こえる。

俺がついてみると、倒れている少女といくつかの屍。そして、今下衆な声をあげている男数人。

誘拐か何かか？：こっちの世界もあっちの世界も底辺は変わらん。な。
そう思いながら俺は刀に手をかける。

さて、狩るとするか。

一瞬で下衆どもに駆ける。俺のさっきに気づいたのが一人。だが、それ以外の首をすべて刎ねる。

刎ねた首が地に落ち、遅れて首の無い体が崩れ落ちる。

「：なっ、てめえっ何者だっ。」

俺のさっきに気づいて咄嗟に飛びのいた男が叫ぶ。

「下郎にかたる名など、持ち合わせてはいないのでな。」

「な、なめんなっ。糞野郎っ。」

男が杖を構える。

魔法使いだったか。だが、それは悪手だ。阿呆が。

ただ駆け、刀を振る。

それだけで、残っていた男の首が刎ねた。

造物主と戦った後だからだろうか。どんな奴が相手でも、まるで話しにならん。

そう思いながら、倒れていた少女に近づく。先ほどは気づかなかったが、随分弱っている。

「待テヤ。ソレ以上ゴ主人ニ近ヅクンジャネエヨ。」

声ができるほうへ刀を構える。

そこには、片腕だけのボロボロな人形が浮いていた。

「この少女の人形か？ならば安心しろ。近くの街に知り合いがいるのでな。そこで休ませるだけだ。」

「ヘッ、ソレヲ信用シロツテカ？」

「好きにすればよからう。どの道、ここに置いたままならば、力尽きるのはこの少女だ。」

少女を見ると、本当に随分弱っていることがわかる。近寄るが、人形は動かない。納得していないが、理解はしたか？

傍まで行き、少女を担ぎながら、

「あそこの街に行く。ついてこれないなら貴様も連れて行くが？」

「ヨロシク、頼マア」

人形がこっちにくる。人形の首を掴む。

さて、では行くか。

街に瞬動を使って辿り着き、よく使う宿屋へと向かう。

「おや、また人助けですか？さすがは千の呪文サウザンドマスターの男ですね。」

宿屋に入ると、主人が迎える。

俺の名は余り広めたくなかったため、鳥頭の通り名を使っていたせいか、ちらほら鳥頭の事を聞くようになってしまった。使いすぎたか？

「なに、たいしたことはしていない。…それでこの少女だが、随分弱っているようだな。」

担いでいた少女を主人に見せる。

「ああ、これはまたひどい。部屋はこの部屋が空いておりますので、どうぞ使ってください。」

主人に鍵をもらう。

少女を部屋に移し、カウンターへ戻る。

「いつも協力してくれる事に感謝する。」

「いいいえ、とんでもありません。我々もあなたのような人に協力できて嬉しいのですから。」

俺も、こちら側の世界を知りながらも、こういう風に協力してくれる者ありがたい。

「俺は、そろそろこの地から出る。今までの礼だ。ではな。」
少々心遣いの金を入れた袋を置き、宿屋を出る。

—side end—

「…律儀な人だ。だから、協力したくなるのですがね。」
そう言いながら、男が置いた袋を開け、中身を見た店主の動きが止まる。

袋の中には金貨が数十枚入っていた。

「これは…いくらなんでも…いやはや。」

店主はただ呟くだけだった。

—少女side—

目を覚ますとそこは人が使う宿らしき部屋だった。

「チャチャゼロ。あれからなにがあった？」

今思い出しても忌々しい。奴ら、私が女子供を殺さないと知っていたらしく、あろうことか子供を使って私に不死殺しの呪いをかけてきおった。

誇りも何も無い奴らが…。本当に忌々しい…。

しかし、その呪いも今やなくなっている。おそらく未熟だったのだろう、この身を呪うには弱かったようだ。時間が経過して解けたようだ。

「アア？サウザンドマスターツテ言ウ、男ニ助ケラレタミタイダゼ？」

サウザンドマスター

「千の呪文の男だと？魔法世界であつた大戦の英雄じゃないか。」
なぜ、そのような男がこの私を助けた？

ダーク・エヴァンジェル

闇の福音たるこの私を…。

「聞キタイコトガアルナラヨ、直接聞キヤイインジャネエカ？」

「ふむ。チャチャゼロの言う事も一理あるな。くく、面白い。会いに行くのでしょうか。…行くぞチャチャゼロ。」

「アイヨ。ゴ主人。」

ふふ。ふはははは。なかなか面白いことをしてくれるじゃないか、
サウザンドマスター

千の呪文の男。お前に会いたくなってみたよ。

面白い男ならば、この私の眷属にしてやろうじゃないか。

このエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルになつ。

「ふふ。ふははははははは。」

「…ゴ主人…楽シソウダナ。」

—side end—

この数カ月後、身の覚えの無いことで、吸血鬼に付きまとわれるナギの姿があつたとか。

幕間12（後書き）

エヴァってこんな感じでいいのかな？

補足として：

ハジメはエヴァが弱りすぎてて吸血鬼とは気づかなかった。という事になっています。いつも気の強弱、違和感で判断していますからね。これだけ書くとラカンっぽいな。

原作編の日常はどうしようかなあ。戦いとかイベントは結構構成できてきたんですが、日常とか学校生活のほうがなかなか…。

そろそろ原作も近づいてきました。幕間も明日には終わらせたいと思います。ではまた。

幕間13

護るために一緒にいるために
その一途な思いはただ強い

幕間13

（絆）

—主人公side—

京都を拠点にしながら、着々と計画を進めて2年が過ぎた。
そして、詠春が協会の事でそろそろ動く、という旨のことを俺に伝えてきた。

詠春は、俺が渡した情報や自ら探り続けた情報をもとに、そろそろ呪術協会の再編を行うらしい。

なので、木乃香たちの身の安全を考え、麻帆良へ行く事となった。
これが、過激派などの不穏分子をあぶりだす要因ともなると考えたからだ。

しかし、麻帆良か…。数年前のガトウとのやり取りを思い出す。

…

…

「ほう。それであの無愛想娘の記憶を封印した…と。」

俺は煙草を吸いながら、端末越しのガトウに言う。

「そういうことだ。これから生きていくのにあのときの記憶はいらないと思うてな。…独善だと笑うか？」

ガトウが端末越しに聞いてくる。

「別に笑おうなどとは思わん。お前が、無愛想娘の幸せを考え、行ったのだろう？ならば、その責務を果たせば何も言うつもりはない。

「俺がそう言うのと、ガトウは苦笑しながら、

「はは。本当にお前は齒に衣着せぬ言い方をする。まあアスナは麻帆良へと預けるつもりなんだがな。」

麻帆良という単語に、疑問を抱き、

「なぜ、麻帆良に預ける？近右衛門は無愛想娘の事は知らないのか？」

「そろそろ、本来の活動に専念せねばならないからな。それに、もともと存在が秘匿されていたんだ。知るわけが無かろう。」

「そうか。ならばいいが。」

そして、ガトウは真面目な顔になりながら、計画についての行動を開始する旨を伝えてきた。

「ああ、分かった。では、その件は任せる。信頼できる諜報が余りに少なくてな。一応マクギルやクルトからも情報はもらっているが、こういうことではお前の方が精度が高い。」

ガトウが呆けた顔を少しし、

「そりゃ、期待には応えなくてはな。」

「せいぜい期待しておくでしょう。ではな。」

「ああ。麻帆良に行く事があればアスナのことを頼むな。」

…
…

今麻帆良には、あの無愛想娘が小学校に通っている。

ガトウの報告と麻帆良の調査結果から、普通の児童…若干の問題児として通っていると分かった。

これなら、メアや木乃香、刹那を通わせても何か不都合が起きる事

も無いか。

ならば、さっさと俺も麻帆良へ行く準備に取り掛かるとしよう。

俺の麻帆良での待遇も決まり、麻帆良へ行くのに1ヶ月を切ったというのに、

「えー、せっちゃんいかなの？」

木乃香が悲鳴じみた声を上げる。

「や、だからこのちゃん。ウチはまだ未熟やし…。」

それに対して、刹那が困ったような顔で言い訳を始める。

「いやや、いやや。せっちゃんも一緒にいくんや」

「長、ハジメ様。」

刹那がとうとう俺達に助けを求めた。

「ふむ。詠春。」

詠春に声をかける。

「なんででしょうか？ハジメ。」

「最近体を動かしていないだろう。腕は鈍っていないか？」

「え？あなたと…」

何かを言いかけた詠春を睨む。

「っ。そうですね。あなたと戦ったのももう10年近くになりますしねえ。鈍ったかもしれませんね。」

「ほうほう、そうか。ならば、刹那。」

まだ木乃香に泣き付かれ、どうしようかとあたふたしている刹那に声をかける。

「えっ、あ、はい。なんででしょうか？ハジメ様。」

「今から詠春と試合しろ。その結果で貴様を連れて行くかどうか決める。ようは実力を見るところだ。」

「…へっ？」

動作が止まる刹那。

「なに、安心しろ。詠春は先ほど言ったとおり、戦いから離れて久しい上に、長の仕事にかまけて腕を鈍らせている。刹那、貴様でもいい勝負が出来るはずだ。」

「はは。ひどい言われようですね。：よろしく頼みますよ、刹那君。」

笑顔で刹那に喋りかける詠春。

「え、えええええつ。む、無理ですつ。長と戦うなんてウ、ウチじゃ太刀打ちできひん。」

狼狽する刹那。なかなか面白い顔をしている。

「よし、それじゃいくか。」

刹那の首を後ろから掴んで持っていく。

「え、え？ちよつ、ハジメ様つ。お、下ろしてつ。」

「よし、見学したい奴はついてこい。」

「ウチの意見は無視ですかあああつ。」

刹那の絶叫が、近衛邸に響き渡る。

当たり前だろ、貴様は木乃香の護衛なのだから。

：ところ変わって道場。

—刹那side—

え、え？なんでこんなことに：？。

長と向かい合っているウチ。獲物はもちろん木刀やけど、神鳴流は獲物を選ばんし。

「さて、それではお手柔らかに頼むよ？刹那君。」

そう言って、構える長。

「っ。」

雰囲気さがらりと変わる長。それにあわせてウチの意識も一気に変わる。

戦いから離れて久しい？嘘やろ。こんな空気を纏える人が、腕鈍ってるわけあらへん。

「考え事ですか？刹那君。感心しませんよ？」

後ろから長に声をかけられる。

一気にそこから飛びずさる。いつから、ウチの後ろにまわったんや？「さて、刹那君も意識を切り替えたようですし。…いきますよ。」

長の木刀が閃く。それを何とか防げたけど、吹っ飛ばされる。

まずいっ。隙だらけやつ。

体を翻し、長の気を感じた場所に木刀を振るう。

それを避けて、後ろに引く長。

ウチは着地して、長を見ながら木刀を構える。

「ははは、これは期待できそうです。」

いくら、長だからと言っても負ける訳にはいかん。

長に向かって駆け出す。

「神鳴流奥義っ。斬岩剣っ。」

ウチは、ウチはこのちゃんを護れる人になるって決めたんやからっ。

—side end—

—主人公side—

「ほう。思ったよりもやるようになったな、刹那は。」

刹那が詠春相手に善戦しているさまを横目に、俺は煙草に火をつけながら、思ったことを口にする。

「父上、煙草いつやめるんですかあ。父上：詠春さんは、本当に戦いから離れていたの？父上のような濃密な気配はしないけど、それでも、あの纏う雰囲気を見ると、とてもそうは思えないよ。」

メアが詠春について聞いてくる。

「ふむ。奴が戦いから離れて久しいのは事実だが、それで腕が鈍るのは困るのな。ちゃんと俺が稽古をつけている。」

と笑みを浮かべながら返したら、

「せっちゃん：可愛そうに。父上のような人に目をつけられて：。」
なぜそうなる？

「どうせ、少し面白そうだと思ってたんでしょ？」

メアがこちらをジト目で見てくる。

「：俺は何も言っていないが？」

「父上の考えている事なんてお見通しですう。」

なんか変な所がアリカに似てきたな、こいつ。

「母様はきれいですし、私もあありたいなあといつも思っています。」

……。

ふむ。刹那は鍛錬を随分と真剣に打ち込んだようだな。まだ甘いところがあるが、詠春について知っている。

才能というのもあるだろうが、驚くべきはその絆か。

真剣に刹那を見守っている、メアと木乃香を見ながらそう思う。

子供というのは親が知らんうちに成長しているものと聞かすが、確かにその通りだと実感する。

ふっ。詠春の奴も随分楽しそうな事だ。

「はあっ。神鳴流奥義っ、雷鳴剣っ。」

「神鳴流奥義、雷鳴剣。」

雷がぶつかり合い、激しい衝撃波が起こる。

「はあっ、はあっ。」

息も絶え絶えな刹那と肩で息をしている詠春。

…もう十分か。

「それまでっ。刹那ご苦労だったな。その力確かに見させてもらった。」

終わりの合図を聞き、こちらを泣きそうな目で見る刹那。

「…合格だ。今の詠春相手にこれだけ戦えるのならば、木乃香の護衛を勤めさせて問題あるまい。」

笑顔で頷きながら、こちらを見る詠春。そして、呆然としている刹那。そして、横にいる木乃香とメア。

「え…。でも、ウチ…。長を倒せなかった。」

「阿呆、身の程をわきまえろ。十年早いぞ小娘。…いや、五年ほどか？どうだった？詠春。」

すこしよたよたしながらこちらに来る詠春。刹那は座り込んでしまったので、メアと木乃香が向かう。

「いやあ、年は取りたくないものです。あなたと稽古をしていなかったら恐らくは、負けていたでしょうね。」

苦笑しつつも嬉しそうな詠春。

「ふん。まあ予想以上ではあるな。後、お前は鈍りすぎだ。再編の件が終わったらまた鍛えなおす。」

詠春のいじ…鍛錬法を考えながら、笑いあっているメアたちを見る。

「やったー。せっちゃん、一緒に麻帆良いこな。」

「よかったよ。またみんなで遊べるね。」
喜んでいる木乃香とメア。

「うん。ウ、ウチも嬉しい。」

刹那もはにかみながらも、喜んでいる。

さて、いろいろ手回しをしなくてはな。
忙しくなりそうだな。

幕間13（後書き）

原作キャラが難しい。

今日中には幕間終わらせられるかな。ではまた。

幕間14

そこに信念はあるのか
腑抜けに正義は語れない

幕間14

（顔合わせ）

ここは麻帆良学園。月が輝く夜空の中、世界樹がそびえ立つ広場に、この地に住む魔法使いが集っていた。
その目的はただ一つ。この地に來た英雄と合間見えるため。

「ふおっふおっふお。さて、集まったようじゃな。…では、ハジメ殿。よろしく頼むぞい。」

近衛近右衛門が周囲の人間を確認して、男に呼びかける。

そして、ハジメと呼ばれた男が魔法使い達に近づく。

「さて、名は知られているようだが改めて名乗ろう。ハジメ・サイトウだ。…広域指導員をやらせてもらう。」

月下に照らされたハジメが名乗りを上げた。

—タカミチside—

辺りがざわめく。

「あれが…騎士と呼ばれる英雄。」

「パイルドライバー…。」

ハジメさんはナギさんたちと違ってパイルドライバーの悪名が強いみたいだ。

以前ハジメさんにその事を言ってみたら、

「周りを気にして、自ら成すべきことを行わないことこそ、俺にとってはおっぱいど恥ずべき事だ。」

と、全く気にしていなかった。

そんなハジメさんだからだろう。煙草に火をつけながら呆れたように周囲を見渡している。

「さて、俺が英雄であろうが無かろうがどうでもいいことだ。」

煙草から立ち昇る紫煙がやたらはつきり見える。

「最初に言っておこう。こちら側の世界の人間として、腑抜けている貴様らと馴れ合う気は無い。」
いきなり随分な事を言い放つなあ。

「俺がここにきたのは、ある目的のためだ。それを邪魔しなければ、それでいい。俺は俺の仕事をする、お前らはお前らの仕事をする。なに、表の世界では普通に接するでしょう。」

後は何も話すことは無いとばかりに踵を返すハジメさん。

えっ？もう帰るんですか？

「ちよっ、ちよっと待つんじゃハジメ殿っ。」

学園長の言葉に歩みを止めるハジメさん。

「まだ何か用か？近右衛門。」

首だけで振り向きながら聞くハジメさん。

「目的：こういうことでしょうか？」

「くっ。何様のつもりだ？暗殺者のような分際で…」

うわあ、周りの空気も悪くなってきたなあ。

「そうじゃな。ハジメ殿の力量を見せてはもらえんかのう？大戦を戦い抜いた力の一端を、見れるだけでも彼らには勉強になるじゃろ

う。の？頼む。」

学園長が頭を下げる。

「…他にも学ぶべき事があると思うがな。まあ、いいだろう。さて、相手はタカミチでいいな？」

そう言って僕と向かい合うハジメさん。

「えっ、僕とですか？学園長ではないのですか？」

慌ててハジメさんと学園長に聞く。

「阿呆か。近右衛門が数日動けなくなったら、この学園を誰が回す？」

暗に僕が、数日動けなくなると言っていないですか？

「…では、よろしく頼むぞい。タカミチ。」

そう言って、皆のもとに下がる学園長。そんなあ。

「くく。そんな顔をするな、タカミチ。そんな顔をしているのは、これから始まるお前へのい…稽古が終わってからだ。」

煙草を燃やし尽くして笑うハジメさん。今絶対いじめて言おうとしたでしょ、いじめて。

「では、やるか。タカミチ、お前の活躍…聞いてはいる。がっかりさせるなよ？」

そう言って、無手で構えるハジメさん。

「安心してください。僕だって20年前の僕ではありませんから。」
そして、拳をポケットに入れる。これが僕の構え。

「ガトウの技か。そういや、ガトウから教わっていたのだったな。
…こい。」

居合い拳を放つ。

しかし、見切られているのか、ハジメさんは極小の動きだけで避けていく。

「威力はまあまあか。だが、あまり強者と戦ってこなかったか？…

甘すぎるぞっ。」

ハジメさんの姿が掻き消える。

「っ。」

本能的に後ろへ飛びずさる。すると、一拍遅れて僕が立っていた場所が衝撃と共に大きく窪んだ。思わず窪みの上を見てしまう。

「戦いの最中に動きを止めるなど、愚の骨頂だぞ?」

後ろからハジメさんの声が、聞こえたと同時に背中に衝撃が走り、体が吹き飛ばされる。

「がはっ。」

肺から息が吐き出される。

受身を何とか取りながら思う。ハジメさんは全く衰えていない。むしろ、僕では今だその限界を感じ取れない。

なら、僕は最初から、僕が持てる力全てを持って、相手をしなければいけなかった。…僕も腑抜けていたみたいだなあ。

左腕に魔力、右腕に気、咸卦法っ。

僕の全てをぶつけるっ。

「やっと少しは見れる顔になったか。さっさと来い。」

ハジメさんが構えたまま呆れた顔で言うて来る。

「いきますっ。」

豪殺居合い拳と居合い拳そして自らの拳を、必死に使い分けてハジメさんに向かう。

地面が次々と抉れて行く。だけど、ハジメさんにはかすりもしない。

「相変わらずっ、理不尽な強さですねっ。」

「なに、お前も強くなった。だが、まだまだステージが違うだけのこと。」

そして、ハジメさんの雰囲気が変わる。

「俺が大戦を生き抜いた技、今一度見せてやる。」
っ。牙突かつ。

ハジメさんの気が膨れ上がる。
避けられないっ。咄嗟に全力で身構える。

「…手加減はしてやる…。」

凄まじい衝撃と共に僕は意識を手放した。

—side end—

辺りは静寂に包まれ、各々が現状を理解するにつれ騒がしくなっていく。

「なっ、高畑君が…一撃でっ？」

「嘘でしょう…化け物ですか？」

魔法使い達は今の状況が信じられない。

「さて、近右衛門。タカミチを頼む。手加減はした、死んではいない。」

淡々とハジメが学園長に言う。

「む、無茶するのう。結界を抜かないぎりぎり加減も見事じゃったわい。」

「そんなことは阿呆がすることだ。ではな。」

そう言って、今度こそ立ち去るハジメ。

その後姿を見ながら学園長は、

「また、とんでもないのが来たのう。」
と呟いた。

そして、世界中の枝の一つに人影が見えていた。

—エヴァンジェリン side—

「フフフ。あいつがハジメ・サイトウか。」

なかなか面白い奴だ。

なるほど、自称正義の魔法使いどもにとっては、気に入らない奴に
違いない。

しかし、あいつは強いな。タカミチ程度では物差しにもならんか。

あれを屈服させるにはこの封印が邪魔だ。

だが、解けた暁には覚えている？ ハジメ。私が受けた屈辱を万倍に
して受けさせてやる。

よぎるは、自らの勘違いと、はめられた屈辱の数々。

ああ。あの鳥頭を思い出しただけで腹が立つっ。さっさと戻って秘
蔵のワインを飲む事しよう。

—side end—

幕間15

青年は少年を観る
人々は少年に英雄を重ねる

幕間15

（更正）

—主人公side—

計画の準備も終えて、後は数年後の仕上げを待つのみとなった。
メアたちも、この春中学生になり、平穏が続いていたある日。

「で、これはどういうことだ？近右衛門。」

「ふおっ。気配を殺して後ろに立つのはやめてくれっハジメ殿っ。
心臓が止まったかと思ったぞい。」

俺はある情報を仕入れて近右衛門がいる学園長室にいる。

「その心臓を貫かれないというならいつでも貫いてやる。さて、本題だ。これはなんだ？」

紙の束を近右衛門に投げ渡す。

「なんじゃこれは？ふむふむ、『ネギ・スプリングフィールドの修行先について』：ふおっ？ハジメ殿、どこからこれをつ？」

近右衛門が目を見開きながら聞いてくる。

だが、問題はそこではない。問題は、ただ知識を詰め込めるだけの
子供を教師に据えるという馬鹿さ加減だ。

「ナギと違って、とても優秀らしいな。飛び級で早ければ2年後に
は卒業か？」

とてもあの馬鹿から生まれたとは思えんな。

「…そして、修行先としてお前も少し話に噛んだらしいな？近右

衛門。」

ここが、重要な話だ。なぜ、この爺がここを修行先として提供したか。しかも教師として。

近右衛門が苦渋の顔をしている。

「まさか、ここまで早くハジメ殿に知れるとは思わなかったわ。」
そして、近右衛門が訥々と喋り始める。

「ナギは、最早こちらの世界で知らぬ者が居らんほどに、その名を轟かせた。そして、そのナギの子供がナギに等しい魔力を持っている。」

なるほど、周りの連中：とくに魔法学校の連中が関わっていきそうな問題だ。

「もちろん、周りの者達はネギ君をナギと同じように、偉大なる魔法使い・マギとなるように育てる事しか考えんじやろう。」

それはいい広告塔になるだろう。数年前のことを思い出すと反吐が出るがな。

「じゃから、わしは魔法使いとはなんのためにいるのかを、教師という教える立場を持ってネギ君に教える事ができたらと思つての：。もちろん、わしだって期待していないとは言わん。じゃが、彼の人生を決めるのは彼じゃ。」

そう言つてこちらを見る近右衛門。

真実が6割、ウソが4割といったところか。

「貴様が下の連中の事を考えていないはず無かろう？：俺がどういう名目でここに来たかは覚えているな？契約もしたことだしな。」

「どういうつもりじゃ？特にそちらが害を被ることはせんぞ？」

近右衛門の雰囲気が老獪のそれとなる。

「可能性があるものは全てといったはずだ。俺はM・M、メガロ・メセンブリア帝国両国の許可をもらつてここに來ている。計画に障害をきたす事柄、及びその可能性に関して、俺にはそれ相応の権限を有することができ

」
近右衛門が唸る。それを了承と受け取り、俺は部屋を去る。

「じゃが、ネギ君は優秀と聞いておるぞい？ どうするつもりなんじや？」

「阿呆か。自ら調べねば分かるまい？」

さて、ナギの息子か。どれほどの者か、この目で見ようじゃないか。

「というわけだ。俺はしばらく出かけることになった。」

アリカに事情を説明して、出かける旨を伝える。

「お主はまったく…。この前準備が終わったから暫くは一緒に居れると言うたではないか。」

アリカが少しむくれた様子で言う。

そんなアリカの頭をなでながら、

「すまん。あちら次第だが、半年ほどで戻る。ではな。」

そう言っ、アリカの頬に手を沿え唇を重ねる。

「んっ。ちゃんと戻ってくるのじゃぞ？」

「無論だ。」

そして、俺はウェールズへと出向いた。

：イギリスのウェールズ

「これはこれは、先の大戦の英雄がこのような場所に何の用かの？」
ここはメルディアナ魔法学校の校長室。

「俺は英雄などではないがな。…なに、英雄の息子がどれほどの者かをな。」

やれやれ、勝手に探っても良かったのだがな。手順を踏まねばならんときもある…か。

「ネギ…か。あの子は少し、特殊な環境での、干渉はほどほどにして欲しいものじゃがな。」

校長の目が鋭くなる。

「なに、俺の目的は力量を見ることと、改善すべき点があれば報告するだけだ。ではな。」

そして、校長室を出る。

気配を消す。

さて、件の息子を観察するでしょう。

本当にナギが小さくなった容姿だな。ちび鳥とでも名付けるか？

ちび鳥が壇上に上がる。

「はい。ですから、…。」

なるほど、優秀なのは本当らしいな。他の者と比べても知識量・頭の回転の速さは互角以上か。

放課後は、図書館に忍び込み勉強か。本当にナギの息子なのか？

「…。」

黙々と読んでいるな。

しかし、どれも相当な威力を持った魔法だ。何を考えているんだ？

今、俺は大惨事を目の前にしている。

ありえん。あのちび鳥は魔力制御すらまともにできていないのか？
ちよつとした衝撃で魔力が暴発している。しかも、武装解除の魔法を。

女子の悲鳴が凄まじいな。仕方がない。影の魔法で法衣を紡ぎ、被害にあった者たちにかけていく。

しかも、本人は何があったかまるで把握していない様子。

そして観察をして1週間、殆どがその繰り返しだ。もちろん、暴発の件は最初の1件以降、吹き飛ばすなり、無効化するなりで未然に防いだが。

これはひどい、要注意だ。自らを省みずに前しか見えていない…。修行先を変えるように圧力をかけるか？いや、さすがに今大きな行動を起こすと計画に支障が出かねん。

学校での教師の態度も気になるものがある。色眼鏡を通してでしか見れん者ばかりだ。

観察の報告書を提出しても、

「彼は未来の英雄ですよ？じきに気づき、自ら正す事でしょう。」

「われらが干渉して、英雄となれなかったらどうするつもりですか？」

話にもならん者ばかりであった。まあ校長は多少話が通ったがな。

改善はするだろう。

だが、根本的な問題解決にはならん。

正しく教えられる者がいればいいのだがな。

俺は、そう思いながら必死に考えをめぐらせていた。そして、ある人物を思い出す。

ところ変わってナギの故郷の村。数年前となんら変わらんな。

酒場に入る。あの老人のことを少し調べたいと思ったんだがな。

数年前のあの会話。ナギと親しいと思ったのだが。

酒場の主人にナギの事を聞くとなるほど。ここはナギを慕った者達が集まってできたらしい。

そして、件の老人。名はスタン。ナギを息子のように思っているの

だろう。

「だからよ、ナギの奴は悪ガキでよ。……」
今こうして酒の相手をさせられ話を聞くと分かる。

「スタン。そのナギの息子の事なんだがな？」

そう言うのとスタンがこちらに顔を向ける。

「あゝ。あいつか。あいつもなかなか悪戯ばっかするやつでな。ナギの話をしたら僕もそうなるのかな言いやがってよ。」

ふむ、ナギか。あいつの英雄譚だけ聞けば、ああも攻撃魔法を修得しようとしても不思議ではないか。

「実はな、その息子の事なんだが。魔力制御がろくにできていないな？ 武装解除の魔法を頻繁に暴発させている。」
その言葉にスタンは口を開けて呆然とする。

「なんじゃそりゃ。色事はまだ早いだろ。……というか、魔法学校の教師どもはなにやってんだ？」

放置しているのさ。

「色眼鏡でしか見れん連中が多くてな。それで、誰か適当な人物がいないかと思っただけ。」

「それで、俺を尋ねたって訳か。だが、俺は魔法を教えられるような人間じゃねえぜ？」

スタンが自分の手を見ながら言う。

「なに、スタンだけが教えるわけではない。あのち：ナギの息子を叱って欲しいだけだ。……ちゃんと魔法学校には報告書を提出している。」

「なんだ、お前さん調査か何かか？ 相当な腕前の持ち主だとは思ってたが。まあいい。んじゃ行くとするかね。あの馬鹿孫の顔も見たいしな。」

そう言って立ち上がるスタン。

「そうか。では、行くとするか。」

「おお、すまねえな。世話をかける。」

これで、多少は更正もできるだろう。

それから数ヶ月。

あのような魔力暴走を起こすことは無くなった。校長もさすがに問題だと思っていたようだ。対応が早かった。

ちび鳥もスタンからいろいろ教わっているらしい。

スタンも表面上は嫌々そうだが、内心は嬉しそうだ。

魔力暴走がなくなったならば、秘匿も可能だろう。その辺はあちらに来たときに話すでしょう。

ちび鳥が来たとしても、計画に支障はなさそうだ。

さて、麻帆良に戻るとするか。

幕間15（後書き）

ネギの魔力制御などの若干修正が入ります。
やっぱね…強制脱衣はね…犯罪ですからね。

幕間16

青年は麻帆良での立ち位置を得る
未来人は未知の過去と出会う

幕間16

～指導員～

ここは麻帆良。今日は休日。学生が盛んにあふれている。
そして、もちろん悪さを行う奴らもいるわけで。

「ちよっ。やめてくださいっ。」

少女4人が男達に絡まれていた。

「いいじゃん、いいじゃん。ちよっとお茶飲むだけだって。奢っちゃうよ?」

リーダーらしき男が執拗に迫る。

周囲の人間も気にはするものの去っていく。

「だーかーらっ。結構ですって言ってんでしょ?」

4人組の中で、活発そうな髪を右に結わえた少女が、男に言い放つ。
が、

「そんなこといわずに、さっ。」

それを気にするでもなく、男は喋り続ける。

「そこまですておこうか。しつこい男は嫌われるらしいぞ?」
そこに煙草を啜えた青年が話しに割り込む。

「あゝ。誰だ? あんた?」

男達のなかで体格のいい男が、割り込んだ青年に近づき、青年を投げようとその肩に手をかけようとした瞬間、

男の体が宙を舞った。

それを呆然と見る男達と少女達。周囲の通行人も見ていた。

「ぐえっ。」

重力にしたがって落ちた体と重い音が響き渡る。

「おっと、すまん。だが、余りにもみえみえだったのでは？」

青年は気にする風でもなく、落ちた衝撃で悶絶している男に言う。

「はっ、ふざけんなてめえっ。なにしゃがった。」

男達がいつせいに青年に向かう。

「やれやれ、血気盛んな奴が多い…。」

向かってくる男達を往なし、一撃で沈めていく青年。

男達は、あっという間に地に伏せていく。

「…すごい。」

少女たちの中で、背が高くポニーテールの少女が、思わず呟く。

周囲の通行人たちもざわめく。

「…おいつ。あれって、デスメガネよりも凶悪って噂の指導員じゃねえか？」

「…えっ？ 男子中等部、高等部を軒並み大人しくさせたっ？」

「…ああ。どうやら教員免許も取得し、本格的に学校内でも指導に当たるらしい…。」

「…こりゃ、面白くなってきたぜい。」

青年は気にした風も無く、携帯を手にし、

「ああ、ここは…、そう…カフェの近くだ。後は頼む。」

なにか報告をしている。それが終わると青年は、少女達に近づく。

思わず少女達は姿勢を正す。

「災難だったな。…美人、美少女というのは得なのか損なのか分かんない。まあこれからこいつらも更正するだろう。こういうことが

無いよう俺達がいるのにな、すまん。」

青年の謝罪に、

「いえ、助けてもらったんですから別に大丈夫ですよ。」

前半部分の事を聞いたから若干頬を染めている少女が答える。

「そう言ってもらえると助かる。せっかくの休日だ。こんな事はさっさと忘れて、楽しむといい。」

そう言って、青年は立ち去った。

「渋い…。明日菜じゃなくても、ああいう人なら確かに惚れるかもね。」

活発そうな少女が呟く。

「せやなあ。」

関西弁の一番おびえていた少女がそれに反応する。

「うーん。ちよつとクールすぎるなあ。私はもうちよつと親しみやすい人がいいなあ。」

「私は…ああいう人が…いいかな。」

朗らかな少女と背の高い少女も反応した。

そして、少女達は色恋話に花を咲かせながら、休日を楽しんだ。

—超 side—

どういうことネ。

20年前の大戦でオステティアが滅びていない？

今では、帝国とM・Mメガロ・メセンブリア両国の友好国としての中心国となっている？

いや、それよりももっと重要な事があるネ。

アリカ・アナルキア・エンテオフュシア：《災厄の女王》として処刑されるはずだった彼女が、世界を救った英雄の一人として認識されているという事ネ。

もちろん千の呪文の男や近衛詠春など。私が知っている英雄はもち

ろんいる。
だが、知らない英雄もいる。

：ハジメ・サイトウ。パイルドライバー、騎士として名が広まっている。その功績は前者は大戦中、国や世界を裏切った者たちを狩っていたときに、後者はアリカ女王の護衛として。

もしかしたら私が来た事で世界に歪ができたかな？

様々な事が考えられるネ。だが、

私がすることは変わらないネ。私の計画はこのまま続けるヨ。なんのためにこの時代に来たか分からなくなるからネ。

だけど、調べなければいけないネ。なぜ、この時期にパイルドライバーがこの麻帆良にいるか、その目的を。

— side end —

ハジメは指導員として、次々と問題児を屠り、更正させていく。

その活動が広まるに連れて、その名を知れ渡らせる。

麻帆良の教育の最後の砦、最終兵器^{リーサルウェポン}として。

幕間16（後書き）

麻帆良の最終兵器、サイトウ先生。
いや、センス無くてすみません。

幕間 17

青年は世界を否定する
世界は人を知る

幕間 17

く折るく

—これは、ハジメが造物主を倒したその後の語られなかった物語

ナギと別れ、ゼクトをつれ、宮殿の中心に行く。

そこには、倒れ臥していた造物主の姿があった。

「無様だな。造物主……。それほどまでになぜ、貴様がその目的を諦めんのか理解に苦しむ。」

「くく。貴様に分かってもらおうなどとは夢にも思わん。」

倒れ臥し、瀕死の状態の造物主が答える。

「貴様と話をしても埒が明かんな。良いだろう。これを見ろ、造物主。」

情報端末を造物主に投げ渡す。

渡された端末を見る造物主の雰囲気は驚きに満ちる。

「なっ。なんだ、これは？」

「くく。面白いだろ？神話の時代を始め、人々は往々にそれに挑み続けた。神の顕現……。死者蘇生……。そこにいるはずがない、無から有を生み出す秘術を。所詮手から火を放ったところでそれはいずれ

消えてしまうものだ。それを考えるとこの新世界も、それに準ずるものであるな。：いずれは、消えてしまう」

そこにあるのは旧世界・新世界の魔法理論を始め、陰陽術や召喚術。膨大な秘術の数々。果てには、神話の物語すらあった。

俺がこの半年間で旧世界で調べ上げた。それこそ、体が悲鳴を上げるほどに。おそらく、調べれば更にでる事であろう。

「貴様は確かに始まりの魔法使いと呼ばれ、幾多の魔法を作り、使ってきたであろう。」

「だが、所詮貴様は一人であった。身の回りに居たのは貴様に着いていくしか能の無い、いわば人形。」

「2600年？ どれだけ貴様が絶望し続けたかは知らんが、それほどの時間があれば、人はこれだけのものを生み出せる。」

「ばかな、これほどまでに：。」

膨大な資料を見て、愕然としている造物主。

「人の数は可能性の数だ。：もちろん、腐ったものもあるがな。」
そう言いながら、煙草に火をつける。

「ふう。それで、貴様はどうする？ まだ、貴様の目的は唯一なるものとして、遂行する気か？ 言っとくがYESと答えるならば、大笑いしてやろう。貴様は道化ではない。道化ですらないとな。：道を踏み違えた事をそろそろ自覚しろ、造物主」
紫煙を吐きながら、造物主に答えを求める。

「私は、私は間違っていたのか？」

絞り出すような声で、造物主が問うて来る。

「それを見れば分かる事だ。貴様は人の可能性を否定した結果だ。だが、それすらも人任せにする気か？ 貴様。」

「ふはははは。…人間というのが貴様というもののばかりであったなら…、私はこうしてはいなかったかも知れぬ。」

「っ？」

体が消えていく造物主。

「ちっ。最後まで道化で居る気か？ 貴様。」

「なに。もう、折れてしまったわ。わが悲願。これほどまでに虚しいものであったか。」

空虚な声を出す造物主。

「貴様もどこまで行こうと所詮は人だ。人は一人では無力。」

「ははは。貴様が言っても説得力が無かろう。」

笑いながら消える造物主。

「で、次はお前か？」

「貴様は本当に…どこまで知っているのだ？」

雰囲気が変わったゼクトの問いに、

「世界の真実と、独りの道化だ。」

世界の真実…、この新世界はいずれ滅びる、そのようなことを、ただ指を咥えて待っているわけにはいかん。

「くくく。我が独りの道化か。言いて妙だ。我は結局は独りであったからな。」

ゼクトの姿をした造物主が悲しげに呟く。

吸っていた煙草の火を消し、造物主に問う。

「それで、答えを聞いていなかったな。貴様は、その悲願が踏み間違えたのは理解したようだが？」

「…。貴様も人が悪い。我は、我の悲願は、目的はもう貴様に折られてしまった。」

空虚な声が造物主から響く。

「ならば、俺に協力しろ。それがせいぜい貴様の償いになる事を祈っている。」

「全く。人間というのは面白いものだ。先ほどまで戦っていた我に協力しろと？」

おどけた口調で造物主が言う。

「嫌ならば、さっさと消えろ。目障りだ。」

「そう急くな。協力させてもらう。わしに利用価値を見出しからこそ、わしに言ったのじゃろう？」

「分かっているなら、最初からそうしろ。貴様のその命、俺がもらう。」

そう言って、煙草に火をつける。

さて、次は世界を救って見せよう。

この世界が滅びるのが運命というならば、その運命…俺が貫く。

そして、新たな物語の幕が開く――

幕間17（後書き）

とりあえずこれで幕間は終了。書きたいなあと考えたことはかけたので良かったのですが、思ったよりも長くなってしまいました。

原作編は原作を読み直している最中なので不定期更新になりそうですが、週に2，3回は更新出来るように頑張ります。ではまた。

第1話

英雄の卵は英雄にであう
されど卵は英雄に気づかず

第1話

～英雄の卵～

「わー、ここがニッポンですか。すごいなー。」

赤毛の少年が大きな杖を背負い、辺りを見回している。

少年は辺りの通行人に、目的地へ行くための道を聞きながら歩いていく。

彼の名はネギ・スプリングフィールド。修行先として麻帆良に赴いた魔法使いの卵である。

舞台は麻帆良学園へと移る。

—明日菜side—

バイトから戻ってきて、着替えを済ましながら部屋に入ると、

「そういえばな、アスナ。じいちゃんが言っておったんやけどなあ。今日新しい先生が来るらしいで？」

木乃香が刹那さん・メアちゃんと一緒に朝食を並べてながら、聞き捨てならぬ事を言う。

「えっ？ウチのクラスに？うそっ、高畑先生はどうなるの？」

「高畑先生は出張ばかりやったからなあ。担任から外されるのかもなあ。」

うっ。たしかにこの2年間でいなかったときの方が多かったわね。

「でも、それでもちゃんと、ウチのクラスを纏めていたからいいじ

やない。」

そうよ。だから、担任が変わるなんて…、

「ははは、明日菜さん。…何回、新田先生に怒られていたと思って
いますか。」

さあ、何回かしら…刹那さんのツツコミがいたいわあ。

「ウチのクラスは個性豊かだからねえ。」

メアちゃんがきれいな金髪を後ろに纏めながら、苦笑いしている。
なんかメアちゃんを見ていると、懐かしい気持ちになれるのよね。
いつも思うけど、なぜかしら？

「ん？どうかした？アスナ。」

ずっと見ていたからか、メアちゃんが気づいた。

「いや、なんでもないわよ。さ、食べましょ食べましょ。」
こうやって私のいつもの一日は始まる。

いつもの一日ではなかったんだけどね。

— s i d e e n d —

ところ変わって学園長室。

「…遅いな。」

学園長室のソファに腰掛けている男が呟く。

「道を間違えてしまったのかのう？迎えのタカミチから、連絡も無
いしのう。」

頭の形が少々異常な老人が、心配の声を上げる。

「すいません、学園長。遅れてしまいました。」

そこに、メガネをかけた老け顔の男が入ってくる。

「わわ、失礼します。」

遅れて赤毛の少年も入ってくる。

「遅かったのう、タカミチ。なにかあったのかの？」

老人が男に問いかける。

タカミチと呼ばれた男は、

「はは、ネギ君が女子中高生にもみくちやにされていましてね。」

「うう。すみません。」

ネギというらしい赤毛の少年が縮こまる。

「学園長室を、女子中等部に作っている弊害が多すぎるな。さっさと移設しろ、近右衛門。」

ソファから立ち上がった男が、老人にさすように言い放つ。

「なっ。わしの楽しみがなくなるでないかっ。」

学園長の本音に場が静まる。

「コホンっ。冗談はともかく、移設出来ぬ理由があるといったじやろう？ ハジメ殿、いや、サイトウ先生。」

「ふう。それで弱みを握られるのはお前だぞ？ 近右衛門。」

ハジメが呆れた様子で学園長に告げ、ネギの隣に行く。

学園長が雰囲気を変えて、ネギと目を合わせる。

「さて、ネギ君。修行のために学校の先生をやる事になったようじゃが…。」

学園長は髭をなでながら、

「正直言うと、この修行は大変なものになるじやろう。ちゃんとやりぬく覚悟があるかのう？ ネギ君。」

ネギに確認するように言葉を並べる。

「は、はい。もちろんそのつもりです。至らない点は多々あると思います。よろしくお願いします。」

そう言ってネギが頭を下げる。

「うむうむ。では、ネギ君には2-Aクラスを任せたいと思っているのでな。そこで担任として教育実習を任せたいと思う。」

「ええっ。担任ですか？僕には荷が勝ちすぎる気がします。…」
学園長に言われた役職にネギが戸惑う。

「安心せい。そこに居るサイトウ先生は、男子中等部、高等部と問題児が多いところを、指導員として回っていた先生でな。サイトウ先生を副担任として、ネギ君の補佐をしてもらう。」

ネギがハジメに顔を向ける。

「えっと、ネギ・スプリングフィールドといいます。未熟者ですが、よろしくお願いします。」

ハジメに頭を下げるネギ。

「ああ。俺はハジメ・サイトウだ。何か困った事、分からない点があるならば、俺や後で紹介するが新田先生を頼るといい。大変だろうが頑張ってくれ。」

ハジメがネギの肩に手を乗せる。

「はいっ。」

「ふおっふおっふお。大丈夫そうじゃの。」

「ええ。では、ネギ君。これがクラスの名簿だ。大変だとは思いますが、頑張ってください。」

タカミチがネギに名簿を渡す。

「はい。では行ってきます。」

ネギは失礼しましたと言って、学園長室から出て行く。

「では、ハジメさんも頑張ってください。男子とは勝手が違うとは思いますが。」

「心得ている。ではな。」

ハジメも学園長室から出て、ネギの後を追う。

学園長室に残るのはタカミチと学園長だけとなった。

「いやナギの息子じゃというのに、ネギ君は思った以上に礼儀正しいようじゃのう。」

「ナギさんの村のスタンさんからいろいろ教わったらしいですよ？」
タカミチは、多分反面教師として教わったんだろうな、と思いながら、返す。

「補佐として、ハジメ殿がおるし、ネギ君にとって有意義な修行となるじゃろうな。」

学園長は椅子に凭れながら、今後の展望に明るいものを感じているようだ。

「ハジメさんは、そういうところはきっちりしているので、ネギ君もいい勉強になるでしょう。」

タカミチも同じような事を思っているようだ。

英雄の卵は、果たしてどのように成長するか。
それはまだ、誰も知らない。

第1話（後書き）

原作開始です。不安でいっぱいです。

後、いつの間にか総合評価が2000超えていて、お気に入り登録も900超えていました。吃驚です。テンションあがりました。思わず、昨日不定期更新になるとか、書いたのにもかかわらず、こうして更新していました。

初心者が書く、拙作を楽しんでくれる人がいるというのは本当に嬉しいです。次話は明後日には更新できると思います。ではまた。

第2話

少年は青年の背中に何を思う
少年は目指す片鱗を見る

第2話

～初授業～

麻帆良学園女子中等部の廊下を歩く2つの影。

ハジメとネギである。

ネギはやはり、教習でありながら一つのクラスを、受け持つ事に不安があるのか、顔をこわばらせている。

「それほど緊張しては、うまくいくものも、うまくいなくなる。少しは、心を落ち着かせてみてはどうだ。スプリングフィールド先生。」

ハジメが、ネギに落ち着くように言う。

「はは、ありがとうございます。ですが、まだ先生ではありませんよ？ サイトウ先生。あと、僕のことにはネギで大丈夫です。」

ぎこちない笑みを浮かべながら、ハジメの気遣いに感謝するネギ。

「だが、教育実習生といえども先生という役職に変わりはない。ネギ。」

「はい、そうですね。頑張りたいと思います。」

そして、2人は2-Aのクラスの前に着く。

「はあ、噂以上かも知れんな。問題児がいるというのは。」

「はは、元気があるようで何よりですね。」

ハジメとネギは、ドアの上に挟まっている黒板消しを見ながら、苦笑する。

「いや、よく下を見てみろ。」

ドアから少し入ったところには、足元に紐が見える。

「は、は、はは。」

ネギは苦笑するしかなかった。

「俺が先に入ろう。ネギは、ここで待っている。怪我をしたくなければな。」

ドアを開け放つハジメ。落ちる黒板消し。

紐を踏み切り、それに連動して落ちるバケツと、矢を回収する。

「さて、高畑先生から、こういったことをする輩は聞いている。鳴滝姉妹、春日。実行犯はこの3人でいいな？」

静まる教室を鋭い目で見回すハジメ。

「「「はいっ。その3人ですっ。サイトウ先生（ハジメツち・父上）」」」

「「ええっ、そりゃないよっ。みんなっ。」」

いっせいに翻った勢力図に嘆く、春日と鳴滝姉妹。

そんな3人に、

「そりゃ、新任の先生が、麻帆良の最終兵器ことサイトウ先生リーサルウェポンって分かったらそうなるって。」

苦笑いしながら麻帆良のパラッチこと朝倉が、皆の胸中を答える。そんな朝倉に、

「いや、新任の先生は俺ではない。…まあ副担任にはなるが。ネギ、入ってきていいぞ。」

教室の外で待っていたネギに声をかけるハジメ。

「あ、はい。」

そして、教室に入るネギ。

「は、初めまして。今日からこのクラスの担任を勤めさせていただく事になった、ネギ・スプリングフィールドです。担当教科は英語になります。教育実習として、3学期の間お世話になります。よろしく願います。」

自己紹介を終えたネギが頭を下げる。

そしてその瞬間、黄色い声が教室に響き渡った。

—主人公side—

あまりの五月蠅さに、一瞬視界が揺らいだぞ。どれだけ、凄まじい威力だ。

ネギもふらふらとしている。

「静かにしろっ。それ以上、他のクラスに迷惑をかけることは、俺が許さん。質問等は代表が行え。」

「はいはいっ。じゃあ私が質問します。」

果物を連想させる髪形をした女子。確か朝倉だったな。

「よし。では、朝倉。質問をして良し。ただし、常識の範囲内でだ。」

「はい。では、えっとネギ先生。失礼ですが、本当に先生なんですか？」

「あ、僕は10歳ですが、大学卒業程度の知識は持っています。不安だとは思いますが、よろしく願います。」

「おおー。んじゃ、どこ出身ですか？」

「えっとですね、イギリスのウェールズの：」

ふむ。ある程度落ち着いてきたようだな。時計を見ると授業開始から10分経っている。

あと10分ほどを説明に使って残りを授業に回すか。

「それじゃ次は、こ」

「そろそろ、質問は終了だ、朝倉。」

「えーじゃなかった、わかりましたあ。」

席に戻る朝倉。

「さて、では知っている奴も顔見知りもいるが、改めて自己紹介だ。

俺はハジメ・サイトウ。ここで受け持つ教科は無いが、全般教えられる。教えを請いたければ、いつでも来い。」

俺の役割は、ネギの完全補佐という事になった。下手に放置も出来んからな。

「それと、俺はこのクラスの副担任を任されることになった。故に担当教科は無いと言ったが、ネギの補佐として、英語の授業は俺も出ることになるからな。」

あからさまに嫌な顔をした奴がちらほらいるな。あとで、成績表の下を確認しとくか。

「俺からは以上。ネギ、なにか伝えたい事はあるか？」

ネギに確認し、ネギが無い事を伝える。

「では、授業開始といこう。ネギ、頼んだ。」

そして、教室の後ろへ下がる。そのときに、先ほど殺気やら何やらを出した連中を確認する。長瀬、古菲、マクダウエルか…。マクダウエルはネギにも殺気を出していたな、これは要注意か。

……

…

ネギの授業が始まった。

「はい。では最初の授業と言うこともありますし、高畑先生が教えたところまでの、前辺りからを復習する事にしましょう。」

「えっと、委員長は、雪広さんでしたね。P128から大丈夫です。すね。」

「ええ。はい、そうですね、ネギ先生。」

雪広がうつとりしたような顔で答える。…雪広はあんな奴だったか？

「では、ここ辺りをどう理解しているかを知りたいので、まずは雪広さん。このページの最初から半分までを訳してください。」

「分かりましたわ。」

ふむ。順調に進んでいるな。しかし、なかなか優秀だな。ますます、ナギの息子かどうか怪しくなる。母親に似たのか？　そういえば、母親は知らんな。今度ナギと会ったならば、聞くとするか。

「そうですね。ここの英訳はそう答えるのが一般です。もし分かりにくいと感じるならば、物語のように、自分に分かりやすい文章で慣れていきましょう。僕も日本語を学んだときは、一つの言葉の意味の多さなどに四苦八苦しました。ですから、型どおりに受け取るだけでなく、それがどう文章につながってきたか、つながっていくか、楽しみながら学んでいきましょう。」

そこで授業終了の鐘が鳴る。

「今日はここまでですね。次回から本格的に教科書の内容に入ります。少しでもいいので、予習をしてきてくださいね。」
ネギが教室を出て行く準備をする。俺も教室を出るとするか。

—side end—

—ネギside—

ふう。なんとか終わったあ。大丈夫だったかなあ。最初だから簡単にしたけど、見る限りだと出来なさそうな人が数人いたなあ。

「初めてにしては上出来だったな。ネギ。」

これからどうやって教えていこうかなと考えていると、後ろから声をかけられた。

振り向くと、そこにはサイトウ先生がいた。

「いえ、緊張しっぱなしで。」

本当にものすごく緊張した。教えるというのは大変だって聞くけど本当に大変だ。

「課題点は自分で分かっているだろうから、とやかくは言わん。職員室に戻ったら、担任としての業務内容を教えよう。」

なんか、サイトウ先生は随分威圧的というか、怖い感じがする先生だけど、面倒見がいいんだなあ。

教室にいたときも、分からなさそうにしていた子に、さっと教えていたもん。

「お世話になります。」

感謝の意味もこめてお辞儀する。

「では、行くとするか。」

「はい。」

少し歩いていると、本の山が向かってきた。いや、本を持っている女の子だ。

「あれは…宮崎か？まったく、誰かを頼ればいいものを。いくぞ、ネギ。」

え、クラスの人の名前をもう覚えてたんですか？サイトウ先生。そういえば、僕に質問をしてきた人の、名前も分かっていたようだし。すごいなあ。

「あ、待ってください。」

サイトウ先生、足はやいっ。もう宮崎さんのところにいるっ。魔法で身体強化して僕も追いかける。

追いつくとサイトウ先生は、もう宮崎さんが持っていた本を持っていた。

「わわわ、あ、ありがとうございますう。」

「気にするな。ネギ、君も多少は持てるだろう？数冊頼む。」
そう言って器用に本を僕に渡すサイトウ先生。

「つとと。うわあ、結構重いですね。宮崎さん、余り無茶してはい

けませんよ?」

「は、はい。気をつけます。」

宮崎さんが狼狽しながら返事をしてくれた。

「では、行くとするか。これは、図書館島か?」

「はい。そうです。すいません。」

ぺこぺこお辞儀してくる宮崎さん。なんか小動物を連想させるなあ。サイトウ先生が歩き出したので、僕もついていく。まだ、どこに何があるか分からないんですね。

「ありがとうございますなあ。」

お礼を述べて走り去っていく宮崎さん。それにしても、図書館島かあ。とてもでかかったなあ。吃驚しました。

「走ってもいいが、こけるなよっ。」

そんな宮崎さんに声をかけるサイトウ先生。

やっぱ、優しいんだなあ。サイトウ先生は魔法使いじゃないけど、僕が目指す偉大なる魔法使いもこんな人を言うのかなあ。

「少し、寄り道をしてしまったな。学校へ戻るとするか。」

「はい。」

サイトウ先生と一緒に学校へ向かう。

この修行も大変だと思ったけど、頑張れる気がするなあ。

僕は、早足で行くサイトウ先生に、精一杯ついていきながらそう思っていた。

第2話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

なかなか書く時間が取れなくなって来ましたが、更新頑張りたと思います。ではまた。

第3話

青年を知る少女達はただ驚く
知らぬ少女達は青年と少年に何を思うか

第3話

～歓迎～

—メアside—

最後の授業も終わり、ネギ先生と父上：サイトウ先生の歓迎会をする事になった。

騒がしい事が好きなうちのクラスだからなあ。

「それにしても吃驚してもうたわあ。ハジメのおじさんが、ウチのクラスに来るなんてなあ？」

歓迎会の買出しに、一緒に来ていたこのちゃんが呟く。

「はい。私も吃驚しました。このちゃんやメアちゃんにも黙っていたとは、学園長もハジメ様も人が悪いですね。」

せっちゃんも知らなかったみたいで、少し責めるような口調で喋る。

「私も知らなかったなあ。父上はなかなか連絡してこないし、ネギ先生のことしか教えてくれなかったよ。」

いきなり、父上が教室に入ってきたときは、思わず、立ち上がりそうになっちゃった。

もう本当吃驚しちゃったよ。

「メアちゃんも知らなかったの？」

「うん。忙しいのは分かるけど、こういう大事なことは教えて欲しいなあ…全く。」

このちゃんの疑問に、普段思っていたことと一緒に思わず口に出る。
「アスナは高畑先生が、担任じゃなくなったから元気ないしなあ。」
となりでぶつぶつ言っているアスナを見ながら、このちゃんがあまり心配していないような口調で言う。

アスナ：「：サイトウ先生、若いけど：渋くてかつこいいし：でも子供が担任って：。」：怖いよ。

父上は、見た目若いけど既婚者だよ？しかも、たまに家に帰ると、何気にラブラブな雰囲気之母様と出している人だよ？

母様と父上は、私がいないと大学生のカップルにしか見えないからなあ。

「ネギ君はメアちゃんから見てどうだった？」

少し小声で聞いてくるこのちゃん。

「うーん。そんな気にするほどの子じゃなかったよ？」

それにいくら英雄の息子だって、私達とくつつけるような真似はさせないって、父上言ってたし。

「それに、本人があまりその気なさそうだったよ？修行として先生頑張りますって感じだったし。」

10歳の子供だからといって甘く見てたよ。頭もいいし、高畑先生より教えるのはうまいかも…。

「そやったなあ。せっちゃんはどう思う？」

「私もメアちゃんと、同じように思います。ハジメ様もいますので、学園長が何かできることも無いかと。」

「ハジメのおじさんのおかげで、お見合いしなくて、ようになったしなあ。心配なさそうやね。」

「んじゃ、さっさと戻って準備手伝おうか。アスナ、行くよ。」

まだ、うんうん変な事で唸ってるアスナを、肩を揺らして目を覚ま

させる。

「えっ、あ、うん。」

そういえば、誰が父上たち呼ぶんだろ？

教室に駆け足で戻る最中、私はそんなことをふと思った。

—side end—

—のどかside—

職員室前で立ち止まって、深呼吸をする。

「のどか、落ち着くですよ。サイトウ先生たちは職員室にいることは確認しましたし、呼ぶだけですから、そんな緊張しなくとも大丈夫なのです。」

「う、うん。わかった、ゆえ。」

職員室の扉に手をかけ、開ける。

何の抵抗もなく開けられた事に違和感を感じる。

えっ？

ふと目の前を見たら、サイトウ先生がそこに立っていた。

「どうかしたか。宮崎に綾瀬。」

わわわっ。ど、どうしよ。えっと、ま、まずは、案内を：

「実は、サイトウ先生とネギ先生に、教室の方に来ていただきたくて、来ました。」

私があたふたしていると、夕映が私の代わりに、サイトウ先生に説明してくれた。

「ここじゃだめなのか？」

「はい。教室でなくてはだめなのです。」

「そうか、わかった。ネギを呼んで来る。少し待っていてくれ。」
そう言って職員室の中に戻るサイトウ先生。

「あ、ありがとう。ゆええ。」

思わず、情け無い声が出ちゃう。

「まったく、昼間の礼はちゃんとどこかが言うですよ？」

「う、うん。頑張る。」

ちゃんとお礼しなくちゃ。

「さて、では行くか。」

ネギ先生を連れてきたサイトウ先生を教室に案内する。
ようし、頑張るぞっ。

—side end—

のどかと夕映に案内されてハジメとネギが教室に入る。
すると、いっせいにクラッカーの音が教室に響き渡る。

「「「ようこそっ。ネギ先生っ、アーンドッ、サイトウ先生っ。」」」

紙テープや紙ふぶきがあたりに舞う。

驚きに目を丸くするネギと、若干苦笑い気味のハジメ。

ネギが覚醒すると、

「え、えっと。これは？」

戸惑いながらも疑問を口にする。

「2人の歓迎会ですよ。じゃんじゃん楽しんでくださいね。」

朝倉が趣旨を説明すると、

「わー、本当ですか？ありがとうございます。嬉しいですっ。」

ネギが嬉しそうにお辞儀をし、それが、パーティ開始の合図となっ

た。

ネギとハジメが飲み物を飲みながら、クラスの面々と次々と話していくと、

「今日はお疲れ様です。ネギ先生、サイトウ先生。初日の授業はどうでした？」

メガネをかけた大人の女性が、ハジメたちに近づいてきた。

「ああ、こちら源しずな先生だ。俺がいないときは、しずな先生がネギの指導教員になる。なかなか上出来だったと思うが？」

ハジメがネギに紹介する。

「あつ、はい。よろしく願います。授業の方は、緊張しましたが、何とかできたと思います。」

ネギが頬をかきながら、今日の報告をする。

「ふふ。誰だって、初めてを経験して学んでいくんですから。自信を持ってくださいね、ネギ先生。」

報告を聞き終えたしずな先生の言葉に、

「はいっ。頑張りますっ。」

元気よく答えた。

そして、他愛ない会話をしていくハジメたち教師陣。

—のどかside—

「ほらっ、いくですよ。のどか。」

「うんっ。」

ゆえに背中を押してもらって、サイトウ先生たちのところへ向かう。

「あ、あのっ。」

サイトウ先生がこちらに顔を向ける。

「ん？宮崎か。どうした？」

「昼間は手伝っていたいて、ありがとうございました。：お礼として、あの、図書券です。」

サイトウ先生に図書券を差し出す。

あうう。緊張するよお。もらってくれなかったら、どうしよう。サイトウ先生は、やっぱり怖いイメージが…。

「ああ、あれか。気にしないでいいものを。俺は先生だぞ？まあ、気持ちしてもらっておこう。」

あつ、もらってくれたっ。あ、笑顔は意外にす、ステキかもしれない。

「あ、後ネギ先生にも。どうぞ。昼間はありがとうございました。」

「はは。余り、お手伝いできたようには、思えませんでした。僕も気持ちとして、もらっておきます。」

ネギ先生も笑顔で受け取ってくれました。

やった、やったよ。ゆえ。男の先生だったけど渡せたよ。

思わずゆえの方向を見る。ゆえが親指を立ててくれていた。

(よくやったです。のどかつ。)

「おお。本屋が、先生にアタックだーッ。しかも2人っ。」
えっ？

「えっ、あ、違いますー。それに私本屋じゃないですー。」

良かった、渡せて。この調子で、男の人とか苦手意識をなくしていききたいなー。

そんな風に思う私でした。

—side end—

その後も、委員長である雪広がネギに銅像を渡すなどの暴走をした

り、

そのことでもめる、雪広と神楽坂のじゃれあいをしていると、

「そういえば、父上。このこと、母様は知っているのですか？」

金髪を三つ編み巻きで纏め上げた少女が、ハジメに近づいてきた。

「メア。学校では、サイトウ先生だ。」

「なら、サイトウ先生も、私のことをサイトウって、呼ばなければだめじゃないですか。」

そんな2人に、

「え、サイトウ先生とメアちゃんって親子？」

地獄耳とも思えるほどに、2人の会話に気づき、一気に近づく朝倉。流石である。

「ああ。そっか、知らなかったのか。そだよ？」

そんな朝倉に、メアが当然のように答える。

「「「え、ええええええつ」」」

教室に木霊する知らなかった者たちの叫び。

「え？え？メアちゃん。サイトウ先生の娘なの？それよりも、サイトウ先生って結婚してたのっ？」

アスナがメアに詰め寄る。雪広は、アスナに弾かれたのか、回転して目を回している。

「あれ？アスナにも言ってなかったっけ？」

「ウチとせつちゃんぐらいしか、知らんとかちゃうのかな。」

「そうですね。余り公言していいものでも、ありませんし。」

記憶をたどるメアに、木乃香と刹那が補足する。

重大な事だったのか、クラスの面々は思い思いに騒ぎ出す。

そんな皆を眺めながら、

「サイトウ先生：結婚してたんですね。」

ネギがハジメに確認する。

「ああ。わざわざ公言する事も無いと思っていたが、なぜ知らないだけでこんな騒ぎになるんだ？」

ハジメは、飄々とした面持ちで今だ騒いでいる皆を眺めている。

そんなハジメに、ネギは、

「は、はは。そうですねえ。なぜなんでしょうね。」

なんともいえない顔で曖昧に返した。

こうして、ハジメとネギの歓迎パーティーは騒がしいままに終わった。

第3話（後書き）

いろいろ書いていたら、長くなってしまいました。
やっぱ難しいですね。文才が欲しい…。

まだ1日目終わってません。おかしいな、プロットもどきによると、
サクサクッと初日とか終わらせるはずだったのに。

未熟な作者ですが完結目指して頑張りたいと思います。ではまた。

第4話

将来は誰にも分からず
故に人は将来を楽しむ

第4話

～楽しみ～

—ネギside—

「ふう。」

パーティも終わってサイトウ先生としずな先生と共に外へ出る。

「ふふ。ネギ先生には、少し騒がしかったかしら？」

しずな先生の言葉に、

「いえ、僕とサイトウ先生を歓迎するためのパーティですし、とても嬉しかったです。」

とても元気がいいとも思いましたが。お酒とか入っていなかったのに、あのテンションは凄まじいと思います。

でも、歓迎されて思いましたが、あのクラスは楽しいです。いいクラスにめぐり合えたなあ。

「タカミチも苦勞していたみたいだし、毎日騒がしくなるだろうな。」

「はは、でも皆さんいい人たちですから、大丈夫ですっ。」
うん。明日からも頑張ろう。

学校を出てしばらく歩いていくと、

「そういえば、今日からどこに住むんですか？」

しずな先生のそんな疑問に、僕は思わず立ち止まった。

…そういえば、忘れてた。

ど、どうしよ。授業の事とか、先生の心構えとか、礼儀作法とかは準備してきたのに、肝心な事忘れちゃってたっ。

一気に顔が青ざめていくのが分かる。今日は、僕野宿？

「なんだ、タカミチから聞いていなかったのか？ネギ、貴様は奴と同室に住むことになっているはずだぞ？」

「えっ？本当ですか？」

よかった。野宿じゃなかった。

「あ、でも僕タカミチの家知らない……。」

「心配するな。あいつは教員の寮に住んでいる。案内しよう。」

「あ、ありがとうございます。」

本当にサイトウ先生には、お世話になりっぱなしだなあ。

「では、また明日。」

「ええ。また明日。」

「はい、また明日です。今日はありがとうございました。」

しずな先生と別れ、男性教員寮に入る。

「すまんが、今日から、高畑の部屋に住む事になった者がいるのだから。鍵は用意してあるか？」

サイトウ先生が、多分寮の管理人の方かな？に話しかけている。

「あ、今日からお世話になります。ネギ・スプリングフィールドと言います。」

「ああ。高畑先生と学園長に聞いていますよ。はい、これが部屋番と鍵です。無くさないようにねえ。」

鍵を手に、タカミチの部屋へ向かうとすると、

「そういえば、タカミチは暫くいないんだったな。一人で困る事があったら、同じ階の瀬流彦か3階にいる明石教授を尋ねると良い。」

「分かりました。今日はありがとうございました。明日からもよろしく願います。」

そう言ってお辞儀する。本当にお世話になりっぱなしだったなあ。

「なに、間違っている点があるならば、しっかり教えてといてやる。ネギ、道を違えるなよ？」

そう言っ、寮から出るサイトウ先生。

サイトウ先生は自分の家を持っているらしい。というよりも、パーティで家族がいるって聞いたときは吃驚しました。

とても、子持ちの見た目には見えませんよ…タカミチと比べると更に…。

さて、明日の準備もあるし、部屋に行こう。

—side end—

—エヴァンジェリンside—

サウザンド・マスター

「くくく、あれが、千の呪文の男の息子か…。奴の息子とは思えんほどに、理知的な奴だったな。」

授業を聞く限り、優秀とまではいかんが、それなりに出来ている。

子供と言えども、なかなかのものだ。

しかし、くく。やっと、封印を解除するチャンスが現れたと思ったら、そのチャンスと共にまさか、あのパイルドライバーが来るとはな。

迂闊に行動できなくなってしまったな。しかし、このようなチャンスはもう無いだろう。

綿密に計画を立てる必要があるな。

見ているよ、パイルドライバー。いや、ハジメ・サイトウ。私が受けた屈辱は万倍にして返してやるっ。

立ち上がり、その様を思い浮かべながら笑う。

「…マスター。食事の準備が出来ました。」

「：そうか、分かった。今行く。」
の、ノックぐらいしろっ。茶々丸。なに？しましたが、反応がありませんでしたと？
むう。少々妄想に耽すぎたか。

—side end—

—主人公side—

「おかえりなさい。ハジメ。」
家へ帰るとアリカがいる。今でもなかなか不思議な、こそばゆいものを感じてしまうな。

「ああ、ただいま。アリカ。」

そして、共にリビングに行き、共に食事をしながら、今日あった些細な事を話し合う。

ふむ、また腕を上げたな。

「それで、どうだったのじゃ？ナギの息子とやらは。」

「いや、あの馬鹿の息子とは思えんほど、優秀だったな。修行と言う題目はともかく、教師というものを必死に理解しようとしている。最初の授業であつたと言うのに、特に問題なく終えたしな。」

歓迎パーティのときに再認識したが、あの騒がしいクラスでよくできたものだ。

教えると言うのは、言うほど容易くは無い。そればかりか、ただでさえ子供なのだ。教師として見られない、可能性もあつただろう。実際、そういう風に見ていた奴もいた。

特に問題なく授業を終えたと言う事は、今日の授業の準備として、十分練習したのだろうな。

「ほう。よき魔法使いにはなれそうかの？」

悪戯心を含めたような口調でアリカが聞いてくる。ふう、全く変わらん奴だ。

「それとこれとは別問題だがな。ただ、自らの意思で自らの道を決められるならば、どう言われ様とも、それは奴の誇りになるだろう。」

下らん考えに左右されないで欲しいものだ。教師どもには干渉しないように、近右衛門には言っておいたがな。

「ふふ。」

「む、なんだ？」

「いやいや、どうなるか楽しみじやのう。」

アリカが笑みを浮かべながら、ワイングラスをこちらに差し出す。

「それは否定しないな。」

俺もワイングラスを差し出し、グラス同士が子気味よい音を奏でる。

たまには、こういう楽しみも悪くは無い。
将来の芽というのは、大事なのだからな。

第4話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。やはり、日常編は苦手です。もっと面白く出来たらいいのに。

最近は余り書く時間が取れなくなってきたので、なるべく多く投稿したいと思います。ではまた。

第5話

話し合いは土俵で決まる

相手をこちらに引きずりこむか引きずり込まれるかだ

第5話

～土俵～

麻帆良学園女子校舎の広場のある一角。

そこで、バレーで遊んでいる少女達、2－Aクラスの裕奈、まき絵、アキラ、亜子がいた。

「ねー。あのネギ君が、来てから5日経ったけど、みんなどう思う？」

頭でボールをトスしながら、まき絵が口を開く。

「ん…いいんじゃないかな。」

アキラが腕でボールをトスする。

「そだね。授業も分かりやすいし、結構頑張ってるでしょ。」

ボールが亜子の前に落ち、亜子がボールを持ちながら、

「でもウチら、来年は受験やし、子供先生じゃ頼りくない？」

不安を口にする亜子に、

「ハジメっちがついてるから、その辺は心配いらないでしょ。それに、私達大学までエスカレーターじゃん。」

裕奈が笑いながら答える。

「やっぱ、ネギ君には、相談できないよね。」

「ふふ。相談事なら私達が聞いてあげることになるかもねえ。」

「あはは。経験豊富なお姉さまとしてー？あっ。」

トスに失敗したまき絵。ボールを追っかけながら、

「もう。ちゃんとトスあげてよね。」

ボールを拾うと、

「誰が経験豊富なお姉さまですって…？…笑わせてくれるわね。」
そこにたたずむ影が言う。

ところ変わって職員室。

その一角では、ネギとハジメがたまっていた書類を片付けていた。

「先生と言うのは、こういうこともするんですね。」

「基本は生徒中心だがな。こういうことも学校の教師として、やらなくてはいけないことだ。」

他の先生も、各々受け持っている作業をこなしていると、

「うわあああああん、先生っ。」

「ネギ先生っ、サイトウ先生っ。」

職員室に飛び込んできた生徒が2名。亜子とまき絵である。

「どうした、お前ら。基本職員室では静かに、だ。」

ハジメが椅子を回転させて、亜子とまき絵に向く。

「ウチらが、広場で遊んでたらっ。」

「見てくださいよ。このキズッ。助けてくださいっ。」

その言葉に、ネギが立ち上がる。

「なっ、そんなひどい事を。誰がっ？」

「まあ、落ち着け。しずな先生っ。佐々木と和泉を保健室に連れて行ってもらえませんか。」

「あ、はい、わかりました。いきましょか。」

辺りを見回したハジメが、しずな先生にまき絵と亜子を頼む。

「さて、ではいくとするか。」

ハジメはネギを連れて職員室を出る。

—主人公side—

まあ、広場に来たわけだが。

「それっ。女子高生アターックっ。」

「あっ。」

高等部の生徒が、大河内にサーブをし、大河内がそれを受ける。

なんだ、これは。

思わず、こめかみを揉む。

「こらあっ。僕の生徒に怪我をさせたのはあなた達ですかっ。その年になって、していいことと悪い事の区別も出来ないんですかっ？」
いつの間にか、隣にいたネギが感情に任せて突撃していった。

「キヤーツ、可愛いいい。」

「え、ちょ、わああああ。」

集まっていた高等部の生徒達に押しつぶされるネギ。

少しは期待したが、やはり無理か。

そろそろ制裁しようと、一步踏み出そうとしたら、

「いい加減におよしなさいっ。おばサマ方っ。」

「な、なんだと、こらあっ。」

雪広と神楽坂か。

おいおい、ネギがあっちにいるからか知らんが、今のは失言だろ。

雪広。

まあ、現状生徒だけでどう収められるか見ると言うのもありか。

きっかけも、高等部が暇つぶしで来たと言う所か？

「ここはいつも私達が使っている場所なんですの。高等部の、”年増”の方々はお引取り願えます？」

火に油を注いでどうする雪広。

「な、なんですってえ。」

いかな、やはり無理か。

「ちよつとあんたは黙ってて。…先輩だからって、力で追い出すなんていささか大人気ないんじゃないんですか？」

お、神楽坂か。

「ふん、言うじゃない。神楽坂明日菜と雪広あやか。中等部の癖に、いろいろ出しゃばって有名らしけど…。」

そう言つて、笑みを浮かべる高等部の生徒。

「先輩の言う事には大人しく従う事ね。子供は子供らしく、隅で遊んでなさいな。」

何を得意がつているのか分かんが、奴らも阿呆なのか？

ため息が出そうになる。ネギの方は…、まだもみくちやにされているな。

このままでは、騒動になるか。生徒の自主性を重んじて、意味を履き違えたら意味が無い…か。

騒ぎの中心へ近づき、

「静まれっ、阿呆共がっ。」

少し威圧を出す。静まらせるにはちょうどいいのだが、効かない奴がちらほらいて困る。

「うわ、サイトウ先生っ。」

「え、この人がっ？」

女子高等部でも、名は知られてはいるのか。

「神楽坂、話し合いに持っていこうとしたことは評価するが、手を出したらいかんだろ。」

「あう。」

「それと、雪広。先ほどの失言は、多くを敵にするぞ。言葉を選べ。」

「あ、はい。」

話せば、分かるのが救いか。

高等部の生徒に向き直る。

「さて、お前らに言いたい事はいろいろあるが。」

副担任としても、指導員としても。

「とりあえず、反省文だ。高校生になって、中等部相手にこれは、よろしくない。」

「うう。はい。」

高等部生徒の隙間からネギの屍がのぞく。

「はあ。詳しい話はそちらの指導員とする。解散。」

うな垂れながら戻っていく、高等部の面々。

「サイトウ先生。悪いのはあいつらなんですよお。」

高等部の連中がいなくなると、神楽坂が抗議してきた。

「気持ち分かるが、神楽坂。相手の土俵に立った時点で負けだ。」

目を回しているネギを立たせながら、周囲にいる面々を確認し、話す。

「正直に言えば、お前らがどの程度できるかを試していた。結果は……まあ、残念だったが。」

「試すってどういうことですか？」

「いいか？これから、世の不条理と言うのはどんどん増えていくぞ？学校と言うのは社会の縮図に近いからな。先ほどのような不条理をどう回避するか、対応するかで、自らが出来る事が変わってくる。」

「でもちよつと、それはひどくないですか？」

神楽坂はむくれた顔で責めてくる。

「なに、甘やかすだけが教師の仕事ではない。あの程度の事、自分で解決するんだな。それに、神楽坂。雪広を遮って話し合いに持ち込もうとしたまではよかったな。そう言う心がけはしておいた方が

いい。それが、ああいうことの解決につながる。」

「あ、はい。」

「まあ、もしだ。今のお前らでは解決できない事が起こったならば、そのときは俺が解決してやる。それが、お前らを受け持っている、俺の仕事だからな。」

ネギもそろそろ覚醒してきた事だ。そろそろ戻るとするか。

「ではな。次の授業には遅れるなよ。」

—side end—

「やっぱり、ハジメっちは頼りになるねえ。」

次の授業が体育のため、更衣室で着替えている2-Aのメンバー。

「ですが、やはりネギ先生のようにまっすぐ駆けつけてもらいたいものです。」

雪広が両腕を上に掲げながら、思いを説いている。

「子供先生も頑張ったけどねえ。やっぱり、年の功と言うか、大人の風格やねえ。」

「ネギ君10歳だもんねえ。」

「やっぱり、頼りがいがあるほうが…いい。」

「ほらほら。今日は屋上でバレーよ。さっさといきましょう。」

着替えが終わり、屋上へ向かうと。

「あら、また会ったわね、あんた達。偶然ね。」

先ほど、アスナたちと揉めた高等部2-Dの面々が立っていた。

「なっ。あんたたち、まだ懲りてなかったの?」

「嫌ねえ、私たちは自習だからレクリエーションとして、バレエする事にしたの。今度は私達が先だから、お引取り願える？」

リーダー格の女子が、笑みを浮かべながら言い放つ。

その言葉にアスナは、

「いい加減にしなさいよ、あんた達っ。わざとでしょっ？だって、あんた達の校舎は隣の隣じゃないっ。」

「今度は言いがかり？本当に子供ね。」

挑発してくる女子に、思わず頭に血が上るアスナだったが、

（どう対応するかで自らが出来る事が変わる）

先ほどのハジメの言を思い出し、踏みとどまる。

「…、言いがかりはそっちでしょ？わざわざこんな事をするなんて、そっちの方こそ子供じゃない？」

「いやっ、素晴らしい笑みを浮かべて、高等部の面々に言い放つアスナ。『そうですわね。まさか、私達に構ってもらいたくて来ているのかしら？』だったら、かわいそうに思えてきましたわ。」

雪広も神楽坂の言葉から真意を汲み取り、それに続く。

「なっ、なんですってえ。」

高等部の面々が顔を怒りに染めるが、

「いや、全く持っつてその通りだぞ。神楽坂、雪広。わざわざこちらの校舎まで来たんだ。そう捉えてもおかしくない。」

声が聞こえた瞬間、一気に顔を青ざめる高等部。

「まったく、本当に大人気ないですよ。高等部の皆さん。」

屋上の出入り口から入ってくるのは、ハジメとネギ。

「な、なぜ、サイトウ先生がこちらに？」

「なに、体育の教員が急遽これなくなったのな。」

「それで、僕達が頼まれてきたんです。」

「さて。」

ハジメが高等部に近づく。

「ネギ、俺は少々用事が出来た。頼めるか？」

背後に修羅が見えるような笑顔で、ネギに問うハジメ。

「は、はいっ。大丈夫です。」

思わず後ずさるネギ。

「そうか、すまないな。では、貴様ら。なぜ、生徒指導室があるかをきっちり教えてやる。…こい。」

「「は、はいっ」」

整列し、いっせいに校舎へ戻る高等部。

その後続くハジメだが、校舎に戻る手前、立ち止まって振り返り、
「ああ、神楽坂に雪広。やれば出来るじゃないか、上出来だったぞ。」

そう言葉を残して校舎の中に入ってしまった。

「はい。神楽坂さんに雪広さんは、とても格好良かったですよ。」

満面の笑みで賛辞を送るネギ。

「え、見てたの？まあ、…ありがとうございます。」

「ああ。ネギ先生、ありがとうございます。その賛辞がこの私に送られると言うだけで、もう、私はっ。」

ハジメたちに見られていた事実、頬を赤く染めるアスナと、ネギの言葉に若干トリップしているあやか。

「さて、では皆さん。授業を始めましょう。」

「「はい。」」

……

…

その日、女子中等部の生徒指導室には、高等部の生徒が行列を作り、中等部の生徒達や先生からの視線に、羞恥に顔を赤く染める光景があった。

そして、部屋の中では恐ろしい笑顔のハジメのもとで、反省文を泣きながら書く生徒たちがいたとさ。

第5話（後書き）

結構書き直しながら思ったこと。この回って飛ばしてよかったかもしれない。

第6話

少年の道は険しい
障害は身近に

第6話

～課題～

ネギが就任してきてから一月が経とうとしていた。

「それで、どうかの？ネギ君は。」

学園長室にて、学園長がハジメにネギの様子を聞く。

「ふむ。どう、と問われれば、よくやっていると言うのが正しいな。あのクラスをよく纏めている。」

纏まっているのは、ハジメがストッパーとして機能しているからなのだが、ここではそれも考慮し、ハジメは述べる。

それを聞いた学園長は、

「ふおっふおっふお。やはり、ハジメ殿が補佐してくれてよかったわい。」

と嬉しそうに言う。

「じゃからの。そろそろ、課題を出そうと思うのじゃが。」

目を鋭くさせながら、学園長がハジメに目を合わせる。

「それは、魔法使いとしてか？教師としてか？」

ハジメも目を鋭くさせる。

「これが、課題じゃ。ハジメ殿、よろしく頼む。」

「それでは、俺が第三者として監督するでしょう。問題が生じたら

俺の権限で中止させる。良いか？」

学園長はハジメの提案に頷く。

ハジメが学園長から渡された紙を開き、内容を見た瞬間、ハジメはネギが苦勞することを察した。紙にはこう書かれていた。

《ネギ君へ 次の期末試験で、二一Aが最下位脱出できたら正式な先生にしてあげる。》

こうして、ネギの課題が決まった。

—ネギside—

授業終了の鐘が鳴る。

「では、今日はここまでです。みなさん少しずつですが、小テストの平均があがってきています。やれば出来るのですから、復習予習頑張りましょう。」

ふう、終わったあ。

そういえば、

「なんか、最近どのクラスもびりびりしていますが、何かあるんですか？」

クラスの人に問うと、近くにいた椎名さんが、

「ああ、来週の月曜から期末テストがあるからだよね。」

「へえ。そうですか、学期末テストがあるんですかあ。」

そっかあ。それは、びりびりするよね。

「って、ウチのクラスに、そんな雰囲気全然ありませんでしたけどっ?」

すごく和やかでしたよっ?

「あはは。ウチの学校エスカレーター式だから余り関係ないんだ。」

「それに、二一Aはズーっと学年最下位だから、大丈夫大丈夫。」

明石さんと椎名さんが、すごい笑顔で言っていますけど、

「いやいや、だめでしょっ。」

そう言っても、からからと笑って流されてしまいました。

トロフィーもあるそうですが、無理そうですね…。

サイトウ先生と教室を出て、職員室に向かう最中。

「ネギ。」

サイトウ先生から声をかけられ、何かを手渡されました。これは、紙？

「サイトウ先生。これは？」

「学園長からだ、ネギへの課題だそうだ。内容は見れば分かると。課題っ。そうか、修行だもんね。どんな課題がだされるんだろう？ 恐る恐る折りたたまれた紙を開く。その内容を見て愕然とする。

：2－Aを学年最下位から脱出させる…。

思わず、サイトウ先生のほうを見る。

「これは貴様の課題だ。どう取り組むか、見させてもらおうと思う。協力はするぞ？」

ほっ。協力はしてもらえるみたいだ。

むむ。どうしようかな。英語の居残りだけでなく、全教科でも居残りさせたほうがいいのかな？ でも、あまりやるとモチベーションも下がっちゃうだろうし。

「と、とりあえず、今日はどうやってこの課題に取り組むかを考えたいと思いますっ。」

「あまり、時間は無い。勉強会を開くならば、俺を頼っていいから

な。」

「そのときは、よろしく願います。」

やっぱり、みんなが学期末テストに、意欲が出るようにしないとだめだね。

帰りのHRになった。

「では、後はそうですね。そろそろ学期末テストが迫ってきました。僕は2-Aが万年学年最下位と言う、汚名を返上したいと思っています。皆さんはやればできるのですから、頑張りましょう。」
これで、勉強しようって気になってくれるかな？

「素晴らしい提案ですわ、ネギ先生。」

あ、雪広さんが応えてくれた。

「はいはい、提案します。」

お、椎名さんがなんか考えてくれたみたいだ。

「はい、何でしょうか？椎名さん。」

「英単語野球拳がいいと思います。」

えっ？

英単語「野球拳」？

スタンおじいちゃんに聞いたことがあったような…。

「くくく、椎名。俺の前でよくそんな提案が出来たな。」

「あー。えへへ、冗談ですよ？」

椎名さんが頭を掻きながら、席に座る。

「はあ、とりあえずはだ。各々自らの出来ない範囲、というものを心得ていると思う。今日は英語を各自自習。友人に教えてもらっても、俺達に聞いてもいい。最後の15分で小テストを行う。で、いいな？ネギ。」

「あ、はい。」

テキバキと指示するサイトウ先生は、やっぱすごいな。

自習が終わり、小テストを行って採点したけれど、

「やっぱ、すごいばらつきですね。」

苦笑いしてしまう。

「上位の連中はほぼ完璧。下位の連中は本当に下位だからな。だが、英語は平均が上がってきているな。これは、ネギの成果だろう。」

「はい。それは素直に嬉しいんですね。」

他の科目は、多分もっと下なんだろうな。他の科目も勉強できるようにしないとなあ。

明日から、どう勉強会を開いていくかをサイトウ先生と考えながら、今日と言う日も過ぎていった。

—side end—

「今の話は本当でござるか？」

細目と忍者口調が、特徴の楓が聞き返す。

「本当みたいだよ？なんでも初等部からやり直しさせるんだって。」
まき絵がそれに答える。

「それは、困ったでござるなあ。」

「嫌アルよ。今更初等部でランドセル背負うなんてネ。」
古菲も楓に同意する。

ここは、寮の大浴場である。そこで、学園の噂について話し合っている。

それは、今期学期末テストで最下位であったクラスは解散という、荒唐無稽なものであったが、

「それは、やばいわね。」

信じる者がいるのが、この麻帆良学園。

「だから、ネギ君もサイトウ先生も勉強会しようって話をしたのかな？ネギ君も若干焦っていたようだし。」

「確かに、初めて受け持ったクラスが解散だなんていやよね。」
まき絵の考えに、アスナが同意する。

「ここは、やはりアレを探すしかないかもです。」

夕映が不思議な飲み物を飲みながら、呟く。

「夕映っ？」

「なにか、いい方法があるのっ？」

「図書館島は知っていますね？我々図書館探検部の活動の場なのですが。：実はその深部に、読めば頭が良くなる魔法の本があるらしいのです。」

「あはは、なんか胡散臭い話だねえ。」

まき絵が、夕映の話にもっともな意見を言う。

「はい。恐らくよく出来た参考書の類でしょうが、あれば、強力な武器になると思います。探してそんは無いかと。」

夕映が噂から信憑性の高そうな推測を述べる。

「頑張っているネギ君にも、サイトウ先生にも苦労かけたくないしね。探すのもありかな？」

「そうね。あのガキも頑張っているしね。サイトウ先生にも迷惑かけられないし、行きましようかつ。」

「そうでござるな。」

「賛成アル。」

夕映の話に同意する面々。

そんな面々を見ながら、

「あははは。父上、大変な事になりそうですよ。」

「あははは。ネギ君も大変やなあ。」

「止めなくてもよろしいのですか？このちゃん、メアちゃん。」

「「だって、そっちの方が面白そう（やん・じゃん）。」「」

刹那は、（なんかハジメ様に影響されているな）と一人思った。

こうして、噂話を信じた成績が芳しくない者たちは、図書館島へ魔法の本を探しに、探検することとなった。

第6話（後書き）

長くなりそうなので、分けました。

第7話

少女たちは宝を目指し探検する
しかし宝には門番が付き物である

第7話

～探検～

夜。麻帆良学園の図書館島の入り口まで走る、一つの影があった。そして、その影が入り口につくと他にもいくつか集まっていた。

2－Aの成績底辺組のアスナ、楓、古菲、まき絵、夕映の5人と、付き添いできた、のどかとハルナである。

最後にきたアスナが一人なのを見て、

「あれ？アスナ、木乃香たちは？」

「あー木乃香たちにもお願いしたんだけどねえ。」

：

「うーん。行かん方がいいと思うえ？サイトウ先生に叱られてまうで？」

「そうだね。父上はそこらへんは厳格だから、理由も一緒に聞いたら、大変だよ。」

「サイトウ先生は不正などは嫌いですよ？」

アスナは、ルームメイトからの全否定に思わず後ずさる。恐らく最後の、刹那の言葉が一番効いたと思われる。

「で、でも。クラス解散されちゃうのかもしれないんだよ？私、足引っ張るのはいやだから、一人でも行く。じゃねっ。」

行く用意はしていたらしく、そのまま部屋から飛び出るアスナ。

「ああ、行ってもうた。なんでそんな話信じられるのやろ？」
「さあ？」

そんなアスナを見送る木乃香たち。

：

今思えば、逃げるように来たことに気づき、若干気まずそうに、

「まあ、こなかったのよ。」

とアスナが言う。

「こない者はしかたないのです。では、行きましょう。」

図書館島探検部の部員である夕映が先頭に立ち、入っていく。皆もそれに続く。

図書館島地下3階。

「中学生が入っているのは、ここまでです。地下では、罠が仕掛けられているので、気をつけてくださいね。」

夕映が注意事項を述べていく。そして、地上にいるのどかとハルナに、3階までたどりついた事を報告する。

「ねえ、夕映ちゃん。どのくらい歩くの？」

まき絵の質問に、夕映は徐に地図を広げ、

「今私たちがいるのは、ここです。目的の本があるとされているのは、地下11階のこの地下道を渡った、この場所ですね。」

「ふええ。遠いねえ。」

「往復でおよそ4時間かかると思われます。明日の朝までには戻れる計算ですから、明日の授業は大丈夫です。」

その言葉に、皆もやる気を見せる。

「では、出発です。」

「「おーっ。」」

道中の罨を持ち前の運動能力と経験で次々と突破していく面々。
今は、のどかたちから教えられた休憩ポイントで、休憩している最中である。

「この調子なら思ったよりも早く着きそうです。」

お弁当を食べ終えた夕映が、時間を確認しながら述べる。

「そっかー。よーし、もう一息だっ。」

探検を再会する一同。

そして、ついに目的地直前まで、たどりついた一同。

「ふふ…。ここまでこれたのもバカレンジャーの皆さんの運動能力の賜物ですね。さあ、この上に目的の本がありますよ。」

隙間から光が洩れている石を、押し上げて外す。

そこには、物語に出てきそうな石でできた祭壇が造られていた。

2体の巨大な騎士を模った石像に、挟まれている場所には、本が安置されていた。

「あ、あれはっ。あれが、魔法の本？」

「分からないですが、その可能性は高そうです。」

それを聞いた瞬間、一斉に本に向かって走り出す。

「やったー。」「これで最下位脱出よ。」「一番乗りアルー。」

しかし、安置されていた場所との間にある橋を渡る途中、

橋が割れた。

「「えっ？」」

すぐ下の石床に落ちる一同。

その石床には、何かが刻まれていた。

「え？これって…。」

「ツ：ツイスターゲーム？」

石床には、楕円がいくつも刻まれており、楕円にはそれぞれひらがなが刻まれていた。

石像の目が妖しく光る。

「フオフオフオ…。」

そして、なんと2体の石像が動き出し、

「この本が欲しくば…、わしの質問に答えるのじゃーフオフオフオ。」

どこかで聴いたことのあるような口調で、喋ったのだった。

「ななな、石像が動いたっ？」

その現象に驚く一同。

石像は気にせずに続け、

「では第一問。《DIFFICULT》日本語訳は？」

一同は質問に対して、何とかツイスターゲームで答えていくが、

「い、痛いです…。」

「死ぬ、死んじゃう…。」

それは、形容しがたいほどにひどい状態であった。

「フオフオフオ。それでは、最後の質問じゃ。《DISH》の日本

語訳は？」

「やった、最後だって。」

「…分かった、おさねっ。」

お・さ・らと各々の体を駆使して、必死に押さえようとするが、
『お』『さ』と押さえ、次を押さえたが、それは『ら』ではなく、

『る』

であった。

「おさる？」

「ハズレじゃな。」

振り下ろされる大槌。

床もろとも破壊され、はるか下に落ちていく一同。

「「いやああああ。」」

果たして、学期末テストはどうなるのであろうか。

—主人公side—

「なに？ 図書館島で行方不明だ？」

朝職員室に來ると、宮崎と早乙女があわてた様子で走っていたので、何かあったのかと思い聞いてみると、

「クラスを解散…か。全く、噂の真偽くらい確かめたらどうだ？ そんな話、まかり通る分けなからう。」

「あう、すいません。」

縮こまる宮崎。

「いや、お前らを責めても仕方ないな。…責めるべきは今行方不明の奴らか。」

さて、魔法の本などに現を抜かして、自らすべき事もしない、馬鹿どもをどうするかだな。

「あれ、どうかしたんですか？ サイトウ先生。それに、宮崎さんに早乙女さんも。」

これからどうするか考えていると、ネギが來た。

「大変なんですよっ、ネギ先生。夕映やアスナたちがっ。」

早乙女が事の成り行きをネギに説明する。

「ええっ？綾瀬さんたちが行方不明っ？それよりも、クラス解散って…。あれは、僕が先生になれるかの最終課題ですよ？」

「先生の課題なんですか？」

ネギが狼狽して、課題のことを暴露しているが、

「まあ落ち着け、ネギ。宮崎、早乙女。この件は俺達がなんとかする。お前らも授業があるだろ？早く教室に戻れ。ネギの課題の件は内密にな。」

「あ、えっと。はい、わかりましたあ。」

早乙女が宮崎を連れ、職員室を出る。

：迂闊だったな。まさか、俺が知らないうちにそんな噂が出ていたとは。：いや、これは近右衛門の仕業か？

「少し学園長室に行ってくる。」

「あ、僕も行きます。」

「ネギはここで待っている。」

一人、学園長室に入る。先程メアに聞いたところ、昨日の夜に急激に噂が広まったらしい。ということとは、

「さて。現状起きている事を全て述べてもらおうか？」

殺気をこめて近右衛門に問い詰める。

「ふおっ？な、なんのことじゃか、わからん」

気で形成した刃で、近右衛門の一つ隣の空間を切り裂く。遅れて、崩れ落ちる机。

「ま、待つんじゃないっ。ハジメ殿っ。言うっ。言うから殺さんというっ。」

最初からそうしろ。時間が惜しい。

「いや、実はの、成績が芳しくない者が居るじゃろ？本当はネギ君にそのものたちを連れて、図書館島に連れて行って欲しかったんじやがの、何かの手違いで噂が先行してしまつての。なまじ、実力がある者ばかりでの。目的の場所へたどりついてしまったのじゃつ。今はアルビレオの監視下においておるつ。」

早口で必死に説明する近右衛門。アルビレオがいるならば、怪我などの心配は無いか。

ならば、さっさと助けに行くか。クラスの連中も心配しているだろうしな。

「今は奴らの救出が先だ。このことは、後でゆっくり話し合おうか、：近右衛門。」

殺気を全開で近右衛門に向ける。ガラスに罅が入ったが、別に良からう。

そして、部屋を出る。

「あつ。サイトウ先生、どうなりましたか？」

ネギに事の説明を行う。

「そんなつ。魔法の本なんかに頼るだなんて…。」

ネギが少々ショックを受けているようだ。

「俺はこれから、図書館島にいる馬鹿どもを、説教ついでに助けにくる。ネギはクラスを頼んだ。」

「待ってくださいっ。僕が、僕が行きますっ。」

「なぜ？行っておくが、図書館島の地下は、意味が分からないほど罨で埋め尽くされているぞ？」

暗にお前には危なすぎると言っただが、

「大丈夫ですっ。それに、自分で出来る事もしないで、そんなものに頼るみんなに、一言言いたいです。それに、頼らせてしまった自

分が嫌なんです。」

ネギがまっすぐこちらを見る。：いつの間にか、教師らしくなったものだな。

「ふむ。では、学園長から地図をもらっていけ。安全にいけるルートがあるはずだ。話によると、奴らは比較的安全なところにいるらしいしな。」

「はいっ。」

そして、学園長室に入っていくネギ。

さて、俺はクラスにいる奴らの面倒を見ることにするか。

第7話（後書き）

最終課題、まだ終わりませんでした。

第8話

努力は素晴らしい
しかし方向を間違えてはいけない

第8話

～努力～

ーネギsideー

学園長から地図を受け取り、図書館島まで走っていく中、僕は魔法について考えていた。

僕がこんなに早く走れるのは魔法のおかげだ。サイトウ先生と同じ量とまでは行かないけど、それだけの仕事をこなせるのも魔法のおかげだ。

それに、誰かを助けることも出来る。

だけど、今回の事は何か間違っていると、僕はそう感じてしまう。自ら探し求めたものを、どう利用しようとも、それはその人の自由のはずだ。

فقط。

こんな努力の仕方は間違ってる。クラスのみんなはそりゃ、成績がいい人ばかりじゃない。でも、決して努力していかないわけじゃない。分からないところがあつたら、僕やサイトウ先生に聞いてくれる人もいる。そんな人たちがいるのにつ、いくら、クラスが解散するだなんていわれてもっ、そんな人たちの努力を笑うような行為を、

僕は許したくないっ。

図書館島に着く。

あつちに、エレベーターがあるのか。地図を見ながら、奥に行く。

—side end—

その頃のバカレンジャーたちはというと、

「一生ここにいてもいいです。」

「至れり尽くせりだもんねえ。」

バカンスを楽しんでいた。

あれから床から落ちた一回は、湖があり、光もある不思議な空間に落ち、幸いたいた怪我もなかった。

その空間を一通り探検した夕映が下した判断は、

「ここは恐らく幻の地底図書室かと思われます。本好きの楽園とすらいわれています。」

目を輝かせながら、そう述べたのだった。

そんな夕映に不安を覚える者もいたが、実際に生活すると、食料もあり、水浴びも出来るのでかなり快適だったようだ。

今では、ずっとこのままでいいとすら思っているものもいた。

とそのとき、

「やっと思つきましたよ、皆さんっ。」

そこに、ネギが現れた。

「え？ネギ君だっ。」

まき絵が反応する。

「え？なんでこんなところにいるの？」

アスナが疑問を投げかける。

「それはこっちの台詞ですっ。聞きましたよ、魔法の本を探しに来たそうですね。」

ネギが少し怒りを表しながら、アスナたちに近づく。

「あ、いや、それは。最下位だったら、クラス解散だなんて聞いたんだもの。しょうがないじゃない。」

アスナが弁解する。

「ハイッ、それは聞きました。ですがっ、僕が言いたいのはっ、なぜっ、自分たちで勉強せずにそんな話に頼ったかですっ。」

ネギは声を荒げながら、アスナたちに問う。

「いや、拙者たちがどんなに頑張っても。」

「たかが、知れてるアルネ。」

楓と古菲が弱音を吐くが、

「それで、魔法の本を頼る？そんな考えがあるから、あなた達は一向に成績が良くならないんですよっ。分からないところがあれば聞けばいい。1点でも伸びるならば、勉強すればいいっ。実際に神楽坂さんたちは、僕の英語の授業の小テストで、それは低いですが、点数が良くなってきたじゃないですかっ。」

「まあ、それは、そうだけだね。」

「興味が無いことに、あまり関心が持てないのです。」

まき絵と夕映が、反論する。

それに対しネギは、

「みんながみんな、勉強が好きではない事ぐらい分かっていますっ。ですが、それでもちゃんとやっている人もいますっ。そう言う

人たちに対して恥ずかしいとは思わないのですかっ？」

「「：。」」

思うところがあつたのか、静まるバカレンジャーの面々。

「あなた達も、勉強すれば出来るんですから。一緒に頑張りましたよ。今から勉強すれば、学期末テストでもいい点が取れますよ。」
ネギはアスナたちに微笑みかける。

「分かったわよ、頑張ってみるわよ。」

「確かに、他の人たちに悪かったネ。」

「そうだねえ。やっぱ自分の力で頑張らないとねえ。」

「拙者、やる気が出てきたでござる。」

「頑張るです。」

ネギの言葉に、各々が頷き、

「はい、では帰りましょう。僕も言い過ぎましたね。すいませんでした。」

「ああ、後ですね。」

先頭を歩き始めるネギだったが、立ち止まると、

「帰ったらちゃんと、サイトウ先生と新田先生の説教が待っていますからね。」

「「えっ。」」

ハジメを髭髯とさせる、怖い笑みを浮かべ、それを見たアスナたちは顔を引きつらせるのであった。

ネギと共に帰ってきた、アスナたちを待っていたのは、怖い笑みを浮かべるハジメであった。

「「ご迷惑をかけてすいませんでしたっ。」」

「自覚するのはいいことだな。…さて、では生徒指導室へ行くでしょうか。」

「「いやああああああ。」」

1時間後、そこには燃え尽きたバカレンジャーがいたという。

—ネギside—

なぜか、僕の課題がばれていました。なぜでしょう？

それよりも、皆さんがやる気になってくれています。1週間もありませんが、それでも、やれるだけの事はやりたいと思います。

「というわけで、これから勉強会を始めたいと思います。これは5教科分のプリントです。これは最初に自分だけでやってみてくださいね。分からなかったところがあれば、僕やサイトウ先生、または友人に聞いてくださいねー。」

神楽坂さんたちも、考えを改めたのかちゃんと勉強してくれています。やれば、できるんですよ。だから、頑張ってください。

「ご苦労だったな、ネギ。」

「あ、サイトウ先生。いえ、少し感情的になってしまいましたし、それはちょっといただけないなと思います。」

思い返すと、恥ずかしい事をいつてしまった気がする。

「なに、それはお前が、それだけ教師と言う仕事に真剣だからだ。そうやって一歩ずつ、自分と見つめあいながら成長するといい。」
うう、サイトウ先生から、大人の風格というのでしょうか。それがすごい感じられます。僕もあなれるのでしょうか。

「ネギ君っ。ここわからないんだけどお。」

「あ、はい。えっと、これはですね、ここの公式と公式がありますよね？この2つを順に使うと…。」

そうやって、僕とサイトウ先生の勉強会は進んでいきました。

これからというものの、休み時間でも、聞きに来てくれる人が増えて、本当に嬉しい限りです。

やはり、サイトウ先生のほうが聞きにくる人が多いですが…。

それでも着実にみなさんに実力がついてきていると実感しました。最後に小テストを行っているのですが、神楽坂さんたちが学年平均のところまで来たんです。嬉しかったですよ。

そして、とうとう学期末テスト当日になりました。

不安でそわそわしている僕に、サイトウ先生が、

「ここまで来たのなら、後は奴らを信じてドンと構えている。お前が信じなくてどうするんだ。」

その言葉に、また一つ教わりました。そうですよね、僕が信じなきや。

テストが終わった後は、皆さんお疲れのようでしたが、それでも、なぜか輝いて見えました。皆さんが頑張ったからだと思います。

…
…

今日はクラス成績発表の日です。

「少し落ち着け、ネギ。」

サイトウ先生に頭を抑えられながら、順位表示するモニタに集中します。

アレだけ頑張ったんだから、最下位じゃないはずっ。

『えー。2年生の学年平均点は74.8点です。…では、第2学年のクラス成績を良い順に発表しましょう。』
司会の女子生徒が、順位を読み上げるのか。

「第1位―2年えー…え？」
少しざわついている。

「なんとっ、第1位は2年A組だっ。平均点は82.1点っ。これはあっ、大番狂わせだあっ。」

周囲が騒がしくなる。

えっ？1位？本当に？

「やったーっ。ネギ先生っ、サイトウ先生っ。1位だよっ、1位っ。」

佐々木さんが僕に抱きついてきましたが、余りの事に僕の脳はショートしているみたいです。

「ほう。いいところまで行くとは思ったが…まさか、1位とはな。よかったじゃないか、ネギ。」

サイトウ先生の言葉に、実感が出てきて、少し涙が出てきました。

「はいっ。みなさん、すごいですよっ。よく頑張りましたねっ。」
本当にうれしい事ですっ。

かなり騒いってしまったので、サイトウ先生の櫂が飛びましたが、今日はとても良い日でした。

後日、包帯塗れの学園長を目撃しましたが、
事故にでもあったのでしょうか？

第8話（後書き）

なんとかネギの最終課題終了しました。いかがでしたでしょうか。

ご都合主義は否めません。

次は桜通りの吸血鬼かな。

更新頑張りたいと思います。ではまた。

第9話

気づかない者がいれば気づく者もいる
どちらがいいのであろうか

第9話

～異常性～

3学期終了式

「フオフオフオ。それでは、皆にも紹介しておこう。来年度から、正式に英語教員として赴任する事になった、ネギ・スプリングフィールド先生じゃ。」

ネギは正式に教員となり、4月からは3－Aクラス担任となることになった。

一千雨side－

な、なにいいいいいつ？

おいおい、マジか。

教室に戻っても、依然として疑問の解決法は存在しない。

いや、確かに優秀だ。高畑先生よりも分かりやすいし、ネイティブの発音との差も良く分かる。

教師としても頑張っている。3学期末のテストが良かったのは、あの子供先生とサイトウ先生のおかげだろう。

けどな、けどだ。

10歳のガキだぞっ？労働基準法違反だろっ？
なんでサイトウ先生は、そんな冷静に後ろから見守っているんだよ
っ？

誰か突っ込めよおおおおっ。

—side end—

2—Aは、ネギが統投して担任となること、
学年1位に贈られるトロフィーをかざしながら、歓喜の声を上げた
りして、騒がしくなっている。
そんなクラスの面々をハジメは見ていた。

—主人公side—

今日が終了式だからだろう。
幾分かこのクラスもざわついている。ネギも正式に教員になれたか
らか、浮ついているな。
まあ、今日ぐらいは多めに見るか。
鳴滝姉妹がパーティをやろうと提案しているのを見ながら、ふと気
づく。

あれは、長谷川か。

「長谷川、気分でも悪いのか？」

「あ、えっと。はい。ちょっと気分悪いので帰宅して構いませんか
？」

顔を引きつらせている。

なんか、妙だな。

「それなら、仕方ないな。一人で大丈夫か？」

「はい、大丈夫です。では、さようなら。」

ふむ。

（メア。長谷川に着いていってもらえるか？何か様子がおかしかった。）

（千雨ちゃん？いつもあんな感じだよ？）

（いや、なにか鬱憤でもたまってそうだったのでな。それにあれば仮病だろう。）

（ふうん。それじゃ、パーティに出席させるって事でいいの？）

（方法は任せる。）

（了解。）

メアとの念話を終える。

俺にも、入っている領域とそうでない領域があるからな。メアに任せの方がよからう。

後で話を聞くとするか。

—side end—

—千雨side—

サイトウ先生に対して少しぶっきら棒だったかもしれないな。

だけど、前から思っていたけど、ウチのクラスおかしいだろ。

留学生も多いし、見た目小学生もいるしよ。

そして、あのロボっ。どっからどうみてもロボだろっ。なんで誰も突っ込まないんだよっ。

しかも、いくらまともっていつても10歳の子供教師っ。存在がまともじゃねえっ。

歩き方が少し激しくなるのを、自覚しながら歩いていると、

「千雨ちゃん。」

名前を呼ばれたので振り返ると、

「あれ？ サイトウさん。」

「メアでいいって言ってるのに。大丈夫？ 父上じゃなかった、サイトウ先生が心配してたよ？」

ああ、ちよつと対応まづったかな。

「いや、大丈夫だから。ありがとね、サイトウさん。」

そして、足早にそこから去る。

そして、自分の部屋に、自分の城へ入る。ここが私が私でいられる場所だつ。

メガネを外し、衣服を脱ぎ去り、コスチュームを着る。

ネットアイドルとしての裏の顔を持つこの私が、

表の世界では騒がず目立たず、裏を牛耳ってトップを取る。

それが私のスタンス。世の男どもはこの私の前にひざまずくのよつ。

「へ、千雨ちゃん普段から可愛いと思ってたけど、こうしてみると一段と可愛いね。」

へっ？

ブリキにでも、なったように首を後ろへ回す。

そこには、いつもそのきれいな金髪、羨ましいなおいつ。と
思っているサイトウがいた。

「サイトウ：なぜここに？」

「いや、心配だからずっとついてきてたのに、千雨ちゃん無視するんだもん。」

いや、さっきの会話で普通あきらめるだろっ？

サイトウの肩に手を置き、顔を近づける。

「黙っててくれるか？」

「メアって呼ぶのと、パーティに来たら考えてあげる。」

すごい満面な笑みだな。

将来どれだけの男を誑かすんだ？

「分かったよ、いくよ。少し待ってろ。メア。」

：ああ、メアって呼びやすいな。

着替えて、メアと共にパーティ会場へ行く。

パーティ会場に近づくと、サイトウ先生やクラスの面々が見えてきた。

「やつほー。千雨ちゃん連れてきたよお。」

「って、おいつ。」

メアが突然、私の手を掴んで走り始めた。私は、そんなに早くは走れないんだよっ。

「ご苦労だったな、サイトウ。」

サイトウ先生が近づいてくる。この人はあんまり嫌いになれないんだよな。

「いえいえ、やっぱり生徒が心配なんですよ？ サイトウ先生は。」

含み笑いをしながらメアは、近衛たちのところへ合流しにいった。仲いいよな。

メアのほうを眺めていると、

「まあ、前から言おうとは思っていたが、このクラスはつらいか？」
サイトウ先生の言葉に、思わず顔を向ける。

「長谷川は前から、確固たる自分というものを、持っていたみたいだからな。余り親しくもしていなかっただろ？個性も強いし、あの馬鹿どもは馴れ馴れしいしな。」

「えっと。」

やべえ、何もいえない。

「この1ヶ月見てきたわけだが、メアはどうだった？不快だったか？」

これまでの付き合いや、さっきのやり取りを思い出す。

「まあ、多少は…強引などきがあるけど。なんか…嬉しかったと思います。」

サイトウ先生は、”：そうか。あいつにしては上出来だな。”と呟いて、

「こんな事気軽に言われても困ると思うが、あいつらもなかなか重いものを背負って生きている。長谷川も自分だけがつらい、何も出来ないと思い込んでないで、少しは外を見てみてはどうだ？今日の空と明日の空は違う。それに気づくのは、大抵全てが終えてから、という事ばかりだからな。」

サイトウ先生が空を見上げたのに釣られて、私も空を見る。

空ってこんなに青かったっけ…。

「千雨ちゃん。こっちにきなよ。このジュースおいしいよ。」
：そうだな。今日、今日ぐらいは、あいつらと馬鹿騒ぎしてもいいかもな。

「えっと、ありがとうございました。：私の分あるのかよっ。」
サイトウ先生に礼を言って、メア達がいるところへ向かって、走る。

なんか、こういうのもありだな。

—side end—

—主人公side—

メアたちと合流した長谷川を見て、とりあえず安堵する。恐らく、長谷川はこの学園の異常性に少し気づきやすいのだろう。それが、長谷川の負担になっている。いくらネギが優秀といっても未熟な上に子供だ。解決にはならんだろう。こんなときに自分の力は全く役に立たんことに、腹が立つ。

やはり、長谷川の事はメアたちに任せるか。

メアはアリカに似て、人を惹きつける何かがあるからな。良い関係を築ければ、長谷川もそれほど辛くはなくなるだろう。

木乃香も考えるという事がどういふことを知っているし、刹那も孤独の恐怖を知っている。

さすがに、こればかりは、俺にはどうすることも出来なさそうだな。

さて、俺もパーティを楽しむとするか。

第9話（後書き）

この話は難しかったです。千雨に余り干渉するのはハジメのすることでは無い。だけど、放っておくということもしないだろう。そんなわけで、こういう話になりました。やはり、難しいですね。

文才が欲しいと切に願う作者でした。ではまた。

第10話

騎士の休息

愛する者は常に隣に

第10話

～春休み～

春休みとなり、メア、木乃香、刹那を連れて、京都へ行く事となったハジメたち一行。

もちろんハジメにとって、ただの旅行、帰郷の類ではなく。

近衛家家長近衛詠春と、名目上、麻帆良から来た教師としてハジメ・サイトウが、近衛家の客間で対面している。

「そうですか。…修学旅行の行き先は、…ここ京都になりますか。」

詠春がそう呟き、湯飲みを傾けて茶を飲む。

「ああ。ネギに古き良き日本を知って欲しいそうだ。」

鹿威しの音が遠く響く。

詠春が湯飲みを戻し、

「ふう。目的は、西と東の友好。そして、真実は西と東に残っている、所属を問わない過激派といったところですか？」

ハジメを見ながら推測を述べる。

「妥当だな。近右衛門も妥協点を探っていたのだろう。」

「それが、今回の修学旅行ですか。わざと、東は西を軽く見ていると錯覚させ、憤慨した過激派と、隙を狙っている過激派を呼び寄せる。」

「シナリオはそうになるな。」

「ハジメがついているなら、心配は無いのでしょうかね。」
詠春が笑みを浮かべながら言う。

「さて、な。敵対勢力は必要だが、過激な者は双方共に必要というだけだな。」

「固い話もここまでにしましょう。久々に京都を回ってきてはどうですか？木乃香たちは、もう行ってみたいたいですか。」

「そうさせてもらおう。京都の街は久しいのでな。」

—アリカside—
相変わらず良い眺めじゃ。

庭を眺めながらそう思う。数年前まではここに住んで居ったというの。やはり、麻帆良は騒がしいからの。

麻帆良も好きじゃが、やはり、京都の街並みやこの庭のような景観の方が妾は好きじゃな。

古都の方が妾に会っておるのじゃろう。

「待たせたな、アリカ。…行くとするか。」

「うむ。」

そう言っ、ハジメの腕に体を寄せる。ふふ、いつの間にかこの位置が定位置になっておるわ。

「どうかしたか？」

「いや、なんでもない。今日はどこを回るのじゃ？」

「ふむ、そうだな。アリカに似合う着物でもまた買うか。アリカによく似合っていたからな。」

その言葉に思わず笑みを浮かべてしまうほどに、やはり妾はハジメが好きで、愛しておるのじゃな。

「では、しっかり見繕ってほしいのじゃ。ハジメが選んでくれると嬉しいからの。」

「…そうか。」

ふふふ。照れておる照れておる。

ハジメの反応を楽しみながら、共に京都の街へ繰り出したのじゃった。

「のう。ハジメあの甘味屋は、数年前はなかったのじゃ。入るぞ。久しぶりの京都の街は、懐かしい場所や、新たな発見があって、実に楽しいものじゃ。」

「さつきは数年前にあった甘味屋に入っていなかったか？」
む、細かい奴じゃ。

「それとこれとは別じゃ。行くのじゃ。」

ふむ、和菓子のお店でありながら、和洋折衷の新商品も出しておる。なかなかやりおる。

「この白玉ソフト餡蜜とじゃの、抹茶を頼む。」

「まだ、食べるのか？」

団子と抹茶を食べ終えたハジメ。

「別腹というじゃろ？」

「…もう何も言わん。」

むう。何だというのじゃ。ん？この白玉が欲しいのかの？

「ほれ、あーんじゃ。」

白玉を差し出す。

「…。」

「どうしたのじゃ？」

首をかしげそう聞くと、ハジメはやっと口に入れたのじゃった。

それから、新しく出来た雑貨店を見ながら歩いておった。
ときたま、「新婚さんですか？」と聞かれたりして、嬉しくなった
のは秘密じゃ。

そして、いつもお世話になっておる呉服屋に足を向ける。

店内に入ると、顔見知りの店主がちょうどおった。

「おや、これはお久しぶりですね。サイトウ様。今日はどのような
ものをお探しで？」

「なに、久しぶりにこちらに来たのでな。妻に買おうと思ってな。」
ハジメが話を進めるので、妾は適当に商品を見ていく。この時間も、
なかなか良いもののなじゃ。

…

…

「アリカ。」

「選り終わったのかの？」

「ああ、これはどうだろうか？」

ハジメが選んだのは、白地の生地を貴重とし、桃色の花を彩った、
なんとも可愛らしいものじゃった。

「春だしな。それに、たまにはこういうものを着た、アリカが見た
くてな。」

いつもは藤色などが多かったしのう。

「ふふ、有難くもうとするかの。」

「お気に召したようで何よりです。お姫様。」

ハジメと顔を見合わせ、笑みを浮かべる。

買い物を終え、最早定番となった、夕日の見える丘。

「すまん。最近忙しくて、なかなかこういうことも出来なかったからな。」

「いいのじゃ。ハジメは妾と一緒にいるだけで休まるのじゃろ？」

「くく、覚えていたのか？ そうだな。アリカたちと一緒にいるだけで、俺は休める。安心するのだな、共に歩んでくれる者がいるということに。」

ハジメが妾を抱き寄せ、髪をなでる。

ふふ、くすぐったいのう。

静かに唇を合わせた後、近衛の家に戻る。

安心せい、ハジメ。妾は常にお主と一緒にじゃ。それは幸せと共にの。

— s i d e e n d —

その光景をこっそり見ていた3つの影。

「うああ。ラブラブやなく。ハジメのおじさんとアリカさん。」

「道中は、新婚と間違われていましたね。」

「もうね、見た目が若いからね。2人とも。」

こっそりといっても、恐ろしく離れた場所でハジメたちを見ていた木乃香と刹那、メアの3人組。

甘味屋巡りをしていたら、いちゃついているカップルがいて、よく見てみたらそれはハジメたち。

思わずあとをつけてしまった3人組は、最後のキスシーンまで見てしまい、思春期の彼女達には少々刺激が強かったようである。

「というより、ハジメ様格好良すぎですね。あのさりげない優しさは、いったい何なんですか？ウチもされてみたいっ。」

だんだん口調が巢に戻る刹那。

「ええなあ。ハジメのおじさんみたいな人おらんかなあ？」

普通の生活は、もう出来ないことが分かっている木乃香は、ただ願う。

「父親としては、少々厳しいですからね？」

流石に娘としては、親のそれを見るのは少々きつかったようである。

こうして、少々話を広げてしまった彼女らは、家に帰るのが遅れたのであった。

もちろんハジメは気づいていたので、少々寝るのも遅れたそうだ。

第10話（後書き）

久しぶりのハジメとアリカ。いかがでしたでしょうか。作者は日常とか書くのが本当に苦手だと再認識いたしました。

あまり更新に間が空かないよう頑張りたいです。ではまた。

第11話

時の歯車は加速する
されど平穩は終わらず

第11話

～春休み・2～

満月が浮かぶ夜空のもと、世界樹の根元に立つ男がいた。

男は幹に手を沿え、見上げる。

「やはり、蟠桃の魔力が高まっている…。」

男は呟くと、聳え立つ世界樹を見上げる。

「計画の実行を早めねばならん…。準備を終えていたのが幸いか…。」

男はそう言うのと、踵を返し去っていった。

—メア side—

今日は月に一度家に帰る日。

寮生活を始めるにあたって、母様と決めたことだったりする。

この日は母様に料理を教えてもらったり、父上に稽古をつけてもらったりしている。

京都では、父上と母様がずっと仲睦まじかったので、このちゃんとせっちちゃんとばかり遊んでたのもあるしね。

お、家に着いた。

「ただいまー。父上、母様。」

「おお、珍しいの。おかえりなさい、メア。」

母様が出迎えてきてくれた。

靴を脱ぎながら、家の中に入る。

「今日は家に帰る日じゃん。それに父上に稽古をつけてもらおうか
と思つて。」

母様とリビングに入りながら話すと、母様はキョトンとした顔で、

「聞いておらんのか？ ハジメならおらんぞ。」

「え？」

父上、またいないの？

「出張ということじゃ。春休みの前日位に戻るそうじゃぞ。」

えー。京都で詠春さんに稽古つけてもらったから、久しぶりに父上
とやりたかったのにい。

「そっかー。残念。」

まあ、いいや。今日は母様に料理とか教えてもらおう。

昼も過ぎ、母様と他愛無い話をしていると、

「そういえば、メア。メアは好きな子は出来たかの？」

と聞かれた。

「えっ？ いや、いないけど。女子中だし。」

身近な男性か…。先生達はみんな先生としか思えないしなあ。ネギ
先生は余りタイプじゃないしねえ。

「ふむ、それもそうじゃのう。それに、メアはなんだかんだ言うて
も、ハジメのことが好きじゃしな。」

「な、突然なに言い出すのっ？ 母様っ。」

若干、顔が熱くなるのを感じながら母様に言う。

「ふふ。照れるでない。明石教授のところも、娘がそうじゃと言っ
ておつた。」

なっ。

「裕奈と一緒にするなあっ。」

私はあそこまでファザコンじゃ無いから。

「ふふふ。まあ、メアにもいずれ、いい巡り合わせがあるじやろう。なにが、運命の出会いか分からんものじゃ。楽しみにしておるがよい。」

…その言葉は嬉しいんだけど、なんかいやな予感。

「妾もハジメと出会った時は、こうなるとは夢にも思わなかったが、さりげなく妾を護ったときの、奴の後姿がじゃな? ……」
あー、惚気が始まっちゃった。

……

…

そんな会話をしながら、そろそろ日も傾き始め、夕食の献立を考えることになった。

「メア、夕食は何を食べたい?」

んー。やっぱ春だから、春っぽいのが良いなあ。

「春野菜のてんぷらとか良いなあ。」

「ふむ、それに筍ご飯でよいか。では、買い物に行くかの。メア。」
「はあい。」

母様の後ろにつきながら買い物に付き合う。

商店街を歩いていると、母様くらいのお姉さんが、

「あら、今日はご主人と一緒にじゃないの?」

「夫は出張に行ってしまったもので。今日は娘と2人で食事です。」
「娘のメアです。」

おお、これがご近所づきあいって奴なのかな。母様に紹介されたので、少しお辞儀する。

「あらあらまあまあ、お母さんに似て美人ねえ。将来が楽しみだわ

あ。」

うう、なんか恥ずかしい。

「…ありがとうございます。」

「ふふ、照れちゃったのかしら。」

お姉さんは、笑みを浮かべて手を自分の頬に添える。

「なに、褒められ慣れておらんだけじゃ。買い物の続きがあるので、これで失礼するのじゃ。」

「あら、お邪魔しちゃったわね。またね。」

「うむ。また。」

手を振りながら、去っていったお姉さん。

見送った後、少し歩いて聞いてみた。

「母様の友達？」

「そうじゃ。麻帆良に来てから、いろいろな人とであったからのう。」

「へえ。」

美人には、美人の友達が出来るものなのかなあ。

商店街で、夕食の材料を買っていく。

結構いい品が多くて迷うんだよね。

「こっちの方が身がしっかりしてるんじゃない？」

「ふむ、そうじゃな。こちらにするかの。」

母様と見比べながら、買い物を済ましていく。

帰ってから、母様と一緒に料理をして、夕食の時間となった。

「うん、おいしいっ。」

「ふふ、メアも手伝ってくれたからじゃろう。」

なんか、このちゃんたちと一緒にの食事もいいけど、こうして母様たちと食事するのもやっぱりいいなあ。今日は父上はいないけど。

そういえば、

「父上、出張って言ってたけど。なにかあったの？」

ネギ先生の補佐が、主な仕事になるとか言ってたと思うんだけど。

「なに、予定より、計画を早めることになったそうじゃ。それで、少々仕上げのための調整といったところかの。」

「ふうん。」

計画ねえ。なんか大戦時代の因縁とかを、片付けるためのものとは聞いたけど。

私に教えても、やること無いらしいから、教えてもらって無いんだよねえ。

つまんないの。

食事も終わって、母様とお風呂に入り、就寝の時間になった。

「それじゃ、電気を消すぞ？」

「うん、いいよお。」

家に帰った日は、母様とこうして寝てる。さすがに父上とはもう寝れないけどね。

「おやすみ、母様。」

「おやすみなさい、メア。」

こうして、私の春休みの一日は終わった。

明日も良い一日でありますように。

第11話（後書き）

昨日は時間がとれず、投稿できませんでした。

時間と文才が欲しいです。ではまた。

第1話

新たな気持ちで始める
また新たな物語も開かれる

第1話

〱桜通りの吸血鬼〱

満月の夜：月明かりで怪しく光る桜通りを歩く少女が一人。

「ふんふふん。ネギつくん。」

佐々木まき絵は、夜の桜通りで一人涼んでいた。

強い風が吹いた。

「きゃっ。春一番ってやつかな。」

まき絵が桜を見上げると、その風景の中に歪な者が紛れ込んでいた。

「ふえっ?」

そこには、黒いトンガリ帽子、黒いローブを身に纏った影が佇んでいた。

「悪いが、その血：少々分けてもらおうぞ?」

影は、まき絵に襲い掛かる。

「え、あ：いや。いやあああああつ。」

少女の悲鳴が木霊する。

ただ、満月だけが妖しく光っていた。

「ネギside」

「3年A組っ、ネギ先生アンドサイトウ先生ーっ。」

「はい、今年度もよろしく願いします。みなさん。」

やっぱり皆さん元気がいいですねえ。

「改めまして、3年A組の担任になりました、ネギ・スプリングフィールドです。これから一年間よろしく願いしますね。」

サイトウ先生に目を向ける。

「俺も引き続きネギの補佐をすることになった。あまり、面倒をかけてやるなよ?」

「「はーいっ。よろしくーっ。」」

元気に反応してくれる皆さんを見渡す。

こうしてみると、3学期いろいろ空回りしていたことが分かるなあ。まだ、ろくに話していない人も多い。やっぱり、生徒とコミュニケーションが取れないとね。

っ。

突然背筋が凍るほどの寒気がした。なんだ?強い視線を感じる。

視線のもとへさりげなく目を向けると、あれは確か…クラス名簿と見比べる。

26番エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルか。

タカミチは、なんか困ったことがあれば相談しなさいって書いているけど、とてもそんなことできそうに無いよ…。

あの視線はなんだったんだろう?

肩に手を乗せられたことで、思考を中断する。

「ネギ、考え事はその辺にしろ。今日は、身体測定の日だ。」

「あっ、そうでした。では、みなさん、身体測定があるので、準備

をお願いします。では、サイトウ先生、行きましょうか。」
「「はーいっ。」」

教室を出て、サイトウ先生と今後の授業の話し合いをしていると、
「先生ーっ、大変やっ。まき絵が…まき絵がーっ。」
和泉さんこちらに向かって走ってきた。

それよりも、佐々木さんがどうかしたのでしょうか？佐々木さんは
HRではいなかったと思いますが。

「落ち着いてください、和泉さん。佐々木さんがどうかしたのです
か？」

「えっと、保健室に来てくださいっ。」

保健室に入ると、佐々木さんが、ベットで横になっていた。

「なにかあったのでしょうか？佐々木さんは。」
和泉さんに聞く。

「それが、桜通りで寝てたらしいんですわ。」

桜通りで…。

「ふむ。桜通りの吸血鬼か。」

「サイトウ先生、なんですか？それ。」

「いや、最近桜通りで噂になっている変質者の話だ。」

変質者…。まさか、佐々木さんの身になにかっ？

思わず、佐々木さんに近づくと、違和感を感じる。

こ、これはっ。

微量だけど、魔法の力を使った…その残滓を感じとれる。

ま、まさか…魔法使いがこんなことをっ？

これは調べる必要があるかもしれない…。

もしかしたら、学園長に協力してもらわなければいけないことになるかも。

そんなことを頭の片隅に置きながら、今日の授業を終えていった。

—side end—

学校も終わり、放課後。少女達は帰宅の途中であった。

少々、話に興が乗ったのか、彼女らが帰るときには、満月が浮かぶ夜になっていた。

「じゃあ、先に帰っててね。のどかー。」

「はいー。」

のどかは桜通りに差し掛かると、

「あ、桜通り。」

思わず、昼間身体測定のときに聞いた噂を思い出してしまった。

不気味なほど、静かな桜通りに風が吹き、桜を揺らしていく。

その音すらも不気味に奏でながら。

「こ…こわくない…。…こわくないです。」

自分に言い聞かせるように、歌を歌いながら桜通りを歩くのどか。

少し歩くと、風で揺れた音ではない、異質な音が聞こえ、思わず立ち止まり、音のした方へ顔を向けてしまうのどか。

「えっ。」

そこに見えたのは、街灯の上に佇む黒い影。

「ひっ。」

思わずのどかは、喉が引きつったような声を出す。

「27番宮崎のどかか…。悪いが、少々その血分けてもらうぞ？」
牙が妖しく光る。

そして、のどかは直感する。これが、桜通りの吸血鬼なのだ。
影が襲い掛かってくるのを、のどかはただ、悲鳴を上げることしか
できない。

そこに、

「待てっ。僕の生徒に何をするつもりだっ。」

突然現れたネギが影に呼びかける。

影の動きが止まる。ネギは、飛びながら詠唱を始める。

「ラス・テル・マ・スキル風ウンデキム・スピリトゥス・アキメテレンゲルム・フアクテイイニミクム・カプテの精霊11人縛鎖となりて敵を捕まえ
ろ」
ネギの右手に光が収束する。

「魔法の射手・戒めの風矢」
サギタ・マギカ
アエル・カプトウーラエ

ネギの右手から放たれる、束縛の光の矢。

しかし、

「もう気づいたか…。氷楯」
レフレクシオー

その全ては、氷の楯にはね返される。

「なっ。僕の魔法が全てはね返されたっ？」

ネギは戸惑いながらも、のどかの安全を最優先として、のどかの傍
で構える。

はね返したといっても、ネギの魔力は凄まじく、衝撃によって、影
のトンガリ帽子は飛んでいった。

その姿を見て、ネギの顔は驚愕に彩られる。

なぜなら、

「なっ、あなたはっ。マクダウエルさんっ。」

そこにいたのは、ネギのクラスメンバーでもある、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルであったのだから。

第1話（後書き）

桜通りの吸血鬼編に入ります。

原作引用が多くなりそうですが、ご容赦を。

夜にもう1話更新できそうです。ではまた。

第2話

少年は目標と義務に迷う

吸血鬼は少年と遊ぶ

第2話

～邂逅～

満月が浮かぶ夜、対峙するは2人の魔法使い。

今なお正義を、己の目指す者を探している少年と、はるか昔より、己の矜持のままに悪を貫いてきた魔女が向かい合う。

—ネギside—

「マクダウエルさんっ。なぜ、あなたがここに？」

宮崎さんを庇いながら、胸中から出てくる疑問を投げかける。

マクダウエルさんは、先程の魔法の衝突で負ったのか、人差し指の傷口から出る血を舐める。

「10歳にしてこの力…。流石は奴の息子だけある。」

お父さんのことを知っている…？

「…何者なんですか？あなたは。魔法使いだというのに、こんなことをして。」

魔法という力は、誰かを助けるためにある力なのにつ。

僕の言葉にマクダウエルさんは、

「この世には…いい魔法使いと悪い魔法使いがいるのさ。…ネギ先生。」

笑みを浮かべながら、試験管のようなものを両手に構える。

あれは、魔法薬かっ？

フリーゲランスエクサルマティオー
「氷結武装解除っ」

魔法薬をこちらに投げつけ、マクダウエルさんが詠唱する。

しまったっ。武装解除かつ。

宮崎さんを後ろに庇いながら、魔力を持って抵抗^{レジスト}する。

「ぐっ。」

抵抗^{レジスト}したせいで、あたりに粉塵が舞い上がる。

「さて、パイルドライバーまで相手に出来ないんでな。ここで退かせて貰うよ、ネギ先生。」

そう言っ、走り去るマクダウエルさん。

くっ、宮崎さんをこのままにしておくわけにはいかないし。

「ちっ、遅かったようだな。ネギ、宮崎は大丈夫か？」

聞き覚えのある声に、緊張が一気にほぐれる。

「さ、サイトウ先生っ。宮崎さんをお願いしますっ。僕は、吸血鬼の方を追いますのでっ。」

いくらサイトウ先生でも、魔法使い相手では厳しいと思う。なので、宮崎さんをサイトウ先生に頼んで、マクダウエルさんを追った。

「なっ、おい。待て、ネギっ。」

サイトウ先生が何か言っているのが聞こえたが、僕に気にしてる余裕はなかった。

—side end—

—エヴァンジェリンside—

ちっ。まさか、これほどまでに早く気づかれるとはな。しかもあんな坊やに…。

「待ってくださいっ。マクダウエルさんっ。」

坊やの声が聞こえたので、後ろを振り返ると、坊やが後ろに迫っていた。

なるほど、坊やは風が得意だったな。

橋が見えたところで、飛翔する。この程度なら、封印されていても造作ない。満月の夜だしな。

それにしても、ガキの癖に冷静な奴だと思ったら、なかなか面白いじゃないか。

てつきり、宮崎を安全な場所へ連れて行くとばかり思っていたよ。

「待ちなさいっ。マクダウエルさんっ。どうしてあんなことをっ。」

「ふははは。先生っ、奴のことを知りたいのではなかったのかっ？私を捕まえたら教えてやるよ。」

「…今の僕は先生ですっ。今は、あなたを捕まえることが優先ですっ。」

くくく、捕まえることには変わり無いと。

思わず笑みを浮かべてしまう。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル風精召喚エウオカーテイオ・ウアルキエトウボルホーリア・グラデアイアーリアっ。剣を執る戦友。」

坊やの周りに、分身？

いや、精霊魔法か…。10歳とは思えん魔力だな。

魔法薬を取り出し、精霊に投げる。

ちっ、やはり殲滅は出来んか。

「これで終わりですっ。フランス・エクサルマティオー 風花 武装解除っ。」

ローブが消え去る。

ふふ、やるじゃないか坊や。

近くの建物に降り立つ。

「大人しくしてください。聞かせてもらいますよ。なぜこのようなことをしたのか、そして、…お父さんのことも。」

「父親か…それは、千の呪文サウザンドマスターの男のことか？」

坊やの顔が驚きに目を開く。

くくく、分かりやすいな、坊や。

「とにかくっ、あなたにはもう抵抗する武装が無いはずですよ。大人しく、負けを認めてください。」

それは、間違いだよ。坊や。

後ろに茶々丸が降り立つ気配。

「やれ、茶々丸。」

「了解です。マスター。」

「なっ。ラス・テル・マ・スキル・マギ痛っ。」

茶々丸が一気に坊やに近づき、デコピンを放つ。

その後も坊やが魔法詠唱をしようとしても、茶々丸が止める。

ふはははっ。いい気味だよ坊やっ。

「茶々丸は私のパートナーでね。紹介しよう。」ミニステル・マギ 魔法使いの従者”、絡繰茶々丸だ。」

茶々丸が、こちらに戻ってくる。

「ええっ。パートナーっ？」

やはり、まだガキだな。パートナーなどは、まだまだ先の話だろうしな。

「茶々丸。」

「申し訳ありません。ネギ先生。」

茶々丸に坊やを押さえつけるように命令する。

「あう、ぐああっ。」

ふふふ。

やっと、やっとだ。

「やっと、この呪いから開放される。」

思えば長かった…。万感の思いをこめながら、ネギに近づく。

これで、呪い開放されれば、後は。

後は、あいつを、パイルドライバーを私の前に跪かせて屈服させるだけだ。

「…の、呪い？」

坊やには疑問だろうだろうな。まあ、今から死ぬ理由を聞かせても良からう。冥土の土産という奴だ。

「冥土の土産に教えてやろう。私はなあ…。」

今までの記憶が蘇る。勘違いから奴に付きまとい、挙句の果てには封印され、お気楽な女子中学生に囲まれた日々を…。

坊やの胸倉を掴み、今までの鬱憤を晴らす。

「私はなあっ、貴様の父親に敗れて以来、この地に封印されっ、もう15年間もだっ。あの能天気な奴らのような、女子中学生と一緒に勉強させられているんだよっ。」

「そんなことがっ。」

「このばかげた呪いを解くには、だ。奴の血を引く、貴様の血が大量に必要なわけだ。よって、死ぬまで吸わせて貰うぞ？」

坊やの首を露にさせる。

「へ？ そんなあつ。」

坊やが泣き喚こうが関係ない。封印をとくのに必要な犠牲というだけだつ。

首筋に牙をつきたてようとしたその瞬間、

「マスターっ、何かが凄まじい速度で飛来していますっ。」

知覚した瞬間、坊やを突き飛ばし、後ろへ飛びずさる。

私がいた場所に何かが降り立つ。その衝撃で粉塵が舞い上がる。

まずいな。少々坊やに夢中になりすぎた。奴がここに来る時間を与えてしまったか…。

「やあ、こんな夜更けに何のようだい？ サイトウ先生。」

「なに、出来の悪い生徒に、少々お灸を添えにな。」

粉塵が薄くなるとそこには、パイルドライバー…ハジメが立っていた。

「さ、サイトウ先生っ。」

坊やが涙を目に浮かべながら、ハジメに近づく。

そんな坊やにハジメは、

デコピンを放った。

「ぎゃうっ。」

…大丈夫か？車が正面衝突したような、凄まじい音がしたが。

ハジメは更に、倒れている坊やに向かって、

「この阿呆がっ。貴様の立場を考えて行動しろっ。ましてや、単独行動をするなど、もつてのほかだっ。」

「す…すいません。で、でも相手は魔法使い…あつ。」

魔法使いという言葉で思わず口を手で封じる坊や。いや、遅い上に、ハジメは裏の関係者だぞ？ああ、知らせていないんだっとな。

今のうちに逃げるか。

「…茶々丸、退くぞ。」

「ハイ。」

ハジメの方も、まるで今のうちに逃げろといわんばかりだな。…どういうつもりか知らんが、助かったことに変わりはないか。

茶々丸に抱えられながら、夜空を飛ぶ。

次こそは必ず、封印をとき、私が受けた屈辱を味あわせてやる…。絶対だぞっ。

第2話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。ではまた。

第3話

吸血鬼として屠るべきか
生徒として信じるべきか

第3話

～生徒は吸血鬼～

「去ったか…。」

エヴァンジェリンと茶々丸が去った方向を見ながら、ハジメが呟く。
本来ならば、捕まえるところであった。だが、ネギがいたために、
戦闘は控えたのであった。

「えつとですね、これはですね、魔法…じゃなくてですねっ。」

魔法がばれたのではないかと焦るネギに、
「安心しろ。俺は同業者だ。…全く、教える気など無かったのだが
な。」

呆れながら、自らが裏の世界の人間であることを告げる。
その事実、ネギは一瞬何を言われたのかを理解できず、

「へ？」

間拔けな声を出した。

「えええっ。魔法使いなんですかっ？ サイトウ先生は？」

驚きでハジメに迫るネギ。

ハジメは、そんなネギを鬱陶しそうに、手で払いながら、

「魔法使いではない。協力者という関係だ。傭兵みたいなものだと思え。」

魔法関係者であるという最低限の情報だけを述べ、これ以上問われないように、嘘を並べる。

「さて、ネギ。なぜ、単独行動などした？このような事態、学園長に報告することは考えなかったのか？」

ハジメはネギに向き直り、今夜のことを問う。

その目は鋭く、ネギを萎縮させるには十分であった。

そして、ネギは自分が未熟なので、サイトウ先生が補佐しているのだらうと思い至ったのであった。

「す、すいませんでした。僕の思慮が足りませんでした。」

ネギは、今夜の行動を思い返し、思い上がっていたと同時に心配をかけたことを謝罪した。

「今夜のことは良く考えておけ。…では、学園長室に報告に行くとするか。」

「はい。」

ハジメはネギと共に、学園長室へ向かった。

閑散とした夜の校内の中を歩く、ハジメとネギ。
学園長室にたどり着き、

「邪魔するぞ、近右衛門。」

ハジメがノックもせず部屋へと入る。

「めずらしいの。どうかしたのかの？」

珍しい組み合わせでの来訪に、山のような資料の間から、驚きよりも先に疑問を投げかける学園長。

「なに、問題児がいてどうしようかと、相談しようと思ってな。」

ハジメが笑みを浮かべながら、学園長に用件を言う。

「…ふむ。」

学園長は吸血鬼の噂を思い出していた。

ハジメの様子に、噂の吸血鬼はやはりエヴァンジェリンであったかと学園長は考え、

「これは、ネギ君にも関係あることじゃな。話をするとうしようかの。」

書類の仕事をいったんやめ、話をすることを決めた。

「ネギ君は、エヴァンジェリンに何か聞いたのかの？」

ソファに移り、学園長はネギにさっき起こったことを聞き、質問する。

「あ、はい。なんでも、お父さんに負けて、麻帆良学園に封印された。後、15年もこの地にいることも聞きました。」

ネギの発言を聞き、どこから話そうかと学園長は髭を揉みながらしばし考える。

この間、ハジメはただお茶を飲みながら事態の推移を考えていた。

「そうじゃの。エヴァンジェリンが言っていたことはその通りじゃな。15年前、エヴァンジェリンはナギに破れ、この地に封印された。」

「な、なんで、マクダウエルさんがこの地に封印されなければいけなかったんですかっ？」

ネギの問いに、ネギの目を見ながら、学園長がそれに答える。

「そもそも、エヴァンジェリンは闇の福音と呼ばれた、賞金首の魔法使いじゃった。ハイデライト・ウォーカー吸血鬼の真祖ということもあって、なかなか評判

の悪い奴じゃった。」

ハイデライト・ウォーカー
「…吸血鬼の真祖…。」

吸血鬼の真祖であったという事実には驚きを隠せないネギ。

「じゃが、15年前より更に前かの？何を考えていたのか知らぬが、ナギにくっついておっての。聞いてみるとナギは、身に覚えの無い

ことで付き纏われていたそうじゃ。」

ちらりとハジメを見る学園長。しかし、ハジメは特に思うところがなく、受け流していた。

「それで、ナギの限界が超えたんじゃないなあ。麻帆良で、登校地獄の呪いをエヴァンジェリンにかけて去っていきおった。あの馬鹿魔力で、の。」

そうして、ナギが今だ呪いを解きにも来ず、今に至るというわけじゃない。

そうやって、学園長は話を締めた。

「さて、今の話を聞いて、ネギ君はエヴァンジェリンをどうするつもりじゃ？」

期待の若干こもった目で、ネギを見る学園長。

「ぼ、僕は、話したいと思います。やっぱり、いけない事はいけないと言いたいです。」

ネギのその言葉に、今まで静観していたハジメが口を開く。

「それでも、吸血鬼被害が増えたらどうする？」

「それは、僕が止めてみせますっ。その上で、話し合いたいと思います。マクダウェルさんがどんな人でも、話さなければ分かりません。それに、僕は自分で確かめたいと思いますからっ。」

ハジメに向かって真剣な目を見せながら、自分が甘いと思っけても、それでも自分の考えを述べるネギ。

場に沈黙が流れるが、ハジメがふっと笑みを浮かべ、

「ならば、どこまで出来るかやって見せろ。なにかあれば、協力はしてやる。」

その言葉にネギは笑顔になった。

「そうじゃな。それじゃわしは、他の生徒が襲われんように、エヴァンジェリンに釘を刺しておくかのう。」

そんなネギを見て、学園長も協力を意思を示した。

「あ、ありがとうございます。」
そんな学園長とハジメにネギは礼を言ったのであった。

—主人公 side—

学園長室から出て、ネギと共に寮へ向かっている。

しかし、マクダウエルがこの地に封印されていたのは知っていたが、あのような理由があったとはな。

まあ、訳も分からずついて回られたら、封印するナギの気持ちも分かるが。

近右衛門の話から察するに、マクダウエルの目的は、ナギの血を引くネギの血で、己にかかっている呪いを解呪することだろう。

ネギはああ言っていたが、マクダウエルの目的を考えるとやはり、戦闘は避けられんだろうな。そのとき、ネギをどうするかが問題だな。

現状、ネギがマクダウエルに勝つのは難しいだろう。封印されているといっても、経験の差が激しすぎる。

それに、絡繰もいる。今のネギの戦闘能力は、従者がいる魔法使いを相手に出来るものではない。

俺が介入することになるかも知れんな。最悪、教え子を葬ることになるか…、あまり教育上よろしくはないが。

それに、ネギが言っていたとおり、マクダウエルがどのような奴かを確認しないことには、流石に手を下せんしな。

この15年、普通とはいかんが、特に何かをしでかしたというわけでも無い。

やはり、現状はネギを補佐することが、そのまま奴の牽制になる……ということか。

夜の見回りを増やし、周囲を警戒しなければいかな。昼間にかかってくるような阿呆なら、与し易いのだがな……。

今日は良い満月だと思ったのだがな……。
夜空を見上げて思う。

「あの、ありがとうございます。サイトウ先生。」

思考が続けていると、隣を歩いていたネギが突然礼を言ってきた。

「なにがだ？」

何に対しての礼なのか分からない。

「いえ、やはり、マクダウェルさんが悪いことをしたのは事実です。から。それでも、僕が確かめたいと言ったら、協力してくれるといってくれたことにです。」

ああ、そのことか。

「ネギ。お前が言っていたことは甘い。それはお前も分かっているだろう。それでも、お前の考えは人として正しいと思う。自ら見たものでしか人というものは分からんからな。」

噂だけで、何かを決めるなど阿呆のやることだ。噂に振り回されてもろくなことが無いだろうに。

「怖いですけど、それでもマクダウェルさんは僕の生徒ですから。話さなきゃ分からないこともあると思うんですっ。」

ネギが握り拳を作ってこちらに笑みを向ける。

そうだったな。今の俺は”先生”だったな。ならば、教え子のことを第一に考えるべきだったか。
俺もまだまだ未熟ということか。

意気込んでいるネギを見ながら、そう思う俺であった。

第3話（後書き）

最近書く時間が減ってしまったので、今日中に吸血鬼編終わらせられたらいいなあと思います。間が空くとどうしても駄目な部分が露になってしまいますので…。

ではまた次の更新で。

第4話

大切な者の傍にいるのに人であるかないか
そんなことは些細な問題なのかもしれない

第4話

くからくりく

ーネギsideー

うう。怖い：だけど、マクダウエルさんも僕の生徒なんだ。まずは、話さないことには何も始まらないっ。
タカミチがいないので、簡単にパンを焼き、スクランブルエッグで朝食を済ましながらか、僕は決意した。

決意したのだけれど、

「えっと、マクダウエルさんは：？」

「マスターならば、学校には来ております。すなわちサボタージュです。」

マクダウエルさんがいなかったので、絡繰さんに聞いてみると、そんな返答があった。

：ちゃんと授業には出てくださいよお。

「お呼びしますか？」

昨夜のこともあるから話があったけれど、改めるとやっぱり怖い。

「いえ、お気になさらず。やる気がなかったら、出ても意味が無いと思いますので。」

そんな言葉も、僕の心中から考えると、情け無いとは思えない。

気分を切り替えて、授業を始める。

サイトウ先生は、僕が正式に先生になったということで、今日は他のクラスを見回っているそうです。

僕ひとりですら、ただで済むのかを知りたいのと、3-Aが2年学期末テストが良かったのもあるみたいです。

それにサイトウ先生は、昨夜のことを感じさせないように振舞っていました。

僕も見習わないといけません。

「それでは、新しい教科書になったことですし、まずは皆さん読んで下さいね。」

さあ、授業授業。

正式に先生になったんだから、ちゃんとやらないとねっ。

…

…

「ふう、終わったあ。」

職員室で、今日片付ける書類と明日の授業資料を作成し終えた僕は一息ついてた。

やっぱり大変だなあ。先生をやることになる前は、先生が授業以外にも何かするなんて考えていませんでしたから。

「ふむ、多少は慣れたようだな。」

「あ、サイトウ先生。はい、やはり大変ですね。」

いつの間にか隣にいたサイトウ先生が、僕の作った書類などをチェックしている。

サイトウ先生が資料を見ながら、

「そういえば、今日マクダウェルがいなかったが、何か聞いているか？」

…あ。

「…えっと、サボったみたいです。」

忘れてた。今朝の決意は、どこへいったんだ？僕。

サイトウ先生が書類から目を離し、僕に向く。

「そんなことで、話し合いなどできるのか？」

「そうですね。明日は話し合いをしたいと思います。」

よし、明日こそはっ。

そう意気込む僕の目の前に、マクダウエルさんのサボりの事実。明日は来てくれるのでしょうか？

「…それ以前に、やはり補佐が必要みたいだな。」

「…すいません、また明日からお世話になります。」

まだまだ未熟ですいませんっ。

—side end—

翌朝、女子中等部の玄関にネギは来ていた。

次々に、登校してくる生徒と挨拶をしながら、ネギはエヴァンジェリンを待っていた。

目的は、桜通りの吸血鬼のことを話し合うことと、父親である千の^{サウザンドマスター}呪文の男と何があったのかを聞くことであつた。

「…遅いなあ。マクダウエルさん。」

今日は早くから職員室に入り、今朝やるべきことを終えていたネギであつたが、余りに来ないので、心配になってきたようだ。

「おや、私を探していたのか？ネギ先生。」

「っ。」

かけられた言葉に一瞬身をすくませるネギ。やはり、一昨日に戦っ

た記憶は残っているようであつた。

「私に、なにか用かな？」

そんなネギを見て、面白いといわんばかりの、笑みを浮かべながら問うエヴァンジェリン。

「はい。桜通りのことについて、あなたと話がしたいと思ひまして。」

「ふふ。なんだ、続きをここでやるかい？」

エヴァンジェリンの後ろにいた茶々丸が構える。

それを見たネギがあわてた様子で、

「い、いえ、そういうことではなく。あのような行為はいけなことです。先生として、見逃すわけには行きません。」

と発した言葉に、エヴァンジェリンの片眉が上がる。

「ほう。悪の魔法使いたる私に説教か？なかなか面白いことをいうな、ネギ先生。だが、断らせてもらおう。まあ、今日もサボらせてもらうよ。」

そう言って、踵を返そうとしたエヴァンジェリンであつたが、

「俺がそれを見逃すとしても？」

その先にハジメが立っていた。

「…他のクラスを回るのではなかったのか？」

冷や汗をたらしながらエヴァンジェリンが問う。

「なに、やはりネギ一人では、まだ厳しいようだという事になった。てな。今日からまた、一日補佐を続けることになった。」

近づくハジメ。後ずさるエヴァンジェリン。

「俺のクラスでサボりは許さん。」

エヴァンジェリンの襟首を掴み上げ、そのまま教室へ連行していくハジメ。

「ま、待てっ。これは余りにも恥ずかしいぞっ、ハジメっ。」

その体制のまま暴れるエヴァンジェリンであつたが、その手足はハ

ジメには届かない。

「サイトウ先生と呼べ、マクダウエル。まあ、日ごろの行いだ、諦めろ。」

「ふざけるなあああつ。」

エヴァンジェリンの叫びが廊下に響き渡る。

しかし、そんな叫びも無視しながら、ハジメはエヴァンジェリンを掴み上げたまま歩いていった。

「……。」

ハジメの行動とエヴァンジェリンに、呆然とした様子で見送っていくネギ。

「…僕達も行きましょうか。」

ネギは、なんとか言葉を搾り出し、茶々丸に言う。

「はい。」

遅れて、ネギたちも教室へ向かったのだった。

そのまま教室に入ってきたエヴァンジェリンに教室は和んだそうだ。

—主人公 s i d e —

「ふう。」

放課後となって、一息つく。

しかし、ネギは果たしてマクダウエルと話せるかどうかだな。

隣で必死に書類を片付けているネギを見て思う。単純に時間が取れそうになさそうだ。

手伝える書類は片してしまっただしな、指導員として見回りに行くか。

見回りをしていると、前方に見覚えのある姿を見かける。

：絡繰か。傍には小さな女の子が泣いている。

絡繰が見ている先を見ると、なるほど。風船を手放してしまい、木に引っ掛かってしまったのか。

そう考えていたら、絡繰が飛んだ。文字通り背中から火を噴いて飛んだ。飛びすぎて木の枝に頭をぶつけている。

：なるほど。普段から接していると、絡繰がロボットであるということ忘れてしまうな。

絡繰は風船を取ると、降りて女の子に渡す。女の子が礼を言って去っていく。

そして、また新たに子供が絡繰の周囲に集まる。

子供を引き連れている様は、人間にしか見えんな。ああいうのを見ると、機械にも心が宿るというのも頷けるな。

マクダウエルの従者という先入観は取り去った方がよさそうだな。階段を上っていた老婆を背負っていく、絡繰を見て思う。

少々興味が湧いたな。話してみるか。

そう思い、絡繰に近づく。絡繰は川を注視していた。

なにかあるのか？

川を見ると、猫が入っている段ボール箱が流れていた。それを見た絡繰が、川を仕切っている柵を乗り越える。流石にこれは、見たまま放置はできんな。

「まあ、待て。絡繰。」

絡繰を呼び止め、柵を飛び越える。

「え？ サイトウ先生。」

こちらを見て止まる絡繰を追い越し、川へと入る。

「みー。」

ダンボールを掬い上げ、戻る。

絡繰が困惑したような、不思議な顔をして立っていた。

「なに。生徒に、しかも女子にこのような真似はさせられんからな。」

「しかし、サイトウ先生の服が濡れてしまいました。」
何を言っているんだこいつは？

「お前が入っていたら、お前が濡れてしまっていただろう？」

絡繰がこちらを見る。

「私は…。」

リーサルウェポン

「ああー。麻帆良の最終兵器が猫を助けたー。」

歩道に戻ると、絡繰の周りにいた子供達が、俺にまとわりつく。
本当に良く好かれているものだ。

子供達を散らせた後、

「絡繰、この猫はどうするつもりだったんだ？」

段ボール箱で鳴き続ける猫を見て、絡繰に問う。

「…あ、はい。この先の教会で猫が集まっていますので。」

野良猫の世話をしているのか？

「そうか。では、そこに行くとするか。」

「はい。」

先程の猫を頭に載せた絡繰と共に、教会の広間へ行く。
絡繰が来た瞬間に、それが分かったのか猫が寄ってくる。
すると、絡繰が手に持っていた袋から缶を取り出した。

「ねこ缶まで用意していたのか。よく世話をしているのか？」

絡繰がしゃがみ、いつもそれであげているのであろう皿に、ねこ缶の中身に移している。

「はい、マスターが用事でいないときや、時間があるときにはこの子達の世話をしています。」

そう言って、絡繰が少し微笑んだように見えた。

本当にロボットなのだろうか？ロボットと認識するたびに思ってしまう。

猫が絡繰にまわりつくだけでは飽き足らず、俺の足元にも寄ってくる。

「ふ、こういうのもたまにはいいか。」

足元に来た猫を抱き上げる。

「サイトウ先生は猫がお好きなのですか？」

絡繰がこちらに顔を上げる。

「そうだな、好きな方に入るな。」

そう答えると、絡繰は満足したようだった。

「まあ、絡繰には負けるがな。」

「なにがでしようか？」

絡繰は不思議そうな顔をする。

「絡繰も、猫が好きなのだろう？」

これだけ猫を可愛がっているのだから、そのはずだと思ったのだが。

「すみません、…良く分かりません。」
顔をうつむかせる絡繰。

そういえば、中学生として扱っていたが、絡繰がこの世に生を受けたのは、ほんの数年前だったか。
ならば、自分の感情も分からんのかも知れんな。

「自らこうしたいと思ったのであろう？」

「…はい。」

「ならば、好きなのであろう。こいつらが…この空間が、な。」

「私はロボットです。そのようなことは無いかと思われます。」

そこで、否定するのか。

ふむ、何か劣等感でもあるのか…。それも感情だと気づけばよいが、最初に認識するのが、それというのは余りに味気ない。

「否定はするな。自らが何者であろうと、自らが思って行動したことなのだろう？ならば、なぜそうしたかぐらい考えておけ。」

それが、猫相手だとしても…な。

「…わかりました。」

「絡繰が、自ら考え、自ら行動することに何かを感じ取れたのなら、そのときは、真の意味でマクダウエルに従者になるのであろうな。」

まさにドールマスターであるな。機械に魂を宿す…か。

「すでに、私はマスターの従者ですが？」

分からないと顔に出ている絡繰を見て思わず笑みがでる。

ああ、人間であるなど、些細な問題だったな。

こいつはもう、絡繰茶々丸という、一個の存在であるのか。

「サイトウ先生はなぜ、笑っているのでしょうか？」

少々不機嫌な顔の絡繰を見て、ますます笑みを深めてしまう。

「いや、なんでもない。」

絡繰がそれに気づけたならば、それはとても幸せなことなのだろうな。

第4話（後書き）

作者は茶々丸が好きです。

書いて消してを繰り返していたらよく分からなくなってしまうほどに。

茶々丸が幸せならばそれでいいんです。ではまた。

第5話

吸血鬼と少年の決闘が決まる
されど彼我の実力差は明白であった

第5話

～決闘状～

絡繰と別れ、職員室に戻ったハジメを待っていたのは、
「サイトウ先生っ、助けてくださいい。」
泣きついてくるネギであった。

…さかのぼる事数時間前

「ふう、終わったあ。」

ネギが今日中に済ませることを終えると、

「あ、ネギ先生。学園長が呼びでしたよ？」

「そうですか、分かりました。行って来ます。」

他の先生に学園長へいくように言われ、席を立つ。

「学園長が何の用だろう？」

学園長室に続く廊下を、ネギは一人考えながら進む。

学園長室につくと、ネギはノックをする。

「学園長、ネギですが何か御用でしょうか？」

「おお。ネギ君か、説明するから入ってきてよいぞ。」

「分かりました、失礼します。」

挨拶もほどほどに中へと入るネギ。

「へ？」

ネギが学園長室に入って待っていたのは、いつものように椅子に座る学園長と、

「来たか、ネギ先生。」

ソファーにもたれかかるエヴァンジェリンであった。

「ええっ。なんでここにマクダウェルさんがっ？」

先に襲われた事実から、あたふたしながら困惑した様子を見せるネギ。

「まずは落ち着きなさい。ネギ君。」

それを見かねた学園長が、ネギに呼びかける。

「なに、要はこういうことさ。ネギ先生。」

エヴァンジェリンが右手に持った封筒を掲げる。

その封筒には、《決闘状》と書かれていた。

「…決闘…ですか。」

封筒に書かれている文字を認識したネギの喉が鳴る。

「ああ、私が負ければ坊やの要求を聞こう。だが、私が勝てば、封印が解けるまでその血を吸わせて貰う。」

エヴァンジェリンが挑戦的な笑みをたたえて、鋭い視線でネギを射抜く。

「もちろん、生徒を襲うこともやめよう。爺にばれてしまったしな。」

ネギは、エヴァンジェリンの視線に真っ向から向かい合い、

「僕が勝てば、話を聞いてくれるんですね？」

「言っただろう？ 要求を聞くとな。もちろん、聞くだけなど愚かな

恥知らず事はしないさ。」

両者の視線がぶつかり、沈黙が降りる。

「いいでしょう。その決闘受けたと思います。」

その沈黙を破ったのは、ネギの肯定だった。

「いいのかの？ネギ君。」

学園長の確認にただ頷くネギ。

「ふふふ。それでこそ、奴の息子だ。受け取れ、そこに場所と時間が記されている。」

エヴァンジェリンが封筒をネギに飛ばし、ネギがそれを受け取る。

「では、私は帰る。用も済んだしな。…坊や、決闘楽しみにしているぞ？」

ドアを開け、立ち去る寸前にエヴァンジェリンがそう言い残し、去っていった。

……

…

「…ということがあってですね。」

簡易的な認識齟齬の術を使い、普通の会話をしているように見せた空間で、ネギはハジメに起きたことを話す。

ハジメは呆れたような、疲れたような表情をしていた。

「それで、勝ち目はあると思っているのか？」

一通り聞き終えたハジメは、まずネギに勝算を聞くが、
「真祖の吸血鬼に、どうやったら勝てるのでしょうか？」

ネギは困ったように頭を掻いて曖昧に返す。

勝てる見込みが無いと、暗に言っていた。

「はあ。それで、俺に助力を求めたと。」

「はい、すいません。迷惑でしたね…。」

うつむき、意気消沈するネギ。

もともと封印されているとはいえ、相手は真祖の吸血鬼であり、数百年を戦いの中で生き抜いてきたとされる存在である。

魔法使いとして未熟なネギが勝てる見込みなど無いに決まっている。

「なぜ、決闘など受けたんだ？勝てる見込みなど無いことぐらい、貴様でも分かるだろうに。」

普段から大人のように振舞っているネギに対し、当然湧いた疑問を投げかけるハジメ。

その疑問にネギは、

「もし、引き受けなければ、他の人が犠牲になるかもしれませんし、それになにより、僕の生徒ですから。僕が逃げては意味が無いと思います。」

と、ネギ自身の考えを述べる。

そんなネギの様子を見て、ハジメは思案する素振りを見せ、

「ふむ、それで決闘の日付は？」

「あ、はい。えっと、この日は、停電する日の夜ですね。」

封筒の日付と、スケジュール表の日付を見比べたネギが答える。

「停電の日の夜か……。闇夜の戦いになる……。か。」

戦いながれているハジメならともかく、戦いの基礎も知らないネギでは話にならないことは明白であった。

「どうしましょう？やっぱり、考えが足らなかったですかね。」

若干涙目になってきているネギを見て、

「そこまで悲観することなからう。いずれは、こうなっただろうかな。」

ハジメは、机においてあったコーヒーを飲みながら、決闘のことを

考える。

確かに、ハジメが戦うならば負けることは無い。

しかし、これはネギが受けた決闘。

だが、あまりにも不公平でもある。それを踏まえて受けたネギが、悪いといえはそれまでだが…。

「明日、マクダウエルのところに行くとするか。」

ハジメの提案にネギが疑問の表情を見せる。

「さすがに、ネギだけを相手にするというのは恥も外聞もなさ過ぎる。」

「は、はは。」

完全に弱者というレッテルを貼られている事実、ネギは乾いた笑みを浮かべるしか無い。

「俺が協力できるかどうかを、明日マクダウエルと交渉してこよう。今日はもう遅いしな。」

気がつけば、職員室の窓の向こうは、夜の暗闇が広がっていた。

「失敗したら、ご愁傷様だな。」

「そんなあ。」

ハジメの冗談めいた台詞に、号泣するネギであった。

第5話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。ではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8391x/>

信念を貫く者

2011年11月27日17時55分発行